

美しい日本
『ごころの旅』

横井 秀治

はじめに

大学時代の一年間、ヨーロッパとアメリカの国々を、リュックを背負い、旅先でアルバイトをしながら、ひとりで歩き廻ったことがあった。その原動力となったのは、見知らぬ地への強い好奇心だった。

それから時が経ち、三十八年間住んだ日本から出て、妻の実家があるテュービンゲン市で家族と一緒に暮らすようになった。

生活をはじめた頃、ドイツの文化・言語・慣習に、自分なりに適応しようと懸命になっていた。そして、再び時が過ぎ、今度は自分が生まれ育った日本を旅したくなり、特に、還暦を迎える数年前から、望郷の念にかられて、日本の各地を訪れるようになった。

「日本での旅は、たのしいですか」
誰かにそう訊かれたならば、

「その土地土地に内包している歴史と自然にふれ合い、地元の人々の声が聴こえてくるし、まして、こちらがその出会いのなかで生じる会話に意味を見出そうとしているときは、それがさらに生き生きしたものになるし、いいですね。それに、日本的情绪を感じ取れますから」

と、答えるだろう。さらに、

「若いころに抱いていた外面へ向けての好奇心が、こんどは自分の内面のこころに関心が移り、今まで経験したことを振り返り、また、今まで忘れていたことを思い出させてくれて、それが現在の自分とどのように結ばれているかを知る機会ともなるので、ふるさと日本を歩くことは、こころの旅をしているようなものです」

と、付け加えるだろう。

ここに載せた十四篇は、北海道から九州までの旅路のなかで、私が体験したことを書き綴ったものである。

目次

- 一 大雪山の春
- 二 東北の人たちと風景
- 三 育ったところ
- 四 越後の山と良寛
- 五 佐渡の里山風景と会津
- 六 草津温泉の民宿
- 七 父子旅
- 八 合掌造りの白川郷と五箇山
- 九 春の京都四人
- 十 奈良の大和路
- 十一 広島と長崎の祈り
- 十二 土佐の人と四万十川の自然
- 十三 水の都松江
- 十四 九州の地

一 大雪山の春

東京駅を発ってから、四時間半が過ぎている。あと三十分したら、津軽海峡の下だ。と、あのことが鮮明に浮かんでくる。

大学一年生の時だった。サークルの夏合宿で北海道の大雪山に登ったことがあった。緩やかな稜線を一週間近く歩き廻っていたのだ。心たのしい時間だった。

その山行が心に強く残り、自分たちが三年の執行学年になったら、再び大雪山に行こうと同学年の山仲間たちと語り合った。そして、三年生になり、五十名のサークル員と一緒に、大雪山系を再び縦走するために青森から北海道へ渡ったのだ。

あの当時は、今のように列車ではなく、青森と函館を結ぶ青函連絡船だった。往きの船中は胸を張って、これからの山登りに心が躍っていた。が、帰路の船上では、頭を垂れて、目からは悔し涙が出た。もう三十八年前のことだ。

全長約五十四キロメートルの海底トンネルに入った。列車は薄暗い中をゴウゴウと軽い音を出しながら走り続けている。

目を瞑ると、記憶があこの時に少しずつ戻りつつある。が、これももし連絡船に乗っていたら、一つひとつのことがさぞ鮮明に想い浮んできたに違いない。特急の列車、それに暗闇だと、回顧への感覚は鈍い。

あつという間に、北海道の地に出た。

車窓から外を眺めると、桜の花がところどころに咲いているのが見える。五月中旬の今、この地ではやつと雪の季節が終わり、春の到来を告げているのだ。淡いピンクの花が木全体を膨らませている。何年ぶりに目にする桜の木々だ。

ところどころに晴れ間が望める空の下、海岸沿いには、青色やあずき色をしたトタン屋根の家々が建ち並んでいる。その横四十メートル先には、小波を立てている海面が横たわっているのが見える。その上を、数羽のカモメが翼を傾けながら飛んでいる。窓を開けたら、打ち寄せる波の音が、潮風にのって聞こえてくるに違いない。

列車が長万部駅を過ぎると、先ほど車内販売の人に注文したカニめし弁当が運ばれてくる。早速、食べ出した。

当時と同じあのカニの味だ。ご飯の上にぎっしり詰まったカニを口に入れると、じわっと汁が出てくる。折り箱にこびり付いているご飯を箸で拾うようにしながら、最後の一粒を口に運んだ。

東京を出発してから、十時間が過ぎている。次々に現われ出てくる景色を目で追った。外は薄暗くなりかけていたが、車内は蛍光灯が窓に反射して眩しいくらいに明るい。あと少しで、札幌駅だ。

人口二百万都市の札幌で二泊してから、再びリュックを背負い、歩いて駅まで行き、特急列車に乗った。

昨日と違って、雲一つない青空の下、列車は広大な平野をつき抜けて、一路旭川へと走り続けた。

車窓からは、果てしなく広がっている代掻きの田と、枝にまだ葉をつけてないポプラの木々、それに洗ったように瑞々しい白樺の葉が、風に吹かれながら春光を浴びているのが

見える。北海道ならではの風景だ。

車掌が検札に回ってきたので、

「この地域一帯は、石狩平野ですか」

と、訊ねた。

「さあ、わかりません」

若い車掌はそう答え、頭を下げながら消えた。

二〇分ほどしただろうか、その車掌が再び私のところに来て、

「調べてみたら、ここら一帯は石狩平野です」

と言って、手元を持っている地図で現在地を示してくれる。そして、

「先ほどは答えることができませんで、失礼しました」

と声を出しながら帽子を取って、再び頭を下げた。

こんなに優しく、親切な車掌がいるのだなと思いつながら、私は外の景色を眺めていた。職務上ではない、その人の誠実さを感じ、このような時、旅がさらに豊かになってくるのである。たとえ、車掌が知っているべきことを怠ったとしても。

旭川駅で三十分近く待って、富良野線の各駅停まりの一両電車で腰かけた。

走り出して、ガタンと停車するたびに、乗客が一人、二人と降りて行く。線路に沿った草地には、モンシロチョウよりも白く小さい蝶が、タンポポと菜の花の上を飛び交い、水田では農夫たちが田植え機を動かしている。遠くには、雪を被った大雪山系の峰々が望める。外の景色が長閑なら、車内の空気も伸び伸びしたものだ。

三十分足らずで美瑛駅に到着。リュックを担いで駅舎を出て、バス停へ向かった。

次のバスがくるまで、あと三時間は待たねばならない。どこかで昼食を摂ろうとして、町の中を歩き出した。と、コンビニの看板が目にとまった。立ち寄ることにした。

店内の棚には、美味しそうな助六寿司とおむすびが並んでいる。それらに手を伸ばした。

駅近くの小さな公園内のベンチに腰かけ、酢の匂いにするおいなりさんを食べはじめた。カラッとした大気、ドイツの空気と似ている。春の陽が肌にとっても心地良い。遠望すると、五月の光をいっぱい浴びながら、十勝連峰が白銀色に輝いている。あそこの麓へ、これから向かうのだ。

バスに揺られ、四十分ほどで白金温泉に到着して、停留所から降りると、十勝岳、美瑛岳、美瑛富士、それにトムラウシの山々が澄み切った大空の下に、くっきりと見える。あまりに間近に映し出されてくる光景に言葉もなく、しばらく立ち尽くし続けていた。と、あそこの稜線を歩いた時のことが、浮かんでくるのだった。

宿を決めなければならない。大きなホテルがいくつか建っていたが、宿泊代が高そうなので、そこを敬遠して、歩き出した。

少し行くと、食事・お土産、それに民宿と書かれた看板が目に入った。二階建ての民家らしき建物である。そこに寄って料金を訊ねると、手ごろである。迷わず、投宿することに決めた。

二階の部屋に入ると、窓から十勝連峰がパノラマのように連なっているのが目に飛び込んでくる。リュックを降ろし、窓を開けた。爽やかな春の風が頬をなでいき、快い。

しばらくすると、宿の主人がやって来て、

「今は、客が誰もいないので、近くを車で案内しますよ」

と、誘ってくれる。それはありがたいと思い、「では、お願いします」

と、返事をしてから外に出た。

私より一代若い主人とのドライブとなった。主人が、隣の十勝岳温泉と白金温泉の違いなどについて語りはじめた。それに耳を傾けていた。

しばらく走っていると、広々とした牧場が一段と高くなっているところに出た。と、主人が車を停めて、

「ほら、向こうのほうに、大雪山の主峰旭岳が見えるでしょう」

と、言った。まさかここから表大雪山系を眺望できるとは思っていなかったので、

「えッ、本当ですか」

と声を上げて、主人が指差した方向に目をやった。と、旭岳から十勝岳まで続く緩やかな稜線に、春の陽がさんさんと降り注いでいるではないか。まるで白銀の帯が、風に揺られながら靡いているかのようだ。私は車から出て、前方の優美な景色に目をやり続けた。

再び車に乗った。道の両側には、雪の固まりがまだ残っている。明日からの山歩きが気になった。それを見抜いたかのように、主人が、

「春の山歩きをするには、まだ早いですよ。登山者は、誰も来ていませんから」

と、忠告した。

「そうですか」

低い声で応えた。

一時間のドライブを終えて部屋に戻り、少し休んでから、夕食を摂るために一階の食堂へ行った。

椅子に座って食べていると、調理場から主人の奥さんと母親が出てきた。主人を含めての四人での会話となった。

私が三十八年前のあの時のことを話すと、五十年近くここに住んでいた主人の母親が、私の顔を見ながら語り出した。

「東京の大学から来た女子学生が、足を骨折して自衛隊のヘリコプターで運ばれた新聞記事を読んだことがあったわ」

あの事故をうつつすらと覚えていた。彼女は、続けた。

「当時は、大きな黒いなべをキスリングの上のせ、女だか男だか見分けのつかない学生たちを、よく目にしたものだった。今は、あのような若者を見かけないが」

それを聞いていた主人が、

「今は、皆軽いリュックを背負つての日帰り登山者が多い。それも、女性たちと中・高年の人たちだ。男は、ここでもはじけ者だよ」

と、言った。それを耳にした主人の母親が、

「皆、スマートになったもんだ」

と、笑い声を上げた。

ここの家族と二時間近くも話をしていると、ここの家族を以前から知っていたかのような錯覚に陥ってくる。

しばらくして部屋に戻り、自分で布団を敷いてから風呂場へ向った。

硫黄のにおいのする熱い湯が、滔々と湯船に注いでいる。そこに、山から引いた冷たい

水を、自分で混ぜながら調節するのである。ほどよい湯加減になったので、ひとり小さな湯船に浸かった。

温泉の湯は心地良いものだ。身体と心を解してくれる。タイルが黄色くなって、蛇口に砂がこびり付いたようになっていたが、山奥ではこれも趣があつていいものだ。

十時過ぎ、寝具の中に潜りこんだ。が、掛け布団が重くて、それを跳ね除けると、寒さを感じて、なかなか寝入ることができないでいた。それでも、自然と眠りについた。

目を開けると、部屋はうつすらと明るくなつていた。布団から出て、厚いカーテンを引くと、遠くに白と黒の色をした十勝連峰の稜線が浮かび上がり、山の中腹には、濃い霧が立ち込めていて、それらが白樺の木々などを包み込んでいるのが見える。なんと幻想的な光景なのだろう。眺め続けた。

腕時計をのぞくと、明け方の五時五分前である。再び寢床に入ったが、もう眠ることはできない。三十分ごとに立ち上がっては、窓に映る山岳風景を眺めていた。山は動かないが、周りの大気は絶えず動いているのがわかる。

七時前、共同のトイレで用を済ませてから、洗面所で顔を洗い、外に出た。

澄み切った青空の下、山の新鮮な大気を吸いながら、足の向くままの散策である。ウグイスの鳴き声がどこからともなく聞こえ、白樺の芽吹き音までも、耳に入ってくるような静けさだ。目線を上げると、十勝岳頂上付近の火口から、噴気が糸を引くように立ち昇っているのが望める。また、ウグイスが鳴いた。

部屋に戻ってから、朝食を摂り、宿を出て、雪がまだ残っている山へ向かって歩き出した。

九時過ぎの日射しは、もう強い。ドイツから持ってきた麦わら帽子を被りながら、アスファルトの一本道を歩き続けた。この時期、観光客の姿はなく、主人が言ったように登山者は誰一人としていない。

しばらくすると、登山口の標識が目に入ったので、そこへ向った。

土の道となった。ウグイスの声に誘われるようにして歩いてきた。一時間ほどすると、熊笹を覆っていた雪の固まりが、平らな雪原に変わった。雪山の装備をしていないので、これ以上進んで行くのは危険だと思い、引き返すことにした。

と、どこかでカサカサと音がした。昨日主人がここら一带は熊の好きな食べ物豊富にあるとも語ったことが浮かんだ。そう思うと、もういけない。雪路を下りながら、妻子のことを思うことしきり。登山路ではない、遊歩道を歩くことにしよう。

宿を出てから三時間ほど経ったが、誰とも出逢わない。百メートル下に、赤い屋根の国立大雪青少年交流の家が目に入ったので、そこへ向かった。

大きな建物前にベンチを見かけたので、そこに、「よっこらしょ」と声を出して腰かけ、靴を脱いだ。靴下はびっしりである。それを絞りながら、もう年なのだから、いい加減にしろと自分に言い聞かせた。山に入ると、足が自然と進んでしまうから怖い。

ベンチに座りながら上を仰ぐと、富良野岳、十勝岳、美瑛岳、それにオプタテシキ山が一列に並び、その稜線がくつきりと白く望める。なかなかの眺望だ。

一時間近くベンチで休んでいると、足の筋肉がしだいに張ってくるのがわかる。下の白金温泉まで歩いて行けるだろうかと不安になった。

足をいくら引きずりながら宿に帰り、主人が作ったラーメンを食堂で食べてから、部

屋に戻った。

二時間ほど横になってみると、疲れが取れてきたので、昨日目にした大雪山の最高峰旭岳を再び眺めようとして、下の食堂に行った。すると、主人が、

「六キロメートル先の、昨日のところまで、車で連れて行きますよ」

と言ってくれたのを聞き、よろこんだ。

車から降りると、旭岳、間宮岳、化雲岳が連なっている表大雪連峰、それに十勝連峰が横に並ぶように浮かんでいる。比類のない眺望だ。こんなにも緩やかに横に伸びた線を、今まで見たことがあっただろうか。高さは二、〇〇〇メートルの山々だが、スイスの四、〇〇〇メートル級に匹敵するような横長に並ぶ大パノラマだ。三十分近く、心ゆくばかり眺め続けた。

主人は私を車から降ろしたあと、家に戻ったので、車道を歩いているのは、私ひとりだけである。前面の雄大な遠景を背にして、宿へ向かった。

大雪山系に登った記憶をたどっている自分が、今ここにいる。あの時、サークル員の一人が足を骨折して、ヘリコプターで運ばれたのだ。計画通りに行かないで、途中で引き返した夏合宿。それに、東京に戻ってから適切なではなかった、執行学年の一員としての私の行動。自分には「共に」という意識が欠けていたのだ。それと、周りの人たちに支えられていたことを自覚しなかった自分。しかし、あの時に味わった体験があったからこそ、今の自分があるのだ。

過去と現在を結ぶ物語が、心の中で湧いている。過ぎた日の出来事、それも苦い経験を見つめれば見つめるほど、今に至るまでの自分をしっかりとたどることができている。これは、年を重ねてきた人に与えられた特権だろう。それをバネにして、さらに生きていかねば。若い時分は、体験した意味の深さを知り、物語を創ることはできない。

夕刻の六時過ぎになっても、まだ澄んだ青空である。このような日は珍しいに違いない。春の穏やかな夕陽に、まだ雪で覆われている大雪山系が照り輝いている。立ち尽くして、眺め続けた。

宿に着くには、まだ四キロメートルはある。再び、道を歩き出した。

二 東北の人たちと風景

高校二年生の夏だった。クラスメートに誘われて、彼の祖父母が住んでいた信州の山村で一ヶ月間過ごしたことがあった。都会で暮らしていた私だったので、その時の経験は新鮮で、心弾んだものだった。

毎日、田圃のあぜ道を抜け、蝉の声が鳴り響く林の中を歩き廻ったり、食卓にかならず並んでいる手作りの野菜とタクアンを口に入れたりしていた。当時のことを想い出すと、今でも浄福感に浸ることができる。

また、長野県の小谷村に建つ共働学舎というところで、ハンディを持った人たちと、米や野菜を作ったの自炊生活を二週間ほど体験したことがあった。大自然の山麓で暮らす人と自然との共存するコミュニティの場だった。

自然と触れ合っていたのは、それだけではない。大学二年生の時には、年に三分の一近々の日々を山で過ごしていた。いつの日か、山小屋の主人になりたいと夢見たこともあった。

それらの経験は今でも私のこころの奥底に潜在し、ふと心を揺さぶる時がある。そこで、それを見つめることも大切だと思い、旅に出ることにした。行き先は、原風景が残っている東北地方と決めた。その日が来るのを待った。

岩手県

日本へ向かう飛行機に搭乗する前は、いつもなら「日本へ行く」という気持ちになっていたのだが、今回は、「日本に帰る」という心境になっていた。これから二週間の東北地方でのひとり旅。心は躍っていた。

五月七日午前八時に成田空港に降り立ってから、東北新幹線に乗るために東京行きの電車を待っていた。と、聞き慣れた日本語によるアナウンス、それに見慣れた人の姿、「いいなあ」と思いながら電車を待っていた。

車窓からは、微妙に異なる緑の色彩が見え、田圃で腰を折って、稲の苗を植えている人の姿も目に入ってくる。時々現れては消えるツツジの花が、五月の陽をいっぱいに浴びて、眩しいくらいに赤紫色に輝いている。それらを眺めていると、心が自然と和んでくる。新緑の若葉に新しい息吹を感じ、線路沿いの雑草の緑にさえ躍動感を覚えるのである。

東京駅で昼食用の弁当を買い、東北新幹線に乗った。

走り出すと、前の席に座ろうとした若者が、こちらを見て、「背を倒していいですか」と訊いたので、「どうぞ、どうぞ」と応えた。そう言えば、前回の日本旅行でも、私が座っていると、一人の青年に礼儀正しい言葉遣いで声をかけられたことがあった。折り目正しい若者もいるものだ。

先ほど駅構内で買った「竹の子ごはん」と鯛めしの駅弁を味わいながら食べ終えてから、ボトルの水を飲むと、胃に届く前に「ああ、幸せだ」と口から漏れた。しょうゆ味の匂いが残るなか、車窓に映る景色を見るではなしにしばらく眺めていた。と、ウトウトとなってくる。

目が覚めると、もう仙台駅を過ぎていた。まだ二時間も経っていない。新幹線の速さに驚くと同時に、日本が狭く感じるのだった。短いトンネルを入ったり出たりして、磁石に吸い込まれるようにして、車両は走り続けていた。

何枚もの田に、水が張られ輝いている。その奥に、藁葺き屋根の家が肩を寄せ合うように建ち並んでいる。遠くに目を移すと、山々が連なっているのが望める。これから歩きながら、目にする自然と人間とが共存する里山の風景を想像するだけで、私の胸は早くもときめいていた。

盛岡駅構内の観光所で、これから二泊する手ごころなビジネスホテルを探してもらってから、リュックを再び背負い、そこへ向かった。

室内は狭いが、寝るだけのスペースはある。これで十分だ。飛行機内で眠ってないことと、時差ボケとでベッドに横たわると、目が自然と閉じた。

目が覚めると、夕方の五時過ぎである。外に出て、市街地へ向かって歩き出した。少し行くと、旭橋の上に出た。左遠方には、残雪が筋のように残っている岩手山が望め、

橋下には雪解け水の北上川が滔々と流れているのが見える。

どの通りを歩いていても、歩道の幅は広く、人の姿をそう目にしない。それだけ、こちらをゆつたりとした気持ちにさせてくれるのである。

時々行き違う女性は、もっちりした容姿の人が多い。自転車に乗っている老若男女は、サドルを低くしてゆつくりと漕いでいる。ぶつかってくるような危険をまったく感じない。走っている自動車の数も少なく、ここは人と通りが調和しているようだ。

野菜と果物が並んでいる店をのぞくと、子供の足くらいの太さの山芋が三百五十円で売られていた。なんと安いのだろう。一パック百五十円のイチゴも目にする。小さくて形は不揃いだが、匂いがいい。地元の土の味がするだろうと思い、買った。部屋に戻ったら、食べることにしよう。

市内の中心地にある岩手城跡の公園内に足を踏み入れると、淡い紅色であるソメイヨシノの花はすっかり散っていたが、桃色の八重桜の花はまだ枝に半分近くを残して咲いていた。足元に目を向けると、風によって運ばれた桜の花びらが、水溜りの水面で泳いでいる。立ち止まって、その動きを目で追った。

町を見渡せることができる城跡に立つと、楓の若々しい葉が風に揺られてサワサワと音を立てているのが耳元に入ってくる。瑞々しい緑だ。葉をひるがえしながら、風と踊っている。どの木々の葉も未来へ向かって、秘めた生命エネルギーを放出しているかのようだ。静かな佇まいの公園内を、ゆつくりと歩き続けた。

翌朝、起き出してから、昨日商店街で手に入れた蜂蜜を食パン上にとっぷりかけての朝食である。この蜂蜜、地元で作った食料品を売っている店で購入したものだ。コンビニで買うよりも三倍の値はしたが、地元産はいいものだ。土地の人の匂いがする。

ホテルを出て、新幹線に乗って次の駅である新花巻へ向かった。十分ほどで新花巻駅に到着。早速歩き出した。

人と車の姿はない。水を張った田圃には、青みがかった数センチほどの苗が、縦横に規則正しく並んでいる。あぜ道には、枯れたタンポポと菜の花が太陽の光を浴びている。

二階建ての農家の屋根がところどころに見える。どの家々も大きく、庭はきれいに手入れされて、何種類もの花が咲いている。それが辺りの自然と調和しているのである。このような風景に出合いたかったのだと思いながら、歩き続けた。

二十分しても、目的の建物が見えてこない。道を間違えたと思い、畑で野良仕事をしている人に声をかけた。

「宮沢賢治記念館へ行きたいのですが、この道を歩いて行けば、いいですよね」

「違いますよ。反対の方向ですよ。新幹線の向こう側に記念館が建っていますよ」

今来た道を引き返すことになった。回り道となったが、朝の新鮮な大気を吸いながら、爽やかな気分を味わう。足どりは軽い。通りで見かける小さな白い花をつけたハナミズキの木が、とても愛らしく見える。

駅に戻って、反対側の出口に立つと、宮沢賢治記念館と記された標識が目に入った。

十五分も平坦な道を歩いて行くと、坂道になった。樹木の茂った道を一步一步進み、登り切ったところに記念館が建っていた。

今回の旅で、最も訪れたかったところだ。と言うのも、宮沢賢治のいくつかの童話作品を読むと、仏教とキリスト教から、彼は自分の生きていく方向性を掴みとっていたように

映り、その生き方と考え方をものごとく知りたくなつたからだつた。

そう広くない館内を二回ほど廻つて感じたことは、彼は多くの分野に関心を示し、好奇心の強かつた人だつたのだと知つた。それに、彼の生活様式は宗教、それも法華経とキリスト教から力を得ていたと同時に、それだけ悩みも多く抱えた人だつたのだとも思つた。

それは彼の童話作品『注文の多い料理店』『セロ弾きのゴーシュ』に、深く読み取ることができる。日本の長い歴史を持つ仏教と、西洋のキリスト教の教えのなかに主人公は身を置き、最後は日本の伝統文化に感謝する内容である。主人公が作者のように、私には思へた。

本音と建前の社会のなかで暮らしていた宮沢賢治が、そこで心の平安を得ていたのかについて心をめぐらせた。それを探ろうとして、あるところへ行くことにした。そこへ向かう前に、歩いて十分のところにある賢治童話村に寄ることにした。

童話村に入り、小高くなつていいる広場に腰を下ろすと、野球場の面積ほどの芝生の上で二組の家族が座つて、お弁当を食べている姿が目に入った。

その横では、五歳ぐらいの男の子が父親とバットとボールで遊んでいる。少し離れたところでは、仰向けになつて本を読んでいる人もいる。周りは、木々の萌えるような緑の葉に囲まれ、人が木と花と草に添つているのである。驚くほど静かだ。

快いメロディーが、スピーカーを通して微かに聞こえてくる。空気がおいしく、春光が心地良い。おとぎの国にいなるような、平和な気分になつてくるのだつた。前に広がる光景を眺め続けた。

立ち上がり、次の目的地へ向かつて歩き出した。

お昼はどうに過ぎている。空腹を覚えながら歩いていると、そば処の暖簾が見えた。昨日八百屋で目にした山芋を食べようと、トロロそばを注文する。

器の底に残る一滴を飲んだあと、店を出て再び歩き出す。

少しすると、新渡戸稲造記念館へ五百メートルと記された文字が目にとまった。そこへ足を延ばすことにした。

日本の土壌で育まれ、『武士道』なる本を英語で著し、国際場裏で日本と外国との橋渡しをした新渡戸稲造。五千円札の肖像画ともなつて、国際的に活動をし、キリスト教に篤いアメリカ女性と結婚した人だ。

その彼は、日本ではなく、異国の地で妻に看取られながら、どのような思いで七十一歳の生を閉じたのだろうかとの思いとなつた。自分に課せられた目標と役割を持ちつつ、己の道を歩いた人だ。

富裕な質屋の長男として生まれ、結婚をしなかつた宮沢賢治。もし彼が異国の女性と結婚していたら、と想像しながら館を出た。

田圃が続く道をゆっくりと歩いていると、風がいくらか吹き出してくる。ドイツから被つてきた麦わら帽子が飛ばされそうになつたので、手で押さえた。

四十五分が過ぎた。そろそろ着くころだろうと思つていると、賢治詩碑の矢印が目に入った。あと少しだ。

花巻市街の建物が見え出した。

家々の庭に、丹精に手入れされた木々や花を見かける。それらが、目と心をたのしませてくれるのである。雪の多いこの地方で、こんなにも多くの花を見るとは想像もしなかつ

た。雪に閉ざされているからこそ、春になって大地から咲く花を待ち、それをたのしむ心がこの人たちには人一倍あるのかもしれない。自然が生活のなかに入っているのを感じながら歩き続けた。

やっと、こんもりした樹木の立ち並ぶところに到着。

高村光太郎の筆による、

「東ニ病氣ノコドモアレバ行ツテ看病シテヤリ……。ミンナニ デクノボートヨバレ……。サウイフモノニ ワタシハナリタイ」

の碑の前に立った。

宮沢賢治が三十七歳で逝く前に、ノートに書き綴ったこの「雨ニモマケズ……」の文章の内容をもっと知りたいと思った。

デクノボーを幼い心を持った人、純粹な人のようにも読み取れる。果たしてそのような人は、いるのだろうか。自分を知れば知るほど、それができないことを人は知っている。彼の心のうちを察することはできるが、実践となるとほとんど不可能に違いない。

そして、最後に「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」と動詞で結んでいる。死を直前に意識した人が、なぜそのようなことを書いたのだろうかと考えた。

しばらくその碑の前で立ち尽くしてから、数歩行くと、彼の言葉がいくつも並べてある掲示板のようなものを目にする。そこに、

「わが求むるは まことのことは」

と、あった。それも、「まことのことは」が二重に綴られていた。それを目にして、ハッとしてさせられた。周りの、そしてすべての人たちの幸せを願う、彼の心を読んだ気がした。その文字を見続けた。美しいと思った。

一時間近くこの碑のところに立ち尽くしてから、花巻駅へ向かった。

庭に咲いている花を至るところで目にする。庭がない家では、鉢に花を植え、玄関先に出している。花の世話は、愛情がないとなかなかできないだろう。家の外に置いてある鉢を見るたびに、ここに住んでいる人は温かい心を持っているのだろうと想像した。

今立っているこの道を、この町で生まれ育った宮沢賢治はシンプルで、より純粹な心で、すべての人たちが平安であるようにと願いつつ、歩いていたに違いない。

夜ベッドに入るが、なかなか寝つかれないでいた。と、彼のこと浮かんてくる。

「ケンジさん、人間の声になる前の音を、あなたは作品のなかで擬声や風の音などとしてよく書いていましたね。それらは、人のことば声として果たして表現可能なのでしょうか。でも、真実の声は、私たちが正直になることよって表現できますよね」

「ケンジさん、あなたは農民の姿になろうとしましたね。当時の農民の厳しい生活苦を、あなたは体で聴き取ったのでしょうか。と同時に、彼らは苦しみのなかにあっても、小さなよろこびがあったと、わたしは想像するのです。それを、あなたは肌で感じ取ることができましたか」

「ケンジさん、あなたは悩みも多かったことでしょう。でも、あなたが逝ったあとで、地元の人たちがあのような記念館を建て、私たち一人ひとりに現実とファンタジーの世界を示し、私たちの生をより豊かにさせてくれます。そこにこそデクノボー、いや純粹な幼心が湧き出てくるのです。それこそが、ケンジさんの求めた『まことのことは』のように思うのです。それを気づかせてくれて、ありがとうございます」

「ケンジさん、あなたの真心をもっと知りたく、あなたの書いた文を再び読んでみます。この地にいると、そんな気持ちにさせてくれるのです。ありがとうございました」

青森県

翌朝、再び宮沢賢治のことを思いながら部屋でパンを食べたあと、リュックを背負って盛岡駅へ向かった。

八戸駅で乗り換えてから、青森県に入ると、新緑の葉をつけた森が多くなってくる。列車は、冬の間中、雪を被っていた針葉樹の替わりに、広葉樹が、「私たちの出番よ」と言いながら、杉などを押しつけて幅をきかせているようだ。

陸奥湾の海岸線が見え出してくる。あと少しで、青森駅だ。

コインロッカーにリュックを入れてから、目の前に見える長いベイブリッジへ向って歩き出した。五月の光をいっぱい浴びて、海面は小波に揺れながら輝いている。広い海を眺めていると、心までも大らかになってくる。

さらに行くと、十五階建ての三角形の入口前に出た。その建物内に入ると、ちょうど日に二回上演している津軽三味線の演奏がはじまる場所だった。一階フロアの簡易スタジオ前には、九、十名の人が丸椅子に腰かけていた。私も、その輪の中に入った。

五メートル先で、三十代ぐらいの女性が、目を閉じながら三味線を奏で出した。

張りのある高い音が耳底に伝わってくる。この乾燥した風土によく響く音質だ。その曲が終わると、紺色の布に花模様を彩ったハッピー姿の彼女が目を開けた。澄んだ瞳である。

次は、津軽じょんがら節を弾き出した。三味線を半目で見ながらの演奏である。その顔は、法隆寺の百済観音像のような。

変化あるテンポの粋な音に魅せられながらの二十分間が過ぎていった。

三味線の音色が耳に残るなか、今度は二階で上映しているパノラマ画面を観ようとして、映像室へ向かった。

三百六十度のマルチスクリーンに、青森の自然豊かな景色とねぶた祭りの迫力ある光景が映し出されてくる。圧倒されながら観ていた。二十年以上も、日本の夏祭りを体験していない私。いつか本物を見たいと思った。

十階のレストランに行き、昼食を摂っていると、秋田の民謡がカセットテープから流れってくる。それを耳にしなから、日本のしっとりとしたご飯を食べ続けた。

窓の向こうには、津軽半島と下北半島が横たわっているのが望める。しばらくその景色を眺めてから、再び下で演奏される三味線を聴きに行った。

今回も、聴衆は午前と同じ九、十名である。一曲、一曲が終わり、三曲目に入った。と、かけ声も出てくる。私たちが手を長く打ち続けると、三味線の音が伸びてくる。それにつれて、彼女の顔が薄紅色に染まっていく。熱が入ってきたのだろう。音が一段と高く響くようになった。が、過度に主張しない妙なる調べだ。耳を傾け続けた。

心も腹も満ちた気持となって駅に戻り、コインロッカーからリュックを取り出して列車に乗り、今夜の宿泊地へ向った。

弘前駅の観光センターで安い宿の電話番号を聞いてから、そこに連絡すると、空いているとのことである。

早速そこへ行き、室に入り、少し休憩してから外に出た。

暗くなった通りを歩いてみると、地下一階がフードセンターになっている、イトーヨーカドーの建物が目に入った。足が自然とそちらへ向いた。

あるはある、懐かしい食料品だらけだ。それらを目にしていてだけで、心が膨らんでくるのである。

一時間ばかりここにいと、どの棚に何が並んでいるのかはすぐにはわかるものだ。八時過ぎの今は、ビニールパックに入った生ものやサラダなどに、店員が五十パーセント引きのマークを付けている。それらを目にしながら、自分の好むものを買ひ、部屋に持ち帰った。食べることで心が豊かになるのを知るのは、異国で日本食を口にすることができない人の特権だろう。

翌朝、ホテルを出ると、昨日までの快晴とは違って薄い雲が空を覆っている。セーターを身につけていても寒いくらいだ。二十五分ほど歩いて行くと、町の中心地にある弘前公園前に出た。

水堀に架かっている橋を渡ると、ソメイヨシノ桜は散っていたが、八重桜や枝垂れ桜、それにオコンの花はまだ咲いていた。至るところで見かける薄紅色のツツジの花が、目をたのしませてくれる。

桜の並木道を進んでいると、二羽の鴨が前を横切つて土手の草をつつきはじめた。私の姿に怯えもせずに草を食んでいる。ドイツで見かける鴨よりも小さいが、体は引き締まって、羽毛の縞模様がとても鮮明である。ネッカー川の鴨は面が綺麗だが、日本の鴨は線の流れが華麗だ。周辺の木々からは、野鳥の囀る声が聞こえ、太陽の柔らかい光が桜や楓や松の木々に注いでいる。ゆつくりと歩き続けた。

本丸前に来ると、ベンチを目にしたので、そこに座った。

前面には、雪がまだ残っている岩木山が望める。飽きることなく眺め続けた。風は冷たいが、日が照り出してきたので、ちょうどいい気温である。自然と気持ちがゆったりとしてくる。

公園内には植物園もあったので、そこへ向かった。

入口のところで切符を売っていた人が、

「四月二十日ごろが桜の見どころでしたね。約二百万人が来訪しましたよ」

と言ったのを聞いてから、園内に入った。

木や花の名前が書かれて札の文字を読むたびに、うれしくなってくる。ねむの木、サトザクラ、ネコヤナギ、トチノキ、ケヤマハンノキ、カエデなどと記されている。

テュービンゲンの大学植物園に私はしばしば行くが、ドイツ語とラテン語の花名を読んでも歴史をまったく感じられない。しかし、日本名だと、言葉そのものに歴史をみる思いとなつて、心が弾んでくるのである。

自分も、この木と共に未来も生き続けて行けるような気持ちになるから不思議だ。自然の前に立てば、何もかも忘れ、心が洗われていく。その自然を破壊してはならないだろう。それは人間を壊していくことにつながるからだ。

植物園を出て、公園内の広い芝生のところに行くと、家族連れがお弁当を食べている姿を見かける。私もコンビニで買って来たおむすびをバックから取り出して、口の中に入れた。私と同年齢ぐらいの人が、孫の手を引いて、「お手てつないで……」の童謡歌を唄いながら、前を通り過ぎた。私も口ずさんだ。

三時間近く公園にいてから、次はねぶた村観光施設へ向った。

目の前には、実物大の十メートルの高さのねぶたが立っている。係りの人がその由来などについての説明をはじめた。

その人が、最後に見学者一人ひとりがテープから流れる笛に合わせて、二本の棒を持って、直径一メートルの太鼓を三十秒近く叩くこともできると話した。もちろん、私も挑戦することにした。

実に爽快だ。あまりのたのしさに、三十秒が過ぎても両手の動きは止まらない。しばらく打ち続けた。

三分ほどが経っただろうか、ばちを置いた。でも、さらに続けたくなり、係りの人をお願いして、再び叩くことになった。

音と体が一つになってくる。実に気持ちがいい。どのくらいが過ぎたのか、わからない。息切れと同時に腕の筋肉に疲れを感じ出したので、ばちを置いた。

呼吸が整ってくるにしたがい、暑い夏のなか、笛に合わせながら裸で太鼓を鳴らしたいものだと思った。十分も打ち続ける力は、今の自分にはないが。

次のコーナーは、津軽塗、こけし、こまなどの製作実演の場である。私の足がこぎん刺しの前で止まった。

地元の女性が藍色の麻手織地に、白い色で幾何学的な模様を刺している。彼女の脇には、でき上がった作品がいくつも並んでいた。落ち着いた色合いの布だ。これを、昔の農民は仕事着や普段着として使用していたのだ。彼ら一人ひとりが普段の生活のなかで、いかに快い美を求めていたかがわかる。

この観光施設を出ると、もう五時過ぎである。どこかで食事を摂ってから、部屋に戻ることにしよう。

秋田県

いつものようにパンに蜂蜜をかけての朝食を済ましてから、シャワーを浴び、リュックを背負い外に出た。

これから四時間近くは列車の席に座っていることになる。おむすび三つと飲物を駅の売店で購入してから、各駅停まりの列車に乗った。

車窓に映る景色を見ながら昼食である。潮の香りのする海苔で巻いたおむすびが、体に溶けこむのを感じながら食べ続けていた。

辺りを見回すと、乗客は三、四名である。駅に停まるごとに一人降り、一人乗る。田圃や畑地に寄り添うようにして建っている農家が、ゆっくりと消えては現れてくる。緑豊かな自然のなかを、列車は走り続けていた。

乗換駅で、駅員が発車寸前の列車に、「二人のお客をお願いします」とアナウンスをした。お客は駆け足で階段を上り下りして車内に入った。なんと優しい情景なのだろう。ドイツでは決して考えられないシーンだ。このようなことをしても、時間通りに正確に走る日本の列車。外国人には、驚きに映ることだろう。

時刻通りに、羽立駅に到着。バスに乗って、男鹿温泉郷の国民宿舎へ向かった。いくつかの村を走り抜けると、雨がポツリポツリと降り出してくる。

三十分ほどしてから、バスを降りた。と、風が強く、寒さを感じ出す。早速、早足で宿

に行った。

フロントで、「今日の朝、予約した者です」がと言ってから、鍵をもらい、八畳の和室に入った。先ず、冷えた体を暖めようとして温泉に浸かることにした。

湯船に二十分も入っていると、体がほてって、心までも伸びてくる。

今度は夕食を摂るために、食堂に行った。十種類の小皿に、色とりどりのおかずが盛つてある。ご飯と味噌汁からは、湯気が昇っている。一つひとつ、ゆっくりと味わいながら食べ続けた。

夕食を済ましてから、温泉郷の中央に建っている交流会館へ向かった。八時半からはじまる「ナマハゲ」の実演と太鼓の音を聴くためである。

太鼓の音と共に、鬼の面をつけた三人のナマハゲが観客三百人の前に踊り出て、いろいろな仕草を繰り広げはじめた。

それが終わると、六人による太鼓打ちになった。皆、地元の二十代の若者たちだ。これが凄いい。ドド、ドドーンとの音が、こちらの腹を突き抜けて、体全体に響いてくるような三十分間なのである。

女性二人がたたく太鼓の音も力強く、笑顔を見せながらもたのしそう。男性四人も体全体で、力の限り打ち続けている。彼らの汗が飛び散っているのが、遠くからも見えるのである。その汗に、未来へのエネルギーをみる思いになった。「よい時代を創れ」と声をかけたくなってくるのだった。感動のあまり、涙ぐんだ。

宿へ戻る途中、空を見上げると、星が瞬いている。明日は晴れるだろう。

朝食の時間となった。目の前には、納豆、のり、山芋、シヤケ、生卵などの醤油で味が引き立つものが並んでいる。慣れ親しんだ品々だ。納豆は今回の旅で初めてである。湯気の立った温かいご飯の上に納豆をのせて口の中に入れると、糸を引いた感触がたまらなくいい。続けて、味噌汁を一口飲む。贅沢な味だ。ぜいたくと思える自分は、幸せだ。

フロントで、一泊二食付七千六百円を払い、これから歩くコースについて訊ねると、「かなりありますよ」と疑うような目でこちらを見ながら言った。昨晩も、ここの従業員の一人に、明日歩いて行くコースを知らせると、驚いた様子で、「遠いですよ」と忠告された。白いヒゲを生やしているので、お爺さんのように映ったかも知れないが、気は若い私だ。行けるだろう。

リュックを担ぎ、宿を出て歩き出すと、ウグイスの澄んだ声が聞こえてくる。青空の下、草と土それに新緑の織りなす道を進んだ。

野に咲く花が、時々草むらから顔をのぞかせている。その上を、モンシロチョウが舞っている。車に乗っていたら、この空間のよるこびを味わうことはできないだろう。

五キロの緩やかな坂道を登ると、三五四メートルの八望台に到着する。正面には太陽の光をいっぱい浴びている日本海、反対側には雪の峰々の奥羽山脈が望める。戸賀湾に入港する船が、白い尾を引いて走っているのが見える。静寂な光景だ。

展望台では、数名の若い人たちが防腐剤のニスを塗っている。懐かしい匂いだ。学生だった頃、足をよく運んだ越後の山小屋でも、五月の雪解けの季節になると、木板にニスを塗ったものだった。

筆を運ばせている二十代前半ぐらいの青年に、声をかけた。

「あなたは、この男鹿半島の人なのですか」

「いえ、秋田市から来ています」

「昨晚、ナマハゲと地元の若者たちが打つ太鼓の音を聞いたのですが、とてもよかったです」

「そうですか。彼らが出す音量には、迫力がありますから」

「そう言いながら、青年はニスを丁寧に塗り続けていた。

「あなたも若いし、がんばってください」

「ありがとうございます」

青年は筆を止めてから、こちらを見てお辞儀をした。それを目にして、うれしくなった。

再び歩き出すと、道端で、ひとりのお年寄りが大きな袋を背にして立ち上がろうとしているのが目に入った。その人に近寄った。

「フキでも採っていたのですか」

「いや、……だよ」

お年寄りは、腰を上げて言った。その言葉がわからなかったので、訊き返えた。それでもわからなかったので、また訊いた。「いんによ」だと聴き取れた。

「どのようにして食べるのですか」

「……」

お年よりはこの地方の方言で話すので、なかなか理解できない。

「何歳ですか」

「八十歳だよ」

顔を見ると、失礼なのだが、ナマハゲのような面相である。お年寄りと一緒に歩くことになった。

「若いころは、農業をしていたのですか」

「いや、北海道へ出稼ぎに行ってた」

「奥さんと一緒に暮らしているのですか」

「ハア、ばばアになって……」

さらに行くくと、分岐点となった。お年よりは右の道へ向かおうとした。ナマハゲに触れると、縁起がいいと聞いていたので、別れ際にその人の背に触れた。おじいさんはニッコリした顔をこちらに向けた。

私は左の道に進んだ。三十分ほどの山道を下ると、戸賀湾の海岸線に出た。

しばらく行くと、食堂と書かれた看板が見えた。店内に入って、生うにを注文した。一分もしないで、お皿の上に二ヶ出てくる。指先で触ると、ハリが動く。口に入れると、潮の匂いがする。今日獲れたうにだ。

再び、海岸線を歩き出した。生うにの味が口に残るなか、さらに歩を進めて行くと、リュックが次第に重たく感じ出す。旅はまだ続く。無理をしてはいけないと思い、バスと電車に乗り継いで、次の宿泊地へ向かった。

翌朝の八時過ぎ、リュックを背負い、秋田駅近くの簡易ホテルを出た。

列車に乗るまで、まだ時間があったので、駅構内のベンチに座り、人の流れに目を向けていた。若い人の服は、自然と醸し出す美しい体型があるので、どのような色合いの布でも合うが、中高年の女性はそうはいかないだろう。その点、今日の前を通っている五十、六十代の人たちの服地の色と柄が、渋くていいのだ。新たな発見だ。

そろそろ列車に乗る時刻となった。ベンチから立ち上がり、ホームへ向った。

列車は四十分ほどで角館に到着。駅から商店街を抜けて行くと、武家屋敷の通りとなった。今までとはまったく違う静かな佇まいである。黒い色で塗られた板塀の上に、巨木のしだれ桜の枝が垂れている。花は散ってしまっていたが、若いす緑の葉が枝にしっかりとついて、命の循環を感じるのだった。

昔の面影を宿した通りには、薬面門が並んでいる。その一つの門を潜り、屋敷内に足を踏み入れた。と、約二百五十年前に造られた建物とよく手入れされた庭が目にとまった。美しい。それに接客の間やいくつもの障子に仕切られた部屋や庵や台所などを見ていると、日本建築の開放性と転用性が感じられ、あまり物を置かない簡素な住居の暮らし振りが伝わってくるのである。

日除け戸を拭いていた人がいたので、声をかけた。

「手入れなど、この広い屋敷内を管理するのは大変ですね。ボランティアの活動としてやっているのですか」

「いいえ、市から賃金を得てやっています。この家の持ち主は、市に貸しているのです」桜のシーズンは終わり、観光客の姿をあまり見かけない。静かな通りをさらに歩いて行くと、三千坪もある青柳家の薬面門に出た。敷地内の建物に、三百年以上前から使用されていた品々が展示されていたので、足を踏み入れた。

品々の一つひとつが、何と精妙で細部の表現が巧緻なのだろうと思いつつ見回して廻っていた。これらを生活のなかで使っていた武士たち、いや当時の日本人たちだ。今朝、秋田駅で人の流れを見ていて、服の色と柄に魅せられ、そこに生命力の源を感じた私でもあった。武士たちの使っていたこれらの品々に感動を覚えるのは、言うに及ばずだ。時空を超えたようになって、一時間以上もこの建物内をいってから外に出た。

と、庭の片隅で団子を売っている店を見かけたので、そこに寄って、団子一つを買い、売り子さんに話しかけた。

「あそこに直径四十センチほどの、背の高いフキが池のなかに並んでいますね」

「ええ、秋田おぼこと同じ背丈はあるでしょう」

「おぼこ？」

「娘さんのことです。そのおぼこも都会へ行くようになって…。でも、エーターンと言う語もあるのですよ」

「エーターン？」

「秋田のAをとって、再び戻ってくることです。誰でも、ふるさとがあつて、心安らぐところがいいですよ」

「そうですね。自分は日本に住んでいないので、とくに、そう思いますね」

そう言ったあと、私は五十代のその女性に、何か秋田の民謡を歌ってくださいとお願いすると、ゆつくりとした流れのメロディーの歌を唄い出す。この人が話す口調もゆつたりとしている。この角館で生まれ育った人たちの特徴なのだろうと思った。それを聴いてから屋敷を出て、吉野桜が立ち並ぶ土手のところへ向かった。

土手の並木道には、今は花の姿がない。向こうには桧木内川が流れ、それに沿って芝生が広がっている。その上で、中学生の団体が四く五名輪になって、お弁当を食べていた。時々キヤーキヤーとの笑い声が聞こえてくる。たのしいことだろう。私にもあのような時

代があったのだ。

中学生三名が、「こんにちは」と言って、すれ違って行く。こちらも、「こんにちは」と応じる。「いいなー」との言葉が口から漏れた。

列車に再び乗り、何度も乗り換えて、やっとのことで山形県の鶴岡駅に到着する。日はすでに没していた。

山形県

朝リュックを再び担ぎ、歩いて鶴岡駅に行った。そして、コインロッカーに荷を入れてから、観光案内所の無料貸出しの自転車で乗って走り出した。

明け方まで雨が降っていたのだろう、路面は濡れている。風がいくらかあって、ドイツから被ってきた麦わら帽子が飛ばされそうになった。

商店街を抜けると、庄内平野の田圃が一面に見え出してくる。車の影もなく、田植えをしている人もいない。農家が数軒寄り合い、その奥に新緑の葉で覆われた山々が連なっているのを目にしながら走り続けた。

ここで生まれ育った人は、この地を出ても、心に宿り続けているこの光景を懐かしんで、いつかここに還ってくることだろう。そんな郷愁を思わせるところだ。

二時間近くゆっくとペダルを踏んで走っていた。腕時計をのぞくと、列車に乗る時刻が近づいてきた。駅へ戻ることにした。

少し行くと、町を貫流している内川に架かる橋の上に立った。と、川べりに建つ木造の家と緑の枝、それに野草が水面に映っているのが見えてくる。私の好きな藤沢周平の作品に描かれている風景だ。自転車を停めて眺め続けた。ここが、彼のふるさであることを知るのだった。

観光案内所に自転車を戻してから、リュックを再び背負いホームへ向った。

列車は日本海の海岸線に沿って走り、小さな坂町駅で停まった。

駅前食堂でラーメンの大盛りを食べてから、今度は、二両編成のローカル電車の席に腰かけた。

走り出すと、緑のなかに点在する農家の屋根と、深く茂った木々の山肌が見え出してくる。これから行くところは、さらに山奥だ。濃い緑の山々が迫ってくるに違いない。

しばらくすると、二十一年前のことが浮かんでくる。

筑波大学を卒業した一人の女性が、社会福祉分野のことを勉強したいと熱望してテュービンゲンに訪ねてきたことがあった。その女性に何かできるのではないだろうかと思ひ、高齢者及び障がいのある人たちが住んでいる施設などをよく案内した。彼女は私の家にも頻繁に来て、よく食事を共にした。そして、一年後日本に帰った。

風の便りで、彼女は夫と共に農業をして、二人の子供がいると聞いた。その彼女が住むところへこれから行くのである。どのような暮らしをしているのだろうか。

電車は小国駅に到着する。まず、駅前の簡易旅館に荷物を降ろしてから、彼女に電話すると、明朝車で迎えに来てくれることになった。

日が傾くまでには、まだ時間があったので、町を見下ろすことができそうな山へひとり登り出した。

三十分もすると、朝日連峰が遠くに見えてくる。さらに登って行くと、雪で覆われてい

る飯豊山（二、一〇六メートル）の山容が目に入ってくる。どっしりと横たわっている山だ。眺め続けた。

翌朝、人気がまったくくない小国駅前で待っていると、車の中で片手を振りながら、彼女がこちらに走ってくるのが見えた。私も手を振った。

ニコニコしながら座席から降りた彼女と握手を交わしてから、車に乗った。早速、彼女に話しかけた。

「元氣なんでしょう？」

「昨年の冬、炭焼きの作業をして、根つめてやっていたので、体を少し壊してしまいました。手が……」

ハンドルを握っている彼女を見ると、当時のふっくらした面影は消え、二人の子供を育てている母親の顔だった。

しばらくすると、彼女が言った。

「ここが日に二回走っているバスの終点、大石沢です。これからさらに行ったところが私たちの部落です。八家族が住んでいます。小国の最奥にある集落です」

車はさらに新緑の山間を抜けるようにして走り続け、一軒の農家らしき家の前で止まった。

「ここが私の家です。古い建物を、夫と私が床板を取替えたり、継ぎ足しをしたりして改築しました」

「あそこにニワトリ、それにアイガモも数羽いるね」

「私たちが飼っています。むこうに田圃もあって、米も作っています。ここは雪が多く、そのときは、二階の窓から出入りします」

彼女は玄関の戸を開けた。あとに続いた。

居間兼台所に足を踏み入れると、山小屋で使用するような薪ストーブが目に入った。その横には、干し柿が四つ、五つと垂れ下がっている。一瞬、山小屋に来たような感じになったが、家族が暮らしている空間は、一目でわかる。

厚みのある黒つぼく輝く大きなテーブルをはさんで、彼女が語るここでの生活に耳を傾けた。この時間、夫は山で仕事、二人の青年は学校にいるとのこと。ほうじ茶を飲みながらの歓談である。

話のなかで、彼女は長男が寮生活をしている基督教独立学園についても触れた。それを聴き、「その高等学校を見学したい」とお願いすると、快く肯いてくれた。

昼食を摂ってから彼女に連れられて、その学校へ向った。

家から車で五分走ると、大自然のなかに校舎と寮、それに牛舎などが建っているのが見えてくる。車から降り、道を歩いていると、生徒たち一人ひとりから、「こんにちは」とのかけ声をもらう。生きいきした声である。

彼女は歩きながら、この学校についての説明をはじめた。

聖書を基にして真理を求め、自ら考え、大自然から学び、共に生きる人間となっていく教育を目指していると力説した。全校生徒七十五名、全員が寮生活である。感受性の強い年齢の彼らが、ここで共に暮らす経験は、のちの生活に豊かなものをもたらすに違いないと思った。

車に再び乗って家に戻ったあと、この自然豊かな地を歩きたくなり、ひとり山道に入っ

た。

三十分もすると、ブナの木々の茂みとなった。それにつれて、あることが気になり出した。それは歩き出す前、彼女から、「ここら一带は熊が出ますよ」と言われたことだった。あまり奥へ入らないことにしよう。

一時間して家に戻り、テーブルを囲んで、彼女の手作りのクッキーを食べながらの談話となった。気がつくとき、ここを発たねばならぬ時刻である。

彼女の運転する車に乗って、小国駅へ向かった。

発車した電車の窓から外をのぞくと、仕事を終えた彼女の夫が急いで駆けつけて来たのだろう、二人並んで手を振っているのが見えた。こちらも手を振り返した。

走っている列車の窓に映る自分の顔を見ながら思った。東北地方を旅していると、人も草木も大地にしつかりと根を下ろして生きているのを感じ、そうすると、私の心が膨らんできたのは確かだ。そこには、自然と共に暮らす、日本の原風景があったからだろう。

存在には、二つあるだろう。一つは、目に見える存在で絶えず変化がある。もう一つは、目に見えない記憶の存在で変化がない。

この年齢になってくると、後者の存在をうれしく思うようになってくる。特に、目に見えない記憶の存在は、外国に住んでいる私にとって、生まれ育った日本の地が、時と場を替えた異次元の世界でもあるのだ。

現実の世界だけではなく、異次元の世界を、わが身一つで経験できたことをよるこぼろ。それが、自分の生をより豊かにしてくれているのだから。

ドイツに戻るまで、あと数日間はある。日本の大地の空気を思い切り吸って行こう。

三 育ったところ

受付で宿泊代を払い、ベッドシートを手にして一階の室に入ると、ベッドと小さな机、それに三畳ぐらいの広さを掃除するための箒とちりとりが置いてあった。いくら狭い空間だが、一泊三千円と安いのがいい。

一メートル四方の窓から外を眺めると、薄暗やみの中に松林が見える。先ほどまで、大時代代の山の仲間たちと、丹沢付近の山々を久しぶりに歩いてきたので、身体は疲れ切っていた。早速、掛け布団にシートを取り付けてから、ベッドに潜り込んだ。

六時半、起き出してカーテンを引くと、四月下旬のやわらかい朝日が松葉の間から輝くように入ってくる。

窓を開けると、小鳥たちの鳴き声の替わりに、カラスの声が聞こえてくる。それも二羽や三羽ではない。カラスの大合唱だ。

外を眺め続けていると、中学生たちが朝のジョキングをしている姿を見かける。ここは、一九六四年の東京オリンピックで、選手たちが寝泊りしていたところである。今はユースホステルとなっていた。

さあ、東京での一日のはじまりだ。

共同の洗面所で顔を洗い、自室に戻り、昨晚コンビニで購入した食パンにドイツから持

つてきた蜂蜜をぬつての朝食となった。窓から入ってくる爽やかな朝の風に、蜂蜜の香りが溶けあい、ゆったりとした気持ちで食べ続けた。

八時過ぎ、代々木のオリンピック記念青少年総合センター内にあるユースを出て、幼児期から大学を卒業するまで暮らしたところへ向かった。

小田急線に乗って、新宿駅で降りてから、山手線に乗り換えようとホームを歩いていると、人、人、人の群れである。その流れに入ると、群れから外れるのがひと苦労だ。今も、当時と変わりはない。

電車に乗ると、身動きができないほどである。左右に揺れるたびに、体が隣の人に触れる。周りを見回すと、携帯電話の画面をのぞいている人が多い。それも、若い女性たちばかりだ。日本の女性たちよ、手元の画面で今日の職場についての情報を得ているのかもしれないが、遠くに近くに視線を向けてはと思ってしまう。一人ひとり、しゃれた服を身に着けているのに、目の輝きを見ることができないのはさみしいかぎりだ。

つり革につかまっていた私の手が、前にいた女性の茶髪に一瞬触れた。女性は振り返り、こちらを一瞥した。怖いものだ。

四つ目の目黒駅で降りて改札口を出ると、駅前広場である。四十数年前と広さは同じだが、周囲の建物は当時のままではない。トン喜で食べたとんかつ店は、今はない。あのやわらかい肉とシャキッとしたキャベツの食感、特別だった。当時は贅沢な味だった。

ビルの谷間を歩いて行くと、自然教育園前に出た。さらに進むと、歩道に白い花のハナミズキや赤いツツジの花、それに夏みかんの木に実がなっているのを目にする。私が住んでいた頃は、通りに緑の木々がそうなかったのだが、今は違っていた。

さらに行くと、結婚式などが催される八芳園が見え出してくる。その門の前を通ると、あのことが浮かんでくる。

夕方の五時過ぎになると、毎日、東京新聞の夕刊百部を肩から背負って、その一部を八芳園に届けていたことがあった。小学五年から中学二年までのことだった。それで得た毎月千五百円の賃金で、時代劇が好きだった私は、東映の映画をよく観にいったものだった。今目を閉じてても、美空ひばり、中村錦之助、大川橋蔵、それに片岡知恵蔵などの姿が浮かび上がってくる。ラーメンが四十円の時代だった。それに、八芳園の前を通ると、学校から下校中の好きな女の子としばしば出逢ったものだ。あの時は恥ずかしいやら、複雑な気持ちだった。

仲の良かった、小学校のクラスメートの一人が、言ったことを今も思い出す。

「よこい、初恋って知っているかよ」

「初めて恋したことだろ」

あの彼女、今はどうしているのだろう。

さらに進むと、白金小学校前に出た。学校から一分もしないところに住んでいたのも、授業がはじまるチャイムが鳴るのを聞いて、登校していたものだった。

当時、学校のそばに並び建っていた牛乳屋、肉屋、豆腐屋、それにパン屋は今はない。コッペパンに揚げあがった熱いハムフライを挟み、ソースをたっぷりかけてのあの味と匂いを、今でも思い出すことができる。

少し行くと、私が住んでいた中二階建ての家はもうなくなつて、時間貸しの駐車場となっていた。隣の八百屋と写真店も跡形もない。今は車が十台ほど置かれてあった。変わっ

てしまったものだと思いながら、その駐車場の一角にしばらく立ち尽くしていた。と、当時ここで、親そしてきようだいと暮らしていた時分のが想い出され、とくに、母の姿が鮮明に浮かんでくるのだった。

私が学校から戻り、玄関の戸をガラガラ開けると、母はいつも四畳半の居間兼仕事場で、長い裁縫台を前に座っていた。私の「ただいま」の声を聞くと、母は少し顔を上げて、「おかえり」と優しい声で返事をし、手を休めずに着物を縫い続けていた。耳を澄ますと、今でもあの声が聞こえてくる。

当時父が不在だったので、母は私たち子供四人を育てるために、毎晩夜遅くまで着物の仕立てをしていた。子供たちが布団に入ってから、隣の四畳半部屋にはずつと明かりが灯っていた。母はいつ床に入っていたのだろうか。

私が起きる頃は、隣で寝ていた母の姿はなかった。台所のトントンという音でいつも目が覚めた。私たちを育てるのが生き甲斐とも語った母だった。

また、私たち子供四人のうちの誰かが病気で熱を出すと、母はその子の枕元にみかんの缶詰やバナナを置いてくれた。それは、私の家ではとても貴重なものだった。それを口にしなから、熱が早く下がらないようにと願った。と言うのも、いつも仕事と家事に追われている母が、私の枕元にしばらくの間、居てくれたからだった。

その母は、七十歳で逝ってしまった。早過ぎた死だった。目を瞑った。

当時住んでいた家の周辺の建物はなくなっていたが、通りはそのままだった。この通りで、近所の仲間たちと、メンコやビー玉や釘さし遊びをしたものだ。皆、今はどのような暮らしをしているのだろう。

百メートルほど進んで行くと、若い学生たちの姿を見かけるようになった。明治学院の大学生たちだ。

女学生たちはいろいろな服を着て、おしゃれを感じる。テュービンゲンの学生たちは、男も女もほとんどジーンズと簡単なシャツを身に着けているだけだが、日本の女子学生は違う。バッグまでも様々で、ファッションショウを見ているようだ。社会に出る前までの彼女たちのたのしみなのかも知れない。それを許している日本の社会だ。

明治学院大学の正門前を通って、十分ほど行くと、昔通っていた港区立高松中学校の校舎が見え出してくる。

校門の前に立った。あまりの違いに、目が丸くなった。古びた木造二階の校舎が、鉄骨コンクリートの五階建てになっていたからだ。

門の横に立っている掲示板を読んでいると、今は一学年三クラスあって、一クラス三十数名となっている。昭和の団塊世代の私たちの時は、一学年十クラスの編成で、一クラスの人数は六十名だった。集団の力動性のなかで、様々な経験をしたものだ。

校舎前の花壇には、いろいろな花が色鮮やかに咲いている。あの当時、花などを校舎内で目にするのはなかった。誰が世話をしているのだろうかと思いつながら、花壇を眺めていた。

鍵のかかった鉄柵の校門前でしばらく立ち続けてから、道幅二メートルの狭い坂道を下った。この道を歩いて学校に通ったのだ。数分もしないうちに、高いビルディングのみやこホテルが見え出してくる。再びビルの谷間を縫うようにして進んだ。

ふと、腕時計をのぞくと、十二時を過ぎていた。少し先にコンビニがあったので、そこ

に入り、おにぎり四つとりんごジュースを手にして店を出た。と、通りの向こう側のビルディングが目に入った。

あそこは、当時は小学校のクラスメートの家だった。毎週一回、夜の八時になると、彼の家に行っていたことがあった。目的は、白黒のテレビジョンに映る力道山のプロレスを観るためだった。画面の前には、いつも近所の遊び仲間が十名ぐらい畳の上に座っていた。テレビが出はじめた頃のことだ。

笛吹童子、赤胴鈴之介、月光仮面などの名前が浮かんでくる。それに、胸を弾ませながら、漫画の本を借りに貸し本屋にもよく通ったこともあった。遠い過去の記憶に存在するものが、途切れることもなくふつふつと湧き出てくる。

五分ほど行くと、緑の木々に囲まれた広い公園が見え出す。そのなかに入り、木のベンチに腰かけて、おにぎりを食べ出した。雲一つない青空の下、爽やかな風を肌を感じながらの時間である。

数十メートル先では、小さな子供たちを連れられた若いお母さんたち七、九名が、木の下にビニールシートを敷いた上で昼食を摂っている。

赤子に乳を飲ませているお母さんもいる。多分、広い道路を挟んで建っているマンションに住んでいる人たちなのだろう。皆の笑い声が軽やかな風に乗って、こちらまで響いてくる。数えると、四つの小集団が芝生の上で輪になっている。毎日ここに来て、どんな会話を交わしているのだろうか。

昔はこのように平和な光景を目にすることはなかった。そのような余裕はなかった。子育ての彼女たちの姿が眩しく映る。妻も若い頃、このような輪の中に入っていたら、たのしかっただろうに。知的ハンディのあるミヒヤエルに毎日追われていた日々の彼女だった。

昼食を済ませてからも、目の前に映る光景を眺めていた。と、金髪のお母さんとおそらくハーフの幼児二名が公園内に入ってきて、ビニールシートを広げ、その上に腰かけた。

しばらくしてもその親子は、三人のままにいる。近くにいる日本のお母さんたちも、子供たちも、彼らのところには寄らない。三人とも寂しいのではないだろうか。複雑な気持ちで、その情景を眺めていた。

ベンチから立ち上がり、ユースホステルに戻ろうと目黒駅へ向かって再び歩き出した。頭の中では、当時経験したことが、今の自分とどのように繋がっているかに考えが集中していた。が、なかなか答えを見出すことができないでいた。

再び山手線の電車に乗って、原宿で降りてから歩き出すと、都内で一番広いといわれる代々木公園の入り口前に出た。

園内に入ると、緑の木々と芝生が、春の陽を浴びながら広がっている。このような優しい風景が都内にあるのを、二十数年間東京で暮らして知らなかつた。

土道を歩いていると、ジョキングをしている人や、若い男女のカップルや、グループで輪になって芝生の上に座りながら歓談している人たちを見かける。それに、自転車で乗っている中年の女性や、小さな池の側で横笛を吹いている男性、それと親子連れの家族や、視覚障がいのある人と手を結んで駆けている伴走者なども目にする。皆、生きいきしている姿ばかりだ。

人ばかりだけではない。犬たちも自由に駆け回ることができるランという柵の中で、他

の犬を追い駆けたりして、たのしそうに走り回っている。

ふと、立ち止まると、体長十五センチぐらいの亀がのそりのそりと歩いているではないか。そばに女性がいたので話しかけた。

「あなたの亀なのですか」

「ええ、そうですよ」

「毎日ここに来るのですか」

「週に二回ぐらいの割りりで、ユウちゃんと散歩しますよ。このユウちゃん、わたしが仕事から帰ると、真っ先にわたしの足の甲にのるのですよ」

中年女性は、ユウちゃんが自分の子供のようだと、ニコニコした顔で語った。

時々、カラスの鳴き声を耳にしながら足に任せていた。生き物たちは、ここでよろこびを見出しているのだ。自分もそうだ。先ほどまで考えていた、過去の経験と今の自分との繋がりがどのようなものかということが再び浮かんでくる。当時の経験があったからこそ、今をたのしんでいられるのだ。それを、ただ素直に有るがままに受けとり、感謝するだけだ。

五時過ぎにユースに戻り、一休みしてから青少年センター内にある大きなレストランに行った。

一日中歩き廻っていたので、空腹となっている。レストランの入り口で、六百七十円の食券を買い、中華、和食、麺類などの十種類ほどの品々から、自分で選んだものを持ってテーブルに着いた。

辺りを見回すと、皆のお盆にはサラダとデザートがのっている。ここは飲料水とサラダとデザート、それにご飯と味噌汁の御代わりは自由なようだ。それに気づき、二杯目のご飯と味噌汁、それと旅で欠けていたサラダを摂り続けた。

ここのおかずは、昔親しんだ日本の味だ。それに、大勢の中学生たちと引率の先生たちと一緒に食事である。若い人たちを見ながら日本食を口に入れてみると、自分の若い頃のことを思い出してくる。と、ここにずっと居座り続けたくなくなった。

よろこびで満ちた胃と心で自室に帰り、五、六名が入れる風呂場に行った。

五月の連休前なので、宿泊客をあまり見かけない。湯船には、私ひとりだけである。しばらく浸かっていると、近所の遊び仲間と銭湯に入り、その帰り道、駄菓子屋で時々ラムネを飲んだことが浮かんでくる。あの味、今も覚えている。

湯につかり続けた。

四 越後の山と良寛

ドイツを発つ前、密かに思っていたことがあった。それは、日本の自然や里山風景にふれ合うなかで、何を感じ、それが今の自分とどのように繋がっているかを知ることだった。

上野駅を早朝に出発して、鈍行列車を三回ほど乗り換え、新潟県の小出駅に午後三時に到着。リュックを背負い、ひとり改札口を出た。と、昔のままの光景が飛び込んでくる。

ここに何度来ただろうか。優に二十回は超えているだろう。青春時代の入口ともなった駅だ。

小さな駅前広場の向こうには、昔風の木造家屋が並び、広井屋旅館と記された看板が今も玄関戸にかかっている。あそこに泊まったことがあったのだ。

夏の盆踊り大会のことだった。山小屋から町に下りてきて、この住民と一緒に時間を忘れるほどに太鼓の音に合わせて踊り、そのあと、あの旅館に泊まったのだ。もう三十年以上も前のことだ。

その隣にお土産を売っている店が、今も軒を出している。一人で店番をしていたあのおばあさん、今どうしているのだろうか。山小屋へ向かうバスの待合時間があると、あそこに寄って話をしたものだ。いつもお茶を出してくれたあのおばあさん、今生きていたら九十歳を越えているだろう。

隣の浦佐駅は上越新幹線が止まるようになって、駅周辺は変わったと聞かすが、ここは以前のままで。人影の疎らな広場に、二人のタクシー運転手が暇そうに煙草を吸って客を待っている姿も昔のままだ。

当時リュックを担ぎ、いつもここに立っていたが、今もそうだ。変わったとしたら、黒かった髭が白くなってきたことぐらいだろう。

日が暮れるまでには、まだ三時間はある。明るいうちにこれから宿泊する山小屋に着きたい。

広場にあるバス時刻表を見るが、日に三便ある奥只見行き最終バスは出たばかりである。さて、どうするか。ここからタクシーに乗ったら、四十五分はかかり、かなりの金額を払うことになるだろう。かといって、この町の宿に泊ったら、素泊まりで六、七千円はするに違いない。若いころにしたようなヒッチハイクをする気はない。よし、行けるところまで歩き、長いトンネルはタクシーに乗っていけばいいのだ。

町並みを抜けると、道の両側には黄緑の稲穂が広がっているとところもある。今まさに刈り入れを終えた田圃が、茶色の土を見せているところもある。農家の庭には、これから色をつけようとする柿の実がたわわになって、水田の上にはとんぼが羽ばたいている。秋を知らせる風景に懐かしさを覚えながら歩き続けた。

もう少しでトンネルだ。そこからタクシーに乗ろう。二十分ほどでトンネルの出口に着くだろう。

車を運転している人は、湯之谷村の女性である。四季折々ここに来ていた私だったので、何人かの村民を知っている。その人たちが今どのように暮らしているのかを、五十代半ばの彼女に訊ねると、詳しく話をしてくれる。

ある年の正月、これから入ろうとしていた山小屋に行くことができなかったことがあった。大雪のためだった。仕方なく山の仲間と村の民家で、四日間、毎日地酒の八海山を飲んで過ごしたことがあった。

そのことを話すと、彼女が、「わたしの家は、その民家の前にあるのですよ」と言った。薄暗い照明のトンネルをやっと抜けると、目の前に銀山平の懐かしい山並みが見えはじめてくる。タクシーから降りて、歩き出した。

三十数年前は小石混じりの土道が、今はコンクリートになっている。十年前この付近で、温泉が湧き出たとかで、ロッジや温泉センターも造られたと聞いたが、周りの山々の景色

は当時と変わりにない。

濃い緑の樹木で被われている山肌を目にしながら一本道を進んで行くと、時々ひぐらしの鳴く声がどこからともなく聞こえてくる。静かだ。山の静寂だ。九月下旬の今、車での観光客はいない。

道端にアケビがなっている。一つ採って、その実を口の中に入れ、にがみのある小粒の種をプツと吐き出した。甘味が舌にほのかに残った。人家のない道をさらに進んで行くと、一軒の民宿が見えた。

玄関の戸をガラガラと開けると、奥からエプロン姿の女性が現われ、

「あれっ！ 横井さん」

と声を上げ、驚いたような顔で私を見つめた。

「うちのものを、すぐ呼んできます」

彼女は早足で奥に消えた。

一分もしないで主人が現われた。

「あんれえ！ 横井さんではないか。ドイツから来たのか」

「ええ、そうです」

「お茶でも飲んでいきなはれ」

「ええ、でも、外は暗くなりかけてきたので、明日、ゆっくり伺います」

主人と少し立ち話をしてから、これから入る山小屋の鍵を受け取り、再び一本道を歩き出した。

十分ほどすると、駒ヶ岳と中岳の偉容が見え出してくる。さらに進むと、クリーム色をした屋根の山小屋が、広い草地にポツンと建っているのが目に入った。私が卒業した大学のワンダーフォーゲル部所有の蛇子沢小舎である。青春が詰まったところだ。歩くテンポが自然と速くなり、恋人に会うかのように胸がときめきはじめてくる。

鍵のかかった戸を開けた。と、小屋独特の木の湿った大気が私の体を包んでいく。窓を一つひとつ開けるたびに、その空気が飛び散り、新鮮な山の風が流れ出してくる。懐かしい匂いだ。

窓辺に立ち、薄暗くなりかけた外を眺め続けていると、体全体ががよろこんでいるのがわかる。高く伸びたススキの上を、赤とんぼが輪を描いている。以前と変わらぬ光景だ。それを見つめていると、山の仲間とここで過ごした日々が次々と浮かんでくる。あの時はあんなこと、こんなこともあったと。

日が山の端に沈み、暗くなり出した。無人の小屋には、今も電気は流れていない。ランプを灯し、ひとり夕食の支度に取りかかった。

一ヶ月前に、学生たちが残していった米と缶詰がある。これで十分だ。久しぶりに鉄釜で炊く米。厚い木蓋を揺らしながら、湯気がプーと音を立てて昇り、それらがランプの灯りで輝き出している。旨いご飯が食べられそうだ。

翌朝、三十人ぐらいは寝られる小屋でひとり眠っていると、小鳥たちの囀る声で目が覚めた。小屋から出ることにした。

山の谷間には、まだ薄い霧が漂っている。山道を歩き出した。息を深く吸い込むと、朝露に濡れた瑞々しい大気が体の隅々まで入り込んでくる。山の朝の爽涼だ。何度となく山靴で踏み歩いたこの道、慣れ親しんだこの景色、立ち止まっては眺め続けた。

今、自分は越後の山に居るのだ。ここに居るのが信じられない気持ちでもあった。先ほどまで透いていた空が、いつのまにか澄み切った青空に変わっている。ふと、気がつくくと、靴が朝露でびっしょり濡れて重たい。小屋に戻ることにしよう。

昨日残したご飯で朝食を済ませ、学生たちが書き綴った小屋日記を読み耽っている、開け放した窓から、爽やかな風が頬を撫でるように渡ってくる。彼らの文章から目を放し、耳を澄ますと、谷川の水音が聞こえてくる。読み続けていた日記帳を床に置き、その音のする方へ向った。

数分で川原に出た。水はゆったりと流れ、川床の小石がユラユラと白くなったり、青くなったりして揺れている。一際大きな石に腰かけた。ここで、岩魚やニジ鱒を釣ったことがあったのだ。

あれは、大雨のあとのことだった。川の水は濁り、飛沫を上げて勢いよく流れていた。針に川虫をつけて竿を垂らしていると、尺の魚が釣れたのだ。あの手応えは、今でも覚えてる。

川辺を一時間ほど歩いてから、山小屋に戻り、昨日立ち寄った民宿に行った。

主人夫妻と、お茶を飲みながら、この周辺の出来事やお互いの家族のことを語っていると、当時のことが想い起こされてくる。妻が初めて日本に来て、直ぐにここを訪れた話も出た。あの時、ミヒヤエルはまだお腹のなかだった。同年齢のこの主人と、銀山湖でボートを走らせて一緒に釣りをたのしんだ話も出た。

彼と話していると、当時のままの時間が今ここに居るように思えてくる。その彼から、自ら包丁を入れた川魚料理をいただく。今日の山小屋での夕食は、舌と胃をよろこばしてくるだろう。

夜、ひとり山小屋に居ると、学生時代に過ごした山仲間との日々が止めど無く浮かんでくる。あの時分、山登りに傾けた情熱があったからこそ、今も毎夏、家族と一緒にスイスやチロルの山々へ行っているのだ。そして、当時の情熱が、私を今もここに来させ、よるこびをもたらししてくれているのだ。

目の前で燃え続けているランプの灯りをしばらく見続けてから、床板の上に敷いた薄い布団に潜り込んだ。

翌日、小出駅から鈍行列車で二回ほど乗り換えて、日本海の港町寺泊に着くと、日が暮れかけていた。

早速、観光案内所に行き、これから二泊する宿を斡旋してもらった。歩いて三分のところにある大きな民宿まで歩いていった。

部屋に入り、リュックを下ろしてから窓を開けると、海は望めないが、潮の薫りが漂ってくる。外に出ることにした。

歩いて二、三分で船着場に着くと、家族連れの人たちが釣りをしている。小さなアジとサヨリを釣っているらしい。子供の「とれた、とれた」の歓んだ声が聞こえてくる。

幾重にも連なる波の彼方に目を向けると、長く横たわっている佐渡ヶ島が望める。フェリーで二時間と聞くと、意外と近く感じられる。

一時間半ほど海辺を歩き続けてから宿に戻った。そして、食堂に行くと、食膳にズワイカニ・アサリ・カレイ・マグロの刺身などが並んでいる。さすが漁港の地だ。こんな海の

幸を、今まで口にしたことがあっただろうか。ゆつくりと味わって食べることにしよう。広さ六畳ほどの部屋に戻ると、布団がすでに敷かれてあった。

辺りに目をやると、細長い宴会の場を、分厚い襖でいくつも区切っているせい、隣の室からの灯りが継間から漏れているのが見える。それに、古い木造の建物のせい、天井の隅には蜘蛛の巣が張っている。しかし、これも旅心をそそるものだ。まして、明日はどうしても一度は訪れたかったところへ行くのだ。心は浮き浮きしていた。

朝六時に起き出し、散歩に出かけた。

海岸では、もう何人かが釣り糸を垂らしている。潮風を受けての散歩は快い。朝の山歩きは清々しい気持ちになるが、早朝の海岸では、心が軽くなって広がったようになる。

宿に戻り、朝食を済ませてから小さなリュックを背負い、電車に乗った。

出雲崎駅で降りてから、駅前通りを過ぎてさらに歩いて行くと、稲穂の田圃が見え出し始める。畦道にはコスモスが咲き、その上を黄色い蝶々が飛び交い、ところどころに建っている農家の庭先には、柿の実がなっている。どこからともなくニワトリの鳴く声が聞こえてくる。

午前九時だというのに、もう三十度はあるだろう。雲一つない青空の下、ドイツから被ってきた麦わら帽子と、シャツ一枚の姿でゆつくりと歩き続けていると、路線バスが砂ほこりを立てて走り過ぎて行った。

一時間半が過ぎただろうか、良寛記念館前に出た。

学生時代、鶴見の総持寺に座禅を組みによく訪れ、宿泊したことがあった私だ。良寛の詩歌や書に触れるたびに、自分の生活はこれでいいのだろうか、しばしば反省させられたものだ。彼のことを思うと、いつも「足るを知る」ということばが口から漏れ、自分を知る。それも愚かな自分を。すると、心は自由になるのだった。これから、その良寛に会えるのだ。胸は自然と高鳴っていた。

館内に展示されている詩歌を、一つひとつ観ていた。意味など十分にわからなくていい。ただ良寛が白い紙に向って筆を走らせたものが、今日の前にあるのだ。それだけで、心は満ちていた。

一時間ほどしてから、館を出た。先ほどまでとは違って、今、心がとても静かになっている。その足で、にいがた景勝百選一位といわれる高台に立った。

前方には日本海が広がり、佐渡ヶ島がくつきりと望める。眼下には、江戸時代の佐渡金山や北前船の荷揚げ港として賑わった出雲崎町が横たわり、黒瓦をつけた切妻屋根の家々が、海岸に向うように整然と並んでいるのが見える。そのなかの一つに、一際目立った造りの良寛堂があった。

階段状のトンネルを降りて、そこへ向った。

十分足らずで着くと、地元の庭師らしき人たち六名が、暑い日差しを避けるようにして、小さな堂の下で昼食を摂っていた。私が座る余地はない。仕方ない、少し離れた松の木陰で休むことにしよう。

駅前で買ったおにぎりを食べ出した。座っているとところから、わずか数メートル先に日本海を見据えて座っている良寛銅像が見える。

波の音は聞こえないが、微風によって潮の薫りが漂ってくる。山の静けさは体で感じられるが、海にも静けさがあるとは知らなかった。良寛と同じように、海を眺め続けた。

今度は、松尾芭蕉が奥の細道行脚で詠んだ「荒海や 佐渡に横たふ 天河」の句碑を見ようとして、町並みに沿って歩き出した。と、昔の面影を忍ばせる木の格子造りの軒が目に入ってくる。ここが、往時の宿場町だったことを知る。板で造られた昔風の戸や窓などを目にするたびに、立ち止まっては眺め続けた。

その句碑は幼稚園隣の小さな公園内にあった。佐渡ヶ島から、帰れぬ人を想いながら詠った句だ。それを目にして、胸に迫りくるものを覚える。

そこをあとにして、ぜひ一度行きたかったところへ電車で向った。

分水駅で降りると、町並みの奥に、良寛が三十年近く居を構えた国上山が見え出した。そう遠くないだろう。九月下旬にしては異常に暑い、顔から汗が噴き出してくる。それを拭いながら歩き続けた。

やっと二時間かけて山麓に到着。これからが登り道だ。

左右に樹木で被われている道路を歩いているのは、私ひとりだけだ。何台もの車が、いくつもあるカーブに音を出しながら通り過ぎていく。

十五分もすると、車両が通れない坂道となった。

良寛が住んだ五合庵は、もうじきだ。山中に建つ庵を、写真で何度も観たことはあった。それが今、目の前に現われるのだ。土と木の織りなす匂いがするなかを進んで行くと、少し開けた地が見え出した。

ポツンと建つ草庵の前に立った。一間かぎりの単純な造りだ。ここに、良寛は一七九三年頃から住みついたので。想像していたように、深い森のなかにあった。と、良寛が詠んだ「草の庵に 足さしのべて 小山田の 山田のかわづ 聞くがたのしさ」が、浮かんでくる。

雪の多いこの地帯、冬はいかほどの厳しさがあったのだろう、言語に絶する。まして、老身での暮らしは、この五合庵それに乙子神社の草庵にしろ、並大抵ではなかっただろう。天地自然と自分のいのちとが共鳴しなければ、できないことだ。

財布にドイツのコインが一つあった。それを賽銭箱に入れた。自分の「生」を生き抜いた人だ。目を瞑って、手を合わせ続けた。

これから山を下って、宿に戻らなければならぬ。日差しは強く暑い。歩いたら三時間以上はかかるだろう。バスに乗って戻ることしよう。

良寛はこのような時でも、周りの風景をたのしみながら、村の子供たちとマリつきに興じ、テクテクと歩いていたに違いない。自分のところを大切にして、清貧を貫いた人だから、あのような詩歌が作り出せたのだ。

バスは、良寛が托鉢して歩いてきた道を走っている。彼の姿を想い浮かべながら、流れる行く景色に目を向け続けた。

五 佐渡の里山風景と会津

翌日寺泊の宿を出て、再びリュックを背負い、霧雨が降るなかを新潟湾のカーフェリー乗り場へ向かった。

九時五十分、「佐渡おけさ」のメロディーが流れはじめた。と同時に、汽笛が鳴り響き、巨船が動き出した。と、三十四年前、横浜港から欧米へ向けて一年間の旅にひとり出たことが浮かんでくる。あの時はテープが舞い、「ほたるのひかり」を聞き、胸が震えたものだった。

船の旅は心を揺するものだ。でも、旅なら再び戻って来ることはできるが、島流しになった人たちは、もう帰れぬふるさとを思いつつ、佐渡へ向ったのだ。

船内からデッキに出ると、今まで灰色に垂れ下がっていた雲が割れて、青空が広がりはじめていた。寺泊が遠のいて行き、佐渡の島影が肉眼で見えはじめた。あと少しで、赤泊港だ。

フェリーを降りてから、小型バスに乗り、島の南に位置する小木に到着。ユースホステルへ向って歩き出した。

ひっそりした商店街には、子供の頃に目にした駄菓子店や玩具店、それに雑貨店などが軒を密にして並んでいる。それらをのぞくようにして歩いて行くと、二十分ほどでユースと書かれた標識が見えた。もうじきだ。

玄関の戸をガラガラと開けると、魚の匂いがある。漁師の家をユースにあてているのだろうと思っていると、潮の香りがするような顔をしたおかみさんが奥から出て来た。そのおかみさんにドイツのユース会員証を示し、手続きをしてから二階の畳部屋に入り、リュックを置き、一休みしてから宿根木へ向った。

竹林や田圃や畑、それに農家などを目にしながらの歩きである。道端には、枯れてしまった夏の花を覆い隠すように、薄むらさき色のコスモスがさりげなく咲いている。こちらも、さりげなく通り過ぎよう。

三十分ほど行くと、大正九年に建てられた木造校舎が展示場となっている小木民族博物館前に立った。

この地方の歴史を知ろうと思って建物内に入ると、ここに住んでいた人たちの生活必需品、それに江戸時代の巻物やら人形などが、ところ狭しと棚や机の上に並んでいた。それらのなかには貴重なものがいくつもあって、ほこりを被って積み重ねてある。それを見ると、これでよいのだろうかと思った。

もしここが私のふるさとなら、これらの歴史ある品々をきちんと整理し、説明書も付けて展示したいと思った。いや、もしそのようにしたら、画一的な単調なものになってしまい、訪問者の心に真に響かないかも知れない。ほこりを被り、無造作に置いてあるからこそ、見る者の目を驚かせ、小木の歴史を深く知らせることができるのかもしれない。現に、ここにいると、この村に住んでいた人たちの生活の様子が伝わってくるのだから。

博物館内には、約百五十年前に運搬用として活動していた千石船が、そのままの大きさを復元されていた。その船内を一巡してから、館外に出た。

しばらく行くと、千石船と船大工の里である宿根木が見えてくる。

入江の狭い地形に木造建築、それも船型をした家屋が密集し、納屋や土蔵も林立する家並みは独特だ。小さい女の子が小路で縄跳びをしている。その姿に、この地方の風土と情緒を見る思いとなった。

宿根木で三十分ほどぶらついてから、小木へ向った。

目の前には、断崖と入りくんだ海岸線が続いている。それらを眺めながら、ゆつくりと

一時間ほど歩き続けた。

今度は、小木のシンボルとされている「たらい船」に乗った。

明治初期から岩礁の多いところで、女性たちが直径一・五メートルのたらいに乗り、サザエとアワビ漁をしたという。実際乗ってみると、漕ぐ時に振幅する揺れがなかなかいい。

私の前で、民族衣装に膝から下は茶のストッキングを身につけ、笠を被って漕いでいる女性に声をかけた。

「このたらい船で向こう岸まで渡ることは、可能なのですか」

「以前、寺泊方面までの約五十キロを、十八時間半かけて渡った記録があります」

「そうなのですか」

そう言って、私は彼女の漕ぐ手を見ていた。

ユースへの帰り道、今晚八時半から佐渡おけさの踊りがあるとの看板が目にとまった。これはぜひ見学に行かねばと思い、早足で部屋に戻り、先ほど買った餡パンとクリームパン、それにウーロン茶とで夕食を済ませてから、そこへ向った。

小ホールに八時十分に入ると、約二百席には誰も座っていない。二十分が過ぎても、見物客は私ひとりだけである。と、ステージの幕が上がった。

舞台には、笛と三味線、それにつづみを持った人と歌い手の計六名が着物姿で立っていた。そのなかのつづみを持った人が、マイクを取った。

「これから四十分間、佐渡おけさを含めて四つの民謡踊りを披露します」
私ひとりに向けて、話しかけるように言った。

二人の男性が歌を唄い出すと、三角形の笠をかぶり、着物姿の女性が五名現われ、踊り出した。哀調を帯びた節に、洗練された優雅な佐渡おけさの踊り。そのあとには小木おけさ、これは南国から伝わってきたようでテンポが速く、情熱的である。

それらの踊りを食い入るように観ていた。特に、一番背が低く、おそらく五十歳ぐらいだろうと思われる人の動きに魅せられていた。彼女の動き一つひとつが、絵になるような線なのである。身体と心でたのしく踊っているのが窺えた。片足を上げて半身をひねる姿は、見ていてぐっと引き込まれるものがあった。

この女性、おそらく日常生活では服を着て目立たない存在だろうが、着物を身につけると、凛としたものが体中に走って、人の目を惹きつけるのではないだろうか。日本女性の容姿には着物がピッタリだ。笠で顔立ちはわからないが、全体が美しいのだ。優美なのである。

五百円払った私ひとりのために、計十一名の正装した人たちが歌い舞ってくれたのである。終わった時、私の拍手した音がホールに響き渡った。申し訳ないようなうれしいような気持ちに交錯した気持ちになった。

ホールを出る際、出口に立っていた係員に声をかけた。

「こんな素晴らしい踊り、他に見物客がいなくて残念に思います」

「ありがとうございます。今日は、どこも宴会があるようで、お客さまはそちらに行っているのでしょうか」

ユースに戻ってから、おかみさんに、客は私ひとりだけだったことを伝えると、
「そうかえ、そのようなこともあるうて」
と、笑いながら言った。

「あの人たちは、皆、地元の人たちなのでしょうね」

「そうやえ」

「踊っていた五人のうち、背が低く、五十歳ぐらいの女性の動きに、とくに、魅せられていました。歩いたり足を上げたりしても、着物と白足袋の間に映る素肌を決して見せず、腰から下がピタッと止まっているのです」

「ああ、中村さんのことやね。あの人は、もう六十五才を越えているだえ」

それを聴き、着物姿は老いて艶やかさが増すのではないだろうかと心のなかで思い、そして唸った。

昨晚の素泊まり料金二千八百円を払ってから、ユースを出て、バス停へ向った。

日曜日の午前の今は、小木の町はまだ眠っている。人の姿を見かけない。どの家にも、黄色い牛乳箱が玄関の柱にかかっている、それが懐かしさと呼んだ。子供の頃に飲んだ、あの匂いのする味が口に広がった。

一時間ほどバスに揺られ佐和田に着き、島の中央に位置している国仲平野行きのバスを待っていると、一枚のポスターが目にとまった。そこには、佐渡文弥人形芝居が毎日四回上演されていると記されていた。それもここから歩いて数分のところだ。もちろん、見学に行くことにした。

三百年ぐらい前に大阪の岡本文弥によって語りはじめられた古浄瑠璃から伝わった人形芝居だ。海外でも上演されているらしい。出しものは、あんじゅと厨子王である。

二人の女性が人形を操り、哀愁を帯びた節まわしに、時には速いテンポとなつての動きだ。見物客は四十名ぐらいである。人情劇ということもあつて、皆、終わるころには、ハシカチとティッシュを持って観ていた。

芝居が終わってから、人形を操った女性に話しかけた。

「わたしはドイツに住んでいるのですが、海外でも演じるのですか」

「私たちの座は二人だけで、外国へ行ったことはありません。佐渡に十四ある座のうち、一座は最近ドイツでも演じましたよ」

「そうなのですか」

そう言ったあと、私は彼女の顔を見ながら訊いた。

「二人で大変でしょう」

「片方が病気などで休んだ際は、仕事を持っていく人の誰かをお願いして、代わりにやってもらっています。私たちは、この会社の社員なのです。観光客がこのおみやげ店やレストランに来るように、この人形芝居が客寄せとなつているのです」

彼女は自分がこの会社員であることを盛んに強調し、他の芝居劇も上演したいのだが、それがなかなかできないのだとこぼした。公の援助金はないとも語った。

それを聞き、このような伝統芸能を保護しないと、この文化は廃れてしまうのではないだろうかと思った。

別れ際に、「ありがとうございました」と彼女に言うと、「退屈で、眠たくなつたのでありませんか」と訊いたので、「そんなことは、決してありませんでした。次がどのような展開になっていくのか、興味津々でした」と答えると、今まで深刻だった彼女の顔が優しい表情に変わった。

再びバスに乗って、佐渡中央に位置する新穂村のユースホテルに四時過ぎに到着する。

洋式風の家に入ると、感じのよい居間と食堂、それに部屋にはベッドが置いてある。いい一夜になると思いながら、リュックを置いた。

風呂に入ってから洗濯を済ませ、夕食前のひと時を食堂に置かれてあったソファで休んでいた。と、この女主人が話しかけてきた。

彼女の娘はドイツに二年間滞在していたことがあり、その期間、二回ほどドイツへ行ったことがあると語り、次は、私が住んでいるチュービンゲンにも女友達三人で寄りたいたいと言った。

「ご主人と、一緒に行かないのですか」

そう訊ねると、すぐに手を横に振って、

「夫とは趣味が違うので」

と、答えた。どうも日本の女性は、女同士で旅行をするのがたのしいようだ。特に、中年の女性から、このような言葉をしばしば耳にした。それを聞かされた時に、残されたパートナーはとの思いになるのだった。

もし自分がそのパートナーだったら、耐えられないような気がする。今回気持よく承諾してくれた妻を、ありがたいたいと思った。「あなたが育った国の文化、自然をたのしんでくれれば」と言ってくれた彼女だった。

この女主人、ドイツが気に入っているようで、夕食後もドイツの話となった。その彼女から、明日は自転車を借りて、この地域一帯を走り回ることになっている。いつもより早めにベッドに潜り込んだ。

朝食を済ませてから、ペダルを漕ぎ出した。

青空には、白い雲が浮いている。サイクリングには最適な天気だ。田舎道を走っていると、道端に白く、黄色く咲いているコスモスが目に入ってくる。蝶々が愉快そうに飛んでいる。道の左右には、緑濃い大きな杉の木が立ち並び、その間を縫うようにしての走行だ。

遠くに、低山が連なっているのが望め、かわら葺屋根の農家の周辺には、田圃が広がり、稲穂が今か今かと、刈ってほしいように垂れている。ここが島であることを忘れてしまうほどの光景だ。

走り続けていると、トキの森に入った。

飼育されている朱鷺を、備え付けられてある望遠鏡でのぞいてから、再びペダルを踏み出した。

素朴な佇まいの農村地帯を走っていると、こんなぜいたくな眺めがあるのだろうかと思ってしまう。ゆっくりと漕ぎ続け、数キロほどで加茂湖に出た。

カキの養殖で知られるだけあって、湖畔にはカキの空貝殻が二・三メートルの高さで、いくつも小山のように並べてあった。潮の薫りが、肌に快い。走っている道は農道のせいだろう、車の行き来はない。静かだ。

自転車を止め、波のない湖面をのぞくと、七センチほどの白透明のクラゲが揺れながら泳いでいるのが見える。

再びペダルを漕いでいると、一人のお年寄りが釣りをしているのを目にする。

近寄って、声をかけた。

「何が釣れるのですか」

「いや、遊びに釣っているのです」

「あの飛び跳ねているのは、何という魚ですか」

「ボラだよ。昔は三十センチのキスやらアジが釣れたが、今はのう…」

しばらく話をしていると、浮きがピクツと動いた。お年寄り手早く竿を上げた。キスがつかつていた。

「やっと一匹、獲れたとれたか」

私に顔を向け、ニコツとした。しわが深く刻まれ、濃く色焼けした顔である。この島で暮らしている地元の人だ。

自転車に乗り、再び走り出した。

二キロほど行くと、能楽館と記された標識が見えた。上演もしているらしい。興味を覚え、その館に入ることにした。

八百円払うと、一人の女性係員が私ひとりのために、能についての説明をはじめた。

そのあと、能舞台での観賞となった。約百五十の席に、見物客は私だけである。見せものは道成寺で、演じるのは等身大に作られたハイテクロボットたちだ。

それらの動きを見てみると、能の雰囲気的なものはいくらか伝わってはくるが、人（演者）と人（客）との直接的な出会いではないので、心のなかに生じてくる驚くような感動はない。それでも、謡い舞いの十二分間が終わってから、いつか本物を観たいと思った。

人口八万人を割った佐渡では、能楽は昔から今日まで伝えられ、プロでない三百名が演じ、能舞台は約三十もあって、盛んであると彼女は言い、また能の大成者であった世阿弥が、ここに七十二歳の時に流され、それが今も生き続けているとも語った。

彼女も、演者の一人である。能面をつけた瞬間、それに舞台上で最初に一步踏み出す際の心境を熱い声で話してくれた。

しばらくすると、観光バスから降りた百名近くの人たちが館内に入って来た。彼女は、「ガイドの仕事がはじまるわ」と言って、そちらへ向った。

再び走り出すと、うっそうとした林へ続く木段の道が目に入った。

自転車から降りて、その木段の道を歩いて登り出すと、草むしりをしていた小柄な女性がいたので声をかけた。

「こんにちは」

「こんにちは」

彼女は屈んだままの姿勢で、こちらに顔を向けて応えた。さらに登って行くと、神社の前に出た。

周囲には、大きな杉が林立している。そのうちの一本の幹は、特に太く、大人七名の手をつないだ長さにはなるだろう。その横に建っている拝殿に魅せられて眺めていると、先ほど挨拶を交わした女性が私の傍を通ったので、話しかけた。

「草取りは大変ですね」

「慣れると、そう大変でもありませんよ。わたしはこの宮司なのです。これも、自分の役割の一つなのです」

彼女は長い手袋をとり、顔から噴き出ていた汗を、タオルで拭きとりながら語った。

「あそこに見える建物は、能舞台ですか」

「そうです。六月にはここで上演されます。そのころ、佐渡に來ると、至るところで演能が観られますよ」

この神社の歴史と能楽について訊ねると、快く答えてくれる。明るい顔をした、目のなんと澄んだ女性なのだろうと思いついて聞いていた。最後に、「ごころう様です」とお礼を述べると、「ありがとうございます」と深くおじぎを返してくれる。

竹と杉が立ち並ぶ百メートルの木段を降りながら、あのような女性が人口の減りつつある佐渡で、島の歴史を守っているのだろうと思った。

朝九時から夕方五時半まで、新穂村とその周辺を自転車や自転車でゆっくり走り廻っていた。日本の山間風景を目にしたながらのサイクリングが、こんなにもたのしく、心が広がっていくとは思ってもしなかった。新しい発見だ。

翌朝、再びリュックを背負い、両津港へ行き、新潟港までの切符を買おうとして料金表を見た。ジェットfoilでは五千九百三十円、カーフェリーでは二千六十円である。わずか一時間の違いで約四千円の差がある。もちろん、旅情を掻き立てるフェリーに乗ることにした。

新潟港で降りてから、新潟駅から鈍行列車に二度ほど乗り換えて、磐越西線の二両電車に乗った。これから会津若松を経て、さらに三十分走ったところの会津高田までの四時間の電車の旅である。

いくつものトンネルを抜けるたびに、農村の奥へ奥へと進んだ。

赤や青色した農家のブリキ屋根や、その周りに広がっている水田、それに今日一日の野良仕事を終えて家路に帰る人の姿が、車窓に現れては消えていく。

線路に沿って蛇行している阿賀野川と、それを包むようにしている深い森がいつまでも続いているのを目にしていると、日本の自然はやさしいなと思ったりする。ここに暮らしている人も優しさに違いない。

人気の無い駅に、色鮮やかな花がいくつも植えられている。どんな人が世話をしているのだろうか。

電車がガタンと停まるたびに、人が降りる。乗客は私以外に二人だけとなった。目に映るすべてが、美しく見えるのである。歴史の音が聞こえるのである。不思議だ。

乗車する前に買ったおはぎをリュックから取り出して、口に入れた。

実にいい味だ。車内の空気は台風が近づいて来ているせいだ、湿度がある。だが、この湿度があんを一層美味しくさせているように思えた。湯で長く煮たあずき、この湿度のなかで食べるおはぎ、水の国日本ならでの味だ。ドイツにこの味はない。もう一つ口に入れた。

会津高田駅で降りると、これから二泊するユースホステルの人が車で待っていてくれた。ユースに着くと、もう辺りは暗くなっていた。

遅くなった夕食を摂り出した。前に座っている女性は、今日近くの山からひとり下りてきたと語った。北海道の大雪山系が好きらしく、しばしばテントを背負って縦走したことがあったとも、ご飯を食べながら言った。その話に、私は相槌を打ちながら聞いていた。

隣に座っている青年は、今日も朝バイクで横浜を発ち、ここに来て、明日は水上まで走ると語った。来年は就職なので、今は思い切って好きなバイクに乗って、ひとりで走るのだと目を輝せながら言った。

ユースホステルはこのような出逢いがある。年齢が違っていても、ひとり旅なこともある。

ってか、お互い話が弾んでくる。彼らとしばらく歓談していると、ユースの主人が、台風二十一号が接近中とのことを知らせに来てくれる。それを聞いてから、部屋に戻ってベッドに入った。

目が覚め、カーテンを開けると、灰色の雲が垂れ下がっている。これぐらいの天候なら、会津若松市内を歩いて巡ることはできるだろうと思ひ、雨具を持ってユースを出た。

先ず、駅前から歩き出して、明治・大正期を偲ぼせる洋館や土蔵が立ち並ぶ通りをぶらついていた。当時の姿のままに残っている古い軒先には、陶器や地酒などが置いてある。それらを、除きながらの散策である。新撰組副長の土方蔵三が投宿した清水屋旅館跡もあった。

しばらく行くと、六百年の歴史がある鶴ヶ城が見えてくる。幕末の戊辰戦争で一ヶ月の籠城の末、悲劇で幕を閉じた城だ。

天守閣に足を踏み入れると、なかは郷土資料館となっていて、会津藩の歴史を知ることができるようになっていた。最上階からは市内が一望に見渡せたが、裏磐梯山は厚い雲に覆われていたので、その姿はない。残念だ。

二時間ほどそこを歩いてから、城門を出ると、雨が降り出して来る。そう強い降りではないので、歩を休めずに歩き続けていた。と、肉屋の看板が目に残ったので、傘をたたんで中に入ると、フライの匂いがしてくる。目指すものがあつた。コロッケとハムカツだ。それぞれ一つずつ買った。

子供の頃、ソースをかけたハムカツやコロッケをコッペパンに挟んで食べたことを想い出しながら、会津武家屋敷へ向つた。

会津藩家老の西郷頼母邸だった大きな表門を潜つた。三十八部屋を擁する屋敷内には、当時の武具や家具、それに調度品が並んでいた。それらを見ていると、ありし日の武家の生活が偲ばれくるのである。

七千坪の敷地内には、数奇屋風茶室もあつた。その前に来ると、琴の音が聞こえてくる。傘をたたんで、茶室の縁側に腰かけ、テープから流れてくるその調べに耳を傾けた。

雨足が次第に強くなり、目の前に植えてあるクロタケ・カエデ・モミジ、それにスギの緑葉が濡れて輝き出した。葉の先端から流れ出る雨水が、苔に落ちて行く。それを見つめていると、心が震えてくるのだった。

雨に打たれて、モミジが一枚舞つた。その時、良寛の歌「うらを見せ おもてを見せて 散るもみじ」が浮かんだ。と同時に、先ほど見た場面も浮かんでくるのだった。

それは、西郷家の妻が、自分の子供五人と自刃した場面を人形で再現していたシーンである。武家の妻として表で生き、五人の命ある子供を引き連れての自刃に、何とも言えぬ哀情を覚え、胸が詰まってしまったのだ。人間の裏を見せて生きていても、よかつたのではないだろうかと思つた。良寛は、自分を『大愚』と称して生きた人だ。それこそが、正直に生きることだろう。

三十分以上ひとり座り続けていた。雨降りのため、この小さな茶室を訪れる人は誰一人いない。琴の音が、まさに心の琴線に触れ、目は潤み、心は潤って、外も内もしつとりとした情感に襲われた。ふと気がつくと、雨は止んでいたが、風が強くなり出していた。再び歩き出した。こんどは白虎隊十九士のお墓がある飯盛山へ向つた。

十六から十七才の青年男子たちが、城下に上つた火の手を落城と思ひ込み、自決した場

所に立った。若い命を散らした彼らを思うと、何度もため息が出てくる。あまりに若く、清い命が散ったのだ。目を閉じ続けた。

雨が再び降り出してきたので、早めにユースに戻ることにしよう。

夕食を摂ったあと、天気予報を聞くと、台風は勢力を弱めて太平洋に抜けるとのこと。ホッとする。明日は青空が望めそうだ。

越後・佐渡、それに会津での旅が終わりに近づいた。日本の里山風景に触れると、そこに歴史が流れているのを感じ、その景色がとても美しく見え、心たのしくなってくるのだ。そのようなようになっていたのは、日本で生まれ育った自分を自覚したからだろう。

のんびりした旅のなかで自分を知っていく、時間を自分に引き入れる。そのようなことができた日々だった。それを可能にしてくれたのは、各駅で停まる鈍行列車だったからかもしれない。

六 草津温泉の民宿

「ドイツに帰るまでにはまだ数日ある。よし、旅に出よう」

高崎駅から二両の普通電車に乗った。

四十分ほど揺られていると、広い平野にポツンポツンと藁葺き屋根の家々が見え出してくる。その庭先には、赤オレンジ色をした柿が実っている。懐かしい風景だ。遠方には、赤や黄色となった山々が望める。

自然と人間が共存する場を里山というが、まさにそれだ。時々、車窓に映る自分の顔と、ゆっくり過ぎ去っていく景色が重なっていく。

電車が人気のない駅にガタンと停まるたびに、中・高校生が一人、二人と降りる。

旅行者が数名座っているだけである。陽は山の端に傾きはじめ、空がいくらか赤みを帯び出した。

暗くなりかけた頃、電車を降りた。そして、目的地行きのバスに乗った。

いくつかの山村を走り抜け、二十五分ほどで終点到着。これから二泊する宿を探せねばならない。ドイツから背負ってきたリュックを担ぎ、歩き出した。

外はもう暗かったが、街灯の明るさで歩くには不自由はない。標高一、二〇〇メートルの地なので、いくらか寒さを感じ出しながら歩いていった。

五分ほど行くと、路地に民宿と書かれた看板を見つけたので、そこに寄ることにした。

玄関戸をガラガラと開けると、おかみさんらしき人が現れた。

「二泊したいのですが、空いた部屋はありますか」

「ええ」

「温泉風呂もあるのですよね」

「もちろんです。掛け湯ですよ」

「それはいいですね。いくらですか」

「素泊まりで四千円です」

それを聞き、迷わずここに決めた。

おかみさんに案内され、幾つかの部屋を通り過ぎ、「あさま」と記された部屋に入った。八畳の間に、小さな炬燵とテレビが置いてあった。

おかみさんが、「お客は一人だけ。いつでもお風呂に入れますよ」と言って、部屋から出ていった。

荷を降ろしてから、少し冷えた体を暖めようとして、早速風呂場に行った。

十人は入れそうな湯船に一人浸かっていると、額から汗がにじみ出てくる。身も心も解れ、口から「草津よいとこ」一度はおいで、どっこいショ……」の歌が出てくる。

湯治場として知られ、日本一の湧出量の多い草津温泉。四十二度の湯船を出たり入ったりしてから、部屋に戻った。と、布団が敷かれてあった。湯治の宿なので、トイレ・洗面所は共同である。建物全体が木造りなので、山小屋をふと思い出す。

灯油での暖房なので、部屋内は石油臭かったが、これも懐かしさと呼んだ。でも、炬燵の暖で十分だと思いい、石油ストーブを切って、炬燵の中に足を伸ばした。と、子供の頃、家族と一緒に過ごしていた日々のが浮かんできてくるのだった。

十時過ぎになったので、寝る仕度に入った。

夜中、綿の詰った重いかけ布団だったせいか、寝苦しくなって目が覚めてしまう。

押入れにあった軽い毛布と取り替えて、再び目を閉じた。

早朝、起き出してから洗面所の冷たい水で顔を洗い、朝の散歩に出かけた。

黄色のイチヨウの葉、紅色のもみじが路地の上に横たわっている。朝の爽やかな風にもよぐ葉ずれの音が聞こえてくる。町はまだ眠っているのか、人影はない。心身ともよろこび合っているのがわかる。

一時間半ほど人気のないところを散策してから、町の真ん中にある湯畑へ向った。

しばらくすると、温泉湯独特の匂いがして、湯煙が見え出してくる。朝なのに、人の数は多い。中国語をしばしば耳にするようになった。彼らは盛んに写真を撮って、満足そうな顔を浮かべている。

九時少し前、湯もみと踊りのショーがあるとの立て看板を見かけたので、その館に行くことにした。

単物の衣服に身を包んだ女性たち九名が、入場料を払った二百名近くの観客の前で、湯もみの動作をしながら、「お湯の中にもこりや花が咲くよ、チョイナ、チョイナ」と歌い出した。

そのあと、和服姿の踊りとなった。と、私の口から「やはり、着物姿での舞いは、いいな」の言葉が漏れた。

そこを出ると、朝食を摂っていないことに気づき、どこかに立ち寄りとした。斜め向こうにコンビニの店を見つけたので、そこへ向った。

棚に並べられてあった一パックの炊き上がった冷えたご飯と、納豆だけを買い、レジでご飯を暖めてもらい、再び湯畑のところに戻った。そして、木の椅子に腰かけ、湯気が立ち昇る白いご飯の上に、納豆二箱をかけて口に運んだ。

これが旨いのだ。一流のホテルでのレストランで食べるよりも、なんと美味しいのか。口の中で、ご飯と納豆の糸が微妙に混ざり合う味。納豆を食べて、日本人を知る思いとなった。

私の前を通る観光客のなかには中国人もいて、こちらにシヤターを向けている。そんなことにお構いもなく、この贅沢な味を堪能し続けた。納豆三昧だ。

宿に戻り、炬燵のスイッチを点けてから少し横になると、足全体がホカホカし出してウトウトとなった。

目が覚めると、三十分が過ぎていた。今度は日本の情緒を誘う露天風呂へ行くことにした。おかみさんから場所を伺い、そこへ向った。

途中、至るところで観光客の姿を見かけるようになった。そのなかには、浴衣姿の男女も多くいた。

目指す大滝乃湯に行き、九百円を払い、館内に入った。

広い湯船の大浴場で少し体を沈めてから、外に出て、今度は露天風呂に浸かった。

前には、赤や黄色の葉をつけた木々が見える。その傍には、湯気を上げた湯が滝のように流れ落ちている。その湯に、身を委ねていた。と、心の弛緩を感じ出す。ひたすら、体を沈めていた。

そこから出て、次は合わせ湯というところで、三十八度から四十六度の異なる熱さを順に巡って入浴していた。まさに温泉三昧だ。日本人でいるよろこびだ。

この館を出ると、お腹が減っているのがわかる。そこで、先ほどご飯と納豆を買ったコンビニで見かけた、私の大好物である助六寿司を食べようとして、そこへ向った。

さいわい、その寿司は棚に一つ残っていた。それを大事そうに抱え、店を出た。

十分もすると、至るところ紅葉した木々が並ぶ西の河原公園となった。

ベンチに腰かけ、先ほど買った助六寿司を食べはじめた。酔の効いたイナリ鮎、それに太巻きに入っている卵焼き、味のついた椎茸、かまぼこなど、口に入れるたびに胃がよろこびあっているのがわかる。贅沢な時間だ。これがぜいたくと思えるような、今の自分の生活様式に感謝だ。

食べ終え、また公園内を歩き出すと、露天風呂へ至る小道となった。

傍を流れる小川からは、湯気を立てながら温泉が湧き出ている。二時間前に他の露天風呂の湯に浸っていたので、体が意外と疲れているのがわかる。そこで、近くの山道をゆっくり歩くことにした。

晴れて抜けるような青空の下、人影がほとんどない土道をのんびりと登りはじめた。

秋風に揺れながら、紅葉した葉が時々ひるがえっている。若い頃によく見かけた秋の素朴な風景だ。アツ、真つ赤な葉がまた風に舞った。

サクサクの音を耳にしながら歩を進めていると、忘却していた日本への回帰が心に溢れてくるのだった。歩き続けた。

陽が山の奥に没しはじめたので、宿に帰ることにした。

再び公園に戻り、出入り口近くにあったそば処で、あたたかい山菜ソバを食べようとして、店内に入った。

さすが手作りだけあって、麵に腰があつて旨い。最後の一滴まで汁を飲み干した。宿に向う途中、スーパーマーケットの看板を見かける。何も買う積もりはなかったが、足が自然とそちらへ向いた。

水の中に、サンマ一尾百八十円が売られていた。それを眺めていると、熱く焼いたサンマに醤油をかけた時に、ジーツと生じる音が耳元に聞こえてくるのだった。溜め

息が漏れた。

みかん六つ、それに温泉饅頭二つを買い、スーパー店を出ると、外は夕闇に閉ざされていた。

宿の玄関戸を開けると、おかみさんが奥から出てきて、

「主人もいます。掘りコタツに入りませんか」

と、誘われたので、

「ええ、それはいいですね」

と応えて、ご夫妻と話すことになった。

六畳の間の真ん中に、炬燵があった。そこに足を投げ出した。と、体全体が暖まってくる。

「この宿をどのくらい前から営んでいるのですか」

「以前、わたしたち夫婦はスキーの板と靴を貸し出していたのです。もう二十年前のことです。今は、この民宿を主人と二人で経営しています」

ここでの今と昔の暮らしについて、私と同じ団塊世代のおかみさんが、生き生きした声で語り出した。

隣には優しいそうな旦那さんがニコニコした顔でいる。今もこの歴史を引き継いでいる二人の話に、耳を傾け続けた。草津温泉の歴史の声だと思った。

笑いの入った会話は、実にいいものだ。旅のたのしきは、自分と違う文化や風土に接しているなかで、様々な人の人生観や価値観に出合うことだ。それによって、自分の感性が磨かれて謙虚になり、自分が忘れかけていたものを再び思い起こさせてくれて、感動したりするのだ。

ご夫妻と二時間ほど談話してから、冷えきった部屋に戻り、小さな炬燵にひとり入りながら、先ほど買ったミカンと饅頭を食べ出した。

七 父子旅

機内の小さな窓から下をのぞくと、いくつもの川が濃い緑で覆われた山々の合間を縫うように走っているのがくつきりと望める。あの山並みはどこだろう。越後の山だろうか、谷川岳付近だろうか。小さな模型のように広がっている山域を眺め続けた。

隣の席には、イヤホンに耳に当てて、好きなメロディーを聞いているミヒヤエルがいる。これから、父と子のリュックを背負っての十八日間の旅がはじまるのだ。

成田に着くと、小雨が降っていて、止みそうにない。かさを指しながら、今夜宿泊する千葉の妹の家へ向かった。

浜松で生まれ、七年間日本に住んでいたミヒヤエル。その彼が十数年ぶりに来るとのこと、私のきょうだいや、彼の従姉妹などが集まってくれる。

その人たちとの夕餉となった。テーブルの真ん中には、にぎり寿司が置いてある。それを食べながらの歓談となった。

久しぶりに口にする酢の効いたご飯と魚類の溶け合った味。舌と胃が悦びあっているの

がわかる。ミヒヤエルは周りの人たちの顔と名前をまったく忘れていたが、「ウン、ウン」と応えながら、会話の輪に加わっていた。

ふと気がつくのと、夜中の十二時過ぎである。明日は、ミヒヤエルが一歳から七歳まで暮らした地へ行くことになっている。欠伸をはじめた彼と一緒に、隣の部屋に行き、畳に敷かれていた布団に潜り込んだ。

昔を思い出すこの感触。隣のミヒヤエルはもう寝入っている。柱時計の音を耳にしながら、私も眠りについた。

翌日、皆と一緒に朝食を摂ったあと、二人とも再びリュックを背負い、妹の家を出た。列車を三回ほど乗り継ぎし、土浦駅に到着する。改札口を出ると、友人が待っていてくれた。これから彼の家へ行き、ここで六年間お世話になった人たちとの再会だ。

私たちが広い部屋に入ると、寄り集まってくれた二十名ぐらいの人たちが、ミヒヤエルを見て、皆驚きの声を上げた。当時のモヤシのようなひよろりとした体つきから、今はがっしりした体格となっていたからだろう。

日本語をまったく忘れてしまった彼だったが、終始笑顔を浮かべながら、会う人と握手を交わし、たのしそうに振る舞っていた。その姿を目にして、ここまでよく育ったとの思いで、私の顔からは自然と笑みが零れるのだった。

翌日、私たち二人は以前住んでいたところへ向った。

田圃が左右に見え出して、あずき色をしたトタン屋根の簡易木造貸住宅が、今も六棟建ち並んでいるのが目に入ってくる。あの左端の家で、私たち三人は暮らしていたのだ。

玄関前に立つと、四歳でやっとひとり歩きができたミヒヤエルの姿、それに七十一歳になる義母がドイツからひとり訪れて、ここで一ヶ月間滞在していたことが浮かんできく。

周囲の風景は、ほとんど変わっていない。家の裏にあったピーナツ畑は今も昔のままだ。あの周辺を、私たち家族はよく散歩をしたものだ。立ち尽くして見続けた。

当時、ミヒヤエルはあそぶちゃんと呼ばれ、隣の家族に同年齢のまなぶちゃんがいる、暑い夏の日は小さなビニールプールを家の前に置いて、二人一緒にその中で水遊びをしていたものだった。いろいろなことが、絶え間なく思い出されてくる。

土浦に三日間滞在してから、私たちは再びリュックを背負い、次の地へ向かった。

夜の八時過ぎに浜松駅に到着。昔よく乗っていた三方原行きバスに乗った。

揺られながら外の景色を見てみると、懐かしさが込み上げてくるのだった。車内に流れてくる放送も以前と同じだ。昔と同じような空気に、私は体を澄まし続けていた。

バスを降りてから、これから二泊する高齢者ホームへ向って歩き出した。数分もしないうちに、新築の白い高齢者ホームが目に入ってくる。

そのホームの前に立つと、私たちの宿泊するところを探してくれた知り合いの女性が玄関口から出てきて、私たちを向えてくれる。

彼女に案内されてゲストルームに入ると、二人とも疲れが一気に出てきて、即ベッドに潜り込んだ。

翌朝、朝食を摂るためにミヒヤエルと一緒に食堂に行った。

お年寄りたちと一緒にの食事である。朝食はいつもパンを摂っていた彼だったので、ご飯が口に入るかどうかと気にはなったが、そんな心配を吹き飛ばすほどに二度もお代わりをする。日本にいた時のことを思い出したようだ。

朝食を済ませてから、まず以前住んでいたところへ向って歩き出した。

澄んだ水が流れている小川に沿った道を、しばらく行くと、昔働いていた、知的ハンデイを持つ子供たちが住んでいる施設が見え出して来る。

さらに進んでいくと、私たちが暮らした職員寮の赤い屋根が目に見え込んで来た。当たりを見回すと、濃い緑の葉をつけた木々が今も立ち並んでいる。四十メートルほど先に建っている牛舎からは、小鳥の囀りと一緒に牛の声が聞こえてくる。当時のままだ。

木々に囲まれた、簡易な木造作りの二家族用の寮前に立った。

「ここで、きみは生まれたのだぞ」

隣にいるミヒヤエルにそう言うと、彼は、

「モウ、モウ」

と、真似声を上げた。その彼を玄関前に立たせ、スナップ写真を撮った。と、あのシーンが浮かんでくる。

出産予定日の二週間前に、二千五百グラムで生まれたミヒヤエルは、母乳をほとんど飲まなかった。吸う力が弱かったからだ。妻は自分の乳をしぼって哺乳ビンに入れ、

「今日は、これだけ飲んだわ」

と言いながらノートに書き記していた。少しでも飲むと、よろこんだ顔を浮かべながら息子を見つめていた彼女だった。

異国の地に来て、言葉もわからず、見知らぬ文化のなかで行き詰まることもなく、彼女はよくやっていた。当時のことを思うと、今でも頭が下がってくる。あとで、電話でここに来たことを伝えよう。

浜松で三日間を過ごしてから、次は京都府の山間の村に住んでいた友人宅に行き、そこで二泊して、今回の旅で最も訪れたかった山口県の萩へ向かった。

三回ほど列車を乗り換えて、やっとのことで萩駅に到着する。辺りは薄暗い。

先ず、これから四泊する宿を捜さなければならない。駅前の観光案内所で、斡旋してもらおうとした。

「安い民宿を捜しているのですが、どこかにありませんか」

「民宿は一泊二食で、どこも六千五百円ですよ。今の時期は観光客が少ないので、直接行って訊くとよいでしょう」

係の人から町の地図をもらい、それを見ながらの宿探しとなった。ミヒヤエルは歩くことには慣れていて、ドイツに住むようになってから、毎夏スイスの山々に登っていたので、健脚でもあった。

「ミヒヤエル、平気か」

「ヤア、パ、パ」

明るい声が返ってくる。

地図を広げ、どの宿にしようかと迷っていると、地元の人が、

「どうなさいました」

と、話しかけてきた。

「泊まる場所を捜しているのです。それも安い宿を」

「それでは、近くにあるユースホテルがよいでしょう」

それを聞き、そのユースに行くことにした。

六月上旬の今は夏の観光シーズン前なのか、泊り客は私たち二人以外に誰もいない。大きな部屋で、二人だけで眠ることになった。

翌朝、ガランとした広い食堂での朝食を摂ってから外に出た。

江戸時代には城下町として栄え、明治維新には多くの志士を生んだ萩。ここには日本のふるさとが今も脈々と生き続けていると、何かの本で読んだことがあった。ぜひ訪れたかったところだ。そこに、今息子と二人でいるのが、信じられない気持ちであった。

武家屋敷を感じさせる佇まいの道を、彼と一緒に肩を並べて歩いていた。大きな石垣と白い土塀からは、夏みかんが顔をのぞかせている。それらを目にしていると、日本の昔ながらの風景のようにも思え、心が静かに満ちてくるのだった。

しばらく行くと、緑の濃い静かな地になった。目の前には、吉田松蔭が弟子を教育した松下村塾の建物が建っている。数多くの志士たちが指導された塾だ。

志半ばにして、二十代後半で死んだ吉田松蔭や高杉晋作などの生き方は、どのようなものだったのだろう。彼らは仲間と共に信頼し合いながら社会を変革しようとして、そのなかで自分の生きる意味を見出していたに違いない。木造建ての家を眺め続けた。

さらに歩いて行くと、伊藤博文旧宅が見えてくる。その前を通って、黄檗宗東光寺へ向った。

杉と檜の大樹が左右に並び、うつそうとした緑に包まれた道を、私たちはゆっくりと歩いていった。時々、初夏の陽光が、緑の葉の隙間から漏れるように射し込んでくる。樹と土の織り成す湿った冷たい大気が、日本で暮らしていた時の自分を思い起こさせてくれるのである。

「これが日本だよ」

ミヒヤエルにそう言うと、彼は、

「パパ、パン、パン」

と、声を上げた。お腹が減ってきたようだ。朝食から何も口に入れていない。ちようど二十メートル先に木のベンチがあったので、そこに腰かけ、途中で買った餡パンとオレングジュースをリュックから取り出した。

ベンチから腰を上げ、再び歩き出した。

しばらくすると、東光寺境内前に出た。と、整然と立ち並ぶ約五百基の石灯籠が目に入ってくる。それを見ながら近くをぶらっついてみると、遠い歴史が偲ばれて、気持ちがゆったりとしてくるのだった。のんびりと歩き続けた。

萩の町で三日間、足に任せて過ごしたあと、今度は日本海の澄みきった青い海に浮かぶ青海島周辺へ向かった。

一車両の電車に乗って長門市で降り、仙崎湾まで来ると、二十人乗りの小舟が今出るところだった。私たちは、そのままそれに飛び乗った。

舟からは、日本海の荒波によって少しずつ削られた断崖・石柱・洞門などが見える。波が壁を打ち砕いている様子は、まるで長州の志士たちのような男性的躍動さだ。それを眺めていると、彼らのかならずやり遂げるといふ心意気が伝わってくるのだった。

ミヒヤエルは、小船が揺れながら白い飛沫を飛ばして走っているのが面白いうで、たえずニコニコ顔である。海を目にするのも、船に乗るのも初めての彼。目を丸くした新たな体験だ。

ユースに戻ると、毎日お風呂に入る私たち。日本の湯船は大きくていいものだ。

「今日も、パパの背中を流してくれるか」

「ヤアア」

彼のぎこちない手が、背を走る。

「もつと力を入れて洗ってほしいな」

両手で力いっぱいゴリゴリ洗うミヒヤエル。痛いぐらいだ。でも、快いものだ。親子でお風呂に入るのは、ドイツではないので、この肌と肌の触れ合いは二人の気持を一つにしてくれる。共同の湯はいいものだ。

湯に浸かったあと、夕食を摂り、下着などを洗い、九時過ぎに床につく私たち。

ユースを発つ朝も、ウグイスの鳴く「ホー ホケ キョ」の声で目が覚めた。と、「美しい、日本の情緒だ」との言葉が口から漏れた。

いにしえから続いている澄んだ音色の三語を聞きながら、私たち二人はリュックに衣類などを再び詰めはじめた。

あと一週間、父と子の旅を心ゆくまで満喫して行こう。

八 合掌造りの白川郷と五箇山

名古屋駅で乗り換えて、特急列車の飛騨ワイドビュー号に乗った。

しばらくすると、深い溪谷の下に、青く澄んだ水がところどころに見え出し、険しい山々が目に飛び込みはじめてくる。

単線上を走る列車は、濃い緑に包まれながら建ち並ぶ民家を縫うように進み、飛騨川に架かっている小さな鉄橋を渡るたびにゴトンゴトンと音を鳴らし、いくつものトンネルを抜けるごとに、新たな景色が展開してくる。

久しぶりの日本の溪谷風景に、懐かしさを覚えながら眺めていた。あと少しで、高山駅に到着だ。

駅舎を出てから、宿探しとなった。

リュックを背負って二分ほど歩いていると、シングル二千五百円の看板が目にとまった。あまりに安いので、そこへ行くかどうか迷ったが、足はもうその宿のカウンターに立っていた。

あどけない丸顔をした女性に、

「泊まりたいと思うのですが、部屋を見せてくれますか」

と訊くと、彼女はこちらを上から下までのぞき込むようにしてから、

「お一人さんですか。いいでしょう。これを持って部屋に行ってください」

と応え、鍵を渡してくれる。

それを手にして五階の室内に入ると、トイレと洗面所は付いていないが、清潔そうなベッドが置いてある。これで十分だ。投宿することにした。

リュックを置き、宿を出てから古い町並みが残っているところへ向って歩き出した。

黒く塗られた出格子が並ぶ通りには、今も江戸時代の城下町の面影を窺えるような町家

造りの商家・民家・郷土料理店、それに土産物店が軒を連ねていた。

五月下旬のこの時期、観光客の姿を多く見かける。通りで耳にする会話は、中国語と韓国語が多い。三分の二以上は、中国や台湾や韓国の人たちだろう。

一時間近く足に任せて歩いていると、疲れを感じはじめる。

この古い町並み(さんまち)の軒下に、休むことのできる長椅子をとどころに見かけたので、どこかで休むことにした。と、ちょうど宮川に架かっている朱色をした中橋の横に、長椅子があったので、腰かけた。

座りながら、目の前を歩いている人の姿を目で追った。

二人連れは六十代のリタイヤーした夫婦たち。三人連れは若い日本の女性。四人以上になると、中国と韓国の人が多い。一人で歩いている人はプラスチックの買い物袋を手に持った地元の人だ。このようなことをしてられるのも、ひとり旅だからこそできるのだろうと思いつながら眺めていた。

日が傾きはじめていたので、腰を上げて、古いさんまちを再び歩き出した。

観光客の姿は消え、店を閉じているところもある。格子窓の奥に明かりが灯り、通りは先ほどとはまったく違う静かな佇まいに変わっていた。落ち着いた風情が漂うなかを、ゆつくりと周囲の古い建物などに目をやりながらぶらぶらついていた。

宮川に架かる橋から下をのぞくと、鯉がエサを探している姿が薄暗やみでもはつきりと見える。それに、川に沿って立ち並ぶ家々などを目にしていると、ここが飛騨の小京都だということが納得できた。

翌朝、宿泊代を払ってから、リュックを担いで駅近くのバス停まで行き、朝一番のバスに乗った。

曇り空の下、バスは山峡の村をいくつか通り抜けて、奥へ奥へと走り続けた。新緑を終えた葉が、濃い緑色に変わり、山肌を密に埋めつくしている。

一時間ほどで、白川郷に到着。早速、観光案内所に行って今夜泊まる宿を斡旋してもらうと、藁葺き屋根の民宿を紹介してくれたので、そこへ向った。

宿に着き、リュックを玄関に置いてから外に出ると、太陽が照り出して来る。集落内に建っているいくつかの合掌造りの家屋前で、立ち止まっては、それらの建築様式を眺めていた。土曜日のせいかわ、観光客が多い。

しばらくしてから、今度は緩い勾配を登って白川郷を一望できる高台に立つと、急峻な山々に囲まれた集落が見えた。廻りの森林と融和している姿だ。ここで少し立ち尽くしてから、今来た道をゆつくりと下った。

小鳥の鳴き声に混じって、蟬の声が聞こえてくる。五月下旬に蟬の声を耳にするとは、思っても寄らぬこと。耳を澄ました。

下の集落に着き、再びどっしりとした大きな合掌造りの家々を見ながら歩いていた。稲を植えた田の水面が陽を浴びて青色に輝き、紫と白の色をした花ショウブが民家の庭先で誇ったように咲いている。水が至るところで流れているのを目にしていると、ここが水に育まれた、豊かな山里だということがわかった。

遅くなった昼食を摂ってから、今度は合掌造りの建物内を見学したくなり、野外博物館の民家園を訪れることにした。

園内の九棟あるなかの、六十度の急勾配はあるだろう大きな藁葺き屋根の家に入った。

ここで、四十数名の大家族が暮らしていたと記されている。便は数人一緒にできるように、板の間から落とす造りである。木材の組み立ては、風や雪の重みに耐えられるように、釘とカスガイは一切使用していない。すべて荒縄でしばってある。二階は養蚕ができるようになっていて、生活の場と生業の場が一つになったのが合掌造りのようだ。

家の柱は、どれもスズで真つ黒。囲炉裏のある一階の広々とした空間は、夏は風で涼しいだろうが、冬は豪雪地帯の暮らした。さぞ厳しいに違いない。

二時間以上、博物館の園内にてから外に出た。そして、視線を山に向けると、自生しているダケカンバやブナの緑が山肌を被っているのが望める。

目の前のトチノキの横で、田植えをしている人を見かける。ここで暮らしている約二千人のなかには、観光客を訝しげにとらえる人もいるだろう。ふと、足元に目を落とすと、一メートルほどの青大将がゆっくりと這っている。観光客の私を威嚇しているかのようだ。

五時過ぎ、今晚泊まる合掌造りの民宿に戻り、四畳の部屋で、番茶を飲んで一休みしてから、五百メートル先の温泉場に行った。

大きな湯船に浸かっては出て、それを何度も繰り返していた。

庄川の川瀬の水音が耳に届いてくる。そちらに目をやると、澄んだ水が川底で青色となって揺れているのが、水滴のついた窓からよく見える。岩魚が泳いでいそうな清流の水だ。

一時間ほどして銭湯から出ると、陽は山かげに没し、周囲は夕闇に閉ざされていた。通りには、観光客の姿はまったく見えない。昔からの山里の静かな佇まいだ。温泉で暖まった体で、宿に戻った。

部屋に入ると、夕食の膳がちゃぶ台の上のっていた。早速、それを食べ出した。

この周辺で採れたものばかりである。飛騨肉も盛ってあったが、肉をそう好まない私なので、勿体ないと思いつつ食べ残した。

部屋は襖四枚で区切れているので、隣室の灯りがふすまの間から漏れてくる。夫婦連れの会話だ。それに寝返りする音も聞こえてくるだろう。外では、カエルが盛んに鳴いている。

係りの人が布団を持って部屋に入って来て、それを敷こうとしたので、「自分でできませから」と私は言うから、布団を伸ばした。と、一センチ弱ほどの棒状の虫が這っていた。これも、山麓でよく目にする日常的なことだ。

夜中に目が覚め、腕時計をのぞくと、まだ二時過ぎである。カエルの大合唱の声を耳にしながら、再び眠りについた。

六時を打つ鐘の音が、近くの明善寺から響き渡ってくる。

朝食をしたあと、リュックを再び背負い、バス停へ向った。灰色の雲が空を覆い、今にも雨が降りそうな気配である。

バスは数軒の農家が寄り添っているところを、縫うように走り続け、岐阜県から富山県に入った。針葉樹が多くなり、山が一層深くなり出した。

小一時間で相倉口の停留所に到着。リュックを再び担ぎ、五箇山の合掌造りの集落に足を踏み入れた。

日曜日なのに、観光客はほとんどいない。天気が悪いせいだろう。土産店で二、三人を見かけるだけである。白川郷と較べると、二十三棟の茅葺屋根はどれも小さい造りだ。人

口がわずか六十名のこの村も、四方を山々に囲まれている。

棚田などを目にしながらぶらついていると、古くから伝わる歴史を背景にしながら、この人たちは暮らしているのを感じ出す。

十メートル先に、地元らしき人がいたので話しかけた。

「ここは静かですね。昨日は白川郷にいたのですが、人の数が多かったです」

「あそこは観光地になってしまった。将来も世界遺産に値するかどうかだ」

六十歳ぐらいの男性は、にがにがしい顔で言い、さらに、

「あそこの町役人は、自分の職を辞めて、民宿を運営するようになってしまった。そのほうが儲かるのだから」

と、つけ加えた。

「ここも世界遺産に登録されていますが、年間どのくらいの人が訪れるのですか。白川郷では、百八十万人と聞きました」

「まあ三十万人ぐらいだろう。ほら、あそこに三つの茅葺の屋根が見えるだろう。あれらは、今売りに出しているが、なかなか買手がない。家主の子供たちは、大きな町へ行つてしまい、親は年をとり、長男の家で暮らすようになったりするからな」

「失礼ですが、どのくらいの額なのですか」

「四百万円ぐらいだろう。売る際は、百万円ぐらいだろうが。ただ、ここに長く住むことが必要だ。若い家族が入居してくれればいいのだが」

この人と話しをしていると、ここで誇らしく暮らし、この村の歴史を引き継ぎ、未来にそれを遺していこうとしているのを感じるのだった。自然を敬う心が、この人にはあるからだろう。

世界遺産は過去の遺産だけではなく、未来へ続けてこそ、その名に値するだろう。その未来には、自然と共に暮らす人の姿があると思う。目の前にいる方が、まさにそのような人なのだ。

この相倉合掌造り集落に立ち、物静かな佇まいに耳を澄ましていると、気持ちたちが落ち着き、時間がゆつたりと流れているのを覚える。このようなところが、日本の原風景だ。

九 春の京都四人

秋は紅葉の美しさと同時に、物寂しさを伴う。まして、義母が逝去して、一ヶ月半しか経っていない。私たち家族は何かと彼女を想い出してはため息をつき、特に、妻は心に穴が空いたようになっていた。

そのようなある日、居間のソファに座りながら、日本の風景写真集を開いていた。と、妻が寄ってきた。

「きれいな桜の花ね」

そう声を出しながら、私の隣に座った。妻も私と一緒に、写真集を観つめ出した。最終ページになった時、彼女の横顔を見ながら言った。

「こちらに移り住むようになってから、きみはまだ一度も日本に行っていないね」

「そうね。あなたは二年に一回は出かけていたけれども、わたしはここ十三年間訪ねていないわ」

「どうだろう、来年の春、三人で京都へ行くか」

「それは、いいわね。京都は、ぜひ訪問したかったところだわ」

「お義母さんが日本に来たとき、京都に旅行しようかとも思ったが、それが実現できなかったからな」

妻は、よろこびの声を上げながらにつこりした。

彼女は、八年間の日本滞在中、知的ハンディを持つミヒヤエルを育てるのに明け暮れて、旅をしたことがなかった。ミヒヤエルが生まれた浜松、そのあとに住んだ土浦、それに私の両親が暮らしていた東京以外は知らなかった。

「よし、三人で旅しよう」

その日が、来るのを待った。

いよいよ日本へ出発する日となった。二週間の旅に必要なものが入っているリュックをそれぞれが背負い、家を出た。

フランクフルトから飛行機に揺られながら十一時間半ほどで、大阪空港に朝早く降り立った私たち。直ぐにリムジンバスに乗り、これから一週間滞在する京都へ向かった。

妻は、車窓に映る大阪市内の風景を、身を乗り出しながら見ている。ミヒヤエルは、車内に取り付けられたテレビから流れる日本語を耳にしては、口真似をしながらのしそ。私といえば、二年ぶりに映る日本の街角風景に懐かしさを覚えながら、外を眺めていた。

近代的な十六階建てのステーションビル前に着いたのは、ちょうど十二時だった。妻がその高い建物を見ながら、驚いた声を上げた。

「ここが京都なの？」

抱いていたイメージと違っていたのだろう。その彼女に言った。

「ここは京都の表玄関で、これから市内に入ると、古都の顔がのぞけるよ」

「そうなの、たのしみだわ」

ドイツから予約した宿へ行くこうとしてバスに乗ろうとしたが、駅前には何台もの路線バスが並んでいるのを見て、どれに乗車してよいのかと迷ってしまった。

やっとバスの席に腰を下ろして一息入っていると、間違った方向へ走っているように思えた。そこで、自分たちの行き先の停留所を車掌さんに伝えると、

「それは反対方向行きのバスですよ」

と応えたので、私たちは急いで再びリュックを担ぎ、運賃を払おうとした。と、「要らないですよ」との車掌さんの声である。お礼をのべ、バスから降りた。

反対側の停留所に行くと、妻が周りの人にも耳に入るような声で、「お好み焼きがあるわよ」と言った。

バス停から十メートル離れたところに、屋台が立っているのが見えた。バスが来るまでにはまだ時間があったので、そこに立ち寄ることにした。

鉢巻きをしたおじさんから一つ四〇〇円のお好み焼きを三つに切ってもらい、それを食べ出すと、鰹節とソースの味が口の中に広がってくるのだった。

しばらくすると、向こうから私たちが乗るバスが近づいて来たのだが、彼女が、

「もう一つ、食べましょうよ」

と言ったので、そのバスを見送った。

売っているおじさんは肌が色濃く焼け、いかにも屋台で商売をしている顔つきである。エプロンが汚く、それがよいのだ。高いお金を払う料理よりも、この味だと思いつながら、次のバスを待った。

十分もすると、バスが来たので、それに乗り、外国人たちが主に宿泊する簡易民宿へ向った。

宿は、市の中心地からいくらか離れたところに建っていた。

玄関で靴を脱ぎ、一間の六畳部屋に入ると、炬燵が置いてあるのを目にする。三月末の今は、まだ肌寒い。その炬燵のスイッチを入れた。

少しすると、三人とも疲れと時差ボケのために、瞼が重たくなり出してウトウトとなし出した。そこで、押入れから布団を取り出して、仮眠することになった。

久しぶりの布団の感触である。隣のミヒヤエルはもう寝入っていた。

一時間半ほどすると、目が覚め、窓から外をのぞくと、日は傾きかけて薄暗くなっている。お好み焼きを食べてから、口の中に何も入れていない。三人とも空腹である。夕食を摂るために外に出ることにした。

五分ほど歩いていると、どこからか香ばしい匂いが漂ってくる。妻の足が止まった。

「なつかしい匂いだわ」

辺りを見回すと、古い木造建築造りの小さな食堂が目に入った。木戸前の暖簾には、藍色で染まったうなぎの文字が泳いでいる。迷わず、ここだと決めた。

木戸をガラガラと開けて中に入り、お茶を飲みながら注文したものを待っていた。

十分ほどすると、目の前に湯気の立った焼きたての鰻が出てくる。目と鼻に食欲をそそる匂いだ。それを箸で切って舌にのせると、とろけるような味である。それに日本の米は旨い。

「浜松に住んでいた頃、あなたの給料が出ると、うなぎ屋へよく行ったことがあったわね」
妻はそう言いながら、ミヒヤエルが生まれた浜松でのことを話しはじめた。

彼女の話聞きながら、ひと箸ひと箸惜しむように食べていると、鰻の味が当時の暮らしを思い起こさせてくれるのである。ミヒヤエルは慣れぬ手つきでご飯をすくうようにして口に入れ、にこにこ顔だ。

食べ終わってから、彼女がお茶を飲みながら、

「この料理の味を、母にも味わいさせてあげたかったわ」

と言ったので、私は、

「そうだね」

と、合槌を打った。私たちは、義母が滞在した土浦での一ヶ月間のことを話し出した。すると、ミヒヤエルが、「おばあさん、おばあさん」と声を上げた。

翌朝、ミヒヤエルと一緒に宿の近くのコンビニに行き、食パンとジャム、それに紅茶入りのパックを買い込み、自分たちの部屋に戻った。妻はすでに共同炊事場でお湯を沸かしていた。

京都一日目の朝食となった。日本のパンはやわらかく、しっとりとしている。ドイツのように何度も噛むようにして食べるパンの味とは違う。

食器洗いを済ませてから、玄関に出ると、朝脱いだ靴が前向きにきれいに並んでいた。それを見た妻が、「おかみさんは、親切ね」とにつこりした顔で言った。

「ここで女将さんと朝の挨拶を交わしているのだよ」

「挨拶？」

「お義母さんも私たちの靴が汚れていると、よくきれいにしてくれたね。朝、それをはくと、彼女と挨拶を交わしたような気持ちになっていたからね」

「そうだったの」

そう声を出しながら、彼女は靴を履いた。

先ず、近くに建つ禅寺の大徳寺へ向かった。

玄関先で靴を脱いでから建物内に入ると、石庭なる造形が目の前に飛び込んでくる。庭に面した板敷きに腰を下ろし、前面に広がる庭に心を集中させた。

小さな石が波のごとく続いたように流れ、大きな岩がどこどこにどつしりと置かれてある。相対的な世界が一つの画面に納まっているように思え、その模様をしばらく見つめていた。と、妻が寄ってきて、私の肩に手を置き、先に行ったミヒヤエルのほうを指差した。

境内の整然とした、落ち着いた渋い配色の庭などを目にしていると、学生時代に通っていた鶴見の禅寺である総持寺のことが浮かんでくるのだった。松や竹、杉、石垣、藁葺き屋根など、心誘われるものばかりだ。忘却していた日本への回帰がふつと溢れ出て、立ち止まっては眺めていた。日本の歴史に関心を持つ妻も、足を止めては見ていた。

次は、世界でも知られる金閣寺に行った。おびたらしい人の波である。早く出たくなつた。金箔の金閣寺と、その周辺の自然とが調和しているように思えず、自分が縛られているようになったからである。目に訴えるものがあっても、心にとんと響いてこない。さつと一廻りしてから、外に出た。

今度は市バスに乗り、適当なところで降りた。ちょうど昼食の時間である。小さな食堂を目にしたので、店内に入った。

妻とミヒヤエルは牛丼を注文する。私の前には天とじ丼と小皿のお赤飯。それを食べ出すと、これがまたよい味なのである。京都は、どうやら小さい飲食店が美味しいように思えた。

三人とも満たされた気持ちで、再び歩き出して、東本願寺の境内に足を踏み入れた。

広大に敷きしめた玉砂利の上では、無数の鳩が群れ遊んでいる。それを眺めていると、のびのびとした気持ちとなってくるのである。市の中央にこのような広々したところがあるとは、思いも寄らなかつた。車の騒音も耳に入らず、静寂さが辺りを包んでいるのである。しばらくそこに身を預けた。

次は、朱色の楼門の八坂神社に行った。

門を潜ると、両側に金魚すくいやヨーヨーすくいなどの露店が並び、無数の提灯が数珠のようにぶら下がっている。午後の今は、人の姿をあまり見かけない。これから夕方になるにつれて人が出て、さぞ賑やかな夜店風景を呈することだろう。

周囲には、三分咲きの桜の木々が立ち並んでいる。妻が、目の前のひと際大きな枝垂れ桜を仰ぎ見ながら、

「満開になったら、さぞきれいでしょうね」

と、声を出した。

「でも、これから咲こうとする蕾もいいよ。淡さと同時に、無限の力強さを感じるからね」私も梢に付いている小さな蕾を仰いだ。義母も一緒だったらと思った。近くで売っていた綿飴を一本買い、それを三人でつき合いながら境内から出た。

交差点を渡ると、もう祇園通りである。

さすが花街、大勢の人で賑やかだ。しかし、本通りから少し脇道に入ると、格子のついた木造りのお茶屋や料亭、それに割烹などが軒を並べ、そこはかとな趣が漂っている。意外と静かなのに驚く。私たちの靴の音が、コツコツと耳に入るだけなのである。身なりよいよ二人連れが、木戸前にかかっている紺の暖簾を潜って奥へ消えた。私たちは向きを変えて、店舗の灯りで溢れた本通りに戻った。

夕食を摂ろうとして鮎屋に入った。

注文した千円のちらし寿司を待っていると、白髪の人を柔らかな顔をした店主らしき年配の方が奥から出てきて、一人ひとりの客に挨拶をしながらテーブルを回りはじめた。私たちのところにも近寄ってきた。

「おいしいです」

妻がそう言うのと、店主はにっこりした表情を浮かべた。それを見て、ここの店は客を大切にしているのだろうと思った。このような人が、伝統的な京都の歴史と味を伝え続けているのだ。

食事を終えてから人影の疎らな通りを歩いていると、着飾った若い女性たちがタクシーから続々と降りてくるのを見かけるようになった。これから仕事場へ行くのだろう。祇園の夜がはじまるのだ。紺色の着物を身につけた一人の芸妓らしき人が、向こうの角から現れ、消えた。

翌日、布団をたたみ、パンと紅茶で朝食を摂ってから清水寺へ向った。

境内の桜は五分咲きだ。これがあと数日したら、満開になるに違いない。その時、本堂から京都市を見下ろせば、淡い桜色雲の下に家々の屋根が望め、一際華やかな清水の舞台になることだろう。想像するだけで、もう満開の桜花を見たような気になった。

この清水寺、周りの山や谷を巧みに考慮して建てられ、自然と溶け合っている。耳を澄ますと、裏山で鳴くウグイスの音が聞こえてくる。先ほどまで降っていた雨は止み、濡れた新緑の葉が輝き出している。早春のこの雨で、花は一気に咲き出すだろう。

立ち止まって息を大きく吸うと、新鮮な大気が体の隅々まで行き渡り、精神が新たに目覚めてくる。それは、「清水の舞台から飛び下りるような気持で」と言われているように、今までの自分から離れて、新たな自分を発見するような清々しい心境になってくるのだ。

本堂では、白い服を着た約二十名の年配の女性一団が、一人の坊さんの叩く木魚に合わせながら般若心経を誦経している。背中には南無観世音菩薩の文字が記され、その低い声はもう何百年前から続いているように映り、じっと耳を傾けた。

芳しい香に包まれていると、遠い過去に自分が存在していたかのような気持ちになってくる。

妻に促されて、再び歩き出し、境内を出た。

と、軒が並ぶ参道の坂道となった。どこからともなく、甘酸っぱい匂いが漂ってくる。生八ツ橋だ。店に入り、いくつか買いい、それを口に入れると、ニッキの味が広がってくる。いい味だ。妻も、「おいしい。おいしい」と言いながら、八ツ橋を食べていた。

さらに下って行くと、静かな佇まいの狭い道となった。

学校が春休みのせい、十代の女性たちの姿が多い。皆、生き生きしてたのしそう。目が大きく、ふっくらした平安期の女性を想い起こす顔つきである。高台寺付近のここら一帯は、何か独特な風情を感じるころだ。

ミヒヤエルが、「お腹がへった」と声を上げたので、近くにあった小さな食堂に入ることにした。

私たちはうどんを注文する。ちょうど店内では、春の選抜高校野球が放映されていた。それも、地元の平安高校の試合である。お客たちは食べるのも忘れて観ている。何が起るかわからない意外性のある高校野球。日本にいた時は、私もよくテレビの前で釘つけになっていたものだ。ヒットが出るたびに、「ワァ！」と歓声が湧く。そのたびに、画面に目を向けた。

昼食を摂ってから、市内の二条城と西本願寺を見学し、さらに足を延ばして、古い木造建築物と格子造りが並ぶ京下町の島原周辺をぶらついていた。

再びバスに乗って宿へ戻る途中、隣に座っていた妻が、

「緑の少ない市内の中心地よりも、郊外を歩いてみたいわ」

と望んだので、明日は大原へ行くことにした。

翌朝、女将さんの「今日の午後は、初夏の暖かさになりますえ」の言葉を聞いてから宿を出た。

バスは緑の多い山間道を抜けるように走り、三〇分ほどで大原に到着し、参道を歩きはじめた。

早朝のせい、人の影を見かけない。小川に沿った坂道には、ナスやキュウリの紫蘇漬けを売っている店などが並び、赤い椿の花がところどころに落ちている。小川のせせらぎを耳にしながらの上り道である。

十五分ほどで三千院の門前に立った。

境内に足を踏み入ると、杉の木立と苔と草木で辺り一面は青みどりである。まるで異次元の世界だ。耳を澄ますと、風がそよがす葉ずれの音が聞こえ、言葉を失ったようになって、しばらく立ち尽くしていた。妻も辺りの景色に、目を注ぎ続けていた。

その彼女に声をかけた。

「君が育った黒い森地方にも、このような青々した景色のところもあったね」

「そうね。そこへ、私たちは母と一緒に握りを持って、ピクニックによく出かけたわね」

「そうだったな」

当時の義母の姿が浮かんでくるのだった。しばらく三千院にいてから、門を出た。緑の樹木の中をゆっくりと進んでいると、来迎院が見え出した。

本堂には、藤原時代に造られた木製の釈迦と阿弥陀如来が奉られている。その柔らかな曲線に魅せられ、写真を撮ろうとした。が、止めた。この薬師如来の像を写真に納めても、その美しさは撮れないぞ、この如来から漂う空間の美は、今のここでしか読みとれ

ないと思つたからだつた。

本堂の廊下に腰掛け、私たちは一時間近く丹精で行き届いた庭を眺めたり、近くにあつた鐘を撞いたりしながら、のんびりと過ごしていた。ふと、足元に目を落とすと、二匹のトカゲがじつとして動かないでいる。

一匹は色の鮮やかなスマートなトカゲ、もう一匹は太めのトカゲ。どちらも腹をピクピクさせ、生きているのがたのしそう。

「おれたちはこの静けさのなかで、念仏を耳にしながら育っているのだぞ」
と、胸を張って誇っているような。一分間近く、彼らと対面していた。

緑に囲まれているこの付近一帯、紅葉した頃も、目と心をたのしませてくれることだろう。豊かな自然と人間が織りなす歴史のなかに、今自分はいるのである。太陽の光があたたかく感じられ、心地良い。ミヒヤエルは、母の隣に座つてにこにこ顔だ。

来た道を引き返し、山里の大原で昼食を摂り、次は平清盛の娘が静かに暮らした寂光院へ向つた。

道の左右には、畑と田圃が並び、その水田風景を目にしながら歩いていると、自然と心が和んでくる。ミヒヤエルは手に小さな棒切れを持ち、弾んだように歩き、そのあとに私たち二人が続いた。

しばらくすると、長い石段の前に立つた。そこを一段一段と上ると、緑の林の中にひっそりと建っている寂光院が見え出した。

院の前で、地元の年配女性がマイクを持ちながら堂と庭についての説明をはじめた。その話よりも、言葉の語尾を高く上げる彼女の話し方に、この地の歴史を知る思いとなつた。と同時に、腰をいくらか折りながら話している彼女の姿に、晩年の義母を見る思いともなつた。

大原の里でゆつくりと過ごしたあと、再びバスに乗って宿に戻つた。そして、部屋で少し休んでから、近くの鴨川へ出かけた。

川べりに沿って咲く桜の花は、七分咲きである。あと数日したら、満開となつて多くの花見客で賑わうことだろう。その時、花びらは川面を覆うに違いない。桜の花が美しいのは、ほんのわずかな期間しか咲かないところにあるのだ。直ぐに散ることがわかつているからこそ、この咲く瞬間に、美しさを見ているのだ。

妻とミヒヤエルは、淡く咲いている桜の下で手をつなぎながらたのしそうに歩いている。一枚の花びらがミヒヤエルの肩にのつた。それを、妻は見つめた。母にも、この桜の花を見せたかっただろうにと思つた。

二時間して宿に戻ると、三人とも疲れが出て、眠気が襲ってくる。そこで、布団を敷きはじめた。と、彼女が、「明日はどこへ行くの、またお寺？」と訊いた。

「そうだな。京都駅から列車に乗り、宇治に行くよ。十円玉に刻んであるところを訪ねる予定だ」

今までお寺見学ばかりしていたので、それ以外のところにも行きたくなってきたような彼女だつた。しかし、京都でお寺以外に行くところがあるのだろうかと考えながら、布団に潜り込んだ。

京都駅から二十分ほどで宇治駅に着き、平等院へ向つた。

途中、参道に並んでいるお店で、ゲルトルートが、「ドイツへのお土産に」と言いながら、湯呑茶碗をいくつか買う。陶器が好きな彼女と義母だった。特に、義母は日本の様々な陶器の写真集をチュービンゲン市内の図書館から借りて、観ていたこともあった。その姿が目につかんでくるのだった。

境内に入ると、鳳凰堂前の池とその周辺は工事中である。極楽浄土を思わせる雰囲気を感じる事ができずに残念。おまけに、雨が降り出して来る。

平等院を出て、かさを差しながら宇治川に沿って歩いていると、雨足が強くなり出して来る。

さいわい、駅前まで来ると、雨が急に小降りとなった。そこで、隣駅にある黄檗宗の万福寺に行くことにした。

境内の門を潜ると、何人もの若い坊さんたちが作務をしている姿を見かける。

建物はすべて瓦屋根葺きの回廊で繋がれているので、私たちは雨に濡れることもなく、ゆっくりと歩いていた。ここは、中国様式である左右対称の壮麗な建築物が昔のままの姿で残っていて、今の時代にあっても脈々と息づいているところだ。

雨が止んでから、門から出た。と、妻が私の顔を見た。

「日本の人は、何を思いながらお寺を歩いているのかしら？」

「それは人それぞれだと思う。歴史の重みを感じる人もいるし、建物や仏像に魅せられる人もいる。そのなかで自分と対話をする人もいるだろう。わたしの場合、建物を造った当時の人たちと、今に至るまでお寺を維持してきた人たちの苦勞、よろこびなどを思ったりもする。また、仏像の柔らかい線に美しさを感じ、うっとりさせられる。当時それを作った人が、どのような願いを込めて彫っていたのかを読み取ろうとする。と、歴史のなかに自分がいるようになり、歴史の音が聞けるのだ。そうすると、謙虚になっている自分を見出すのだ」

再び京都駅に戻り、いつものバスに乗って宿近くの停留所で降りると、今まで灰色だった空が青色に変わって、路面が輝き出していた。

少し行くと、毎日一回立ち寄る、和菓子店が見えたので、そこに入って桜餅と蓬もちを買った。店から出た。と、彼女が、

「ここはあなたのお店ね」

と、笑みを浮かべながら言った。

「そうだね。このような店がチュービンゲンにあつたら、うれしいのだが」

そう応えて、私は紙袋に包まれたよもぎ餅を取り出し、口に入れた。ドイツにはない、しっとりしたあんの味が、胃ばかりでなく気持ちまでも膨らましてくれるのである。

夕食を部屋で摂り、炬燵に足を入れて休んでいると、通りから、「石焼き芋、いしやきいも」とスピーカーから流れる声が入ってくる。妻は昔を思い出したようで、千円札を手にして外へ出た。

五分もしないで、彼女は二つのお芋を持って、戻ってくる。石で焼いたさつま芋には見えなかったが、彼女はそれをよるこんで頬張りながら一つ半ほど食べた。義母も日本に滞在中、何度かさつま芋を、「甘いジャガイモ」と言いながら食べていたことがあった。日本の食べ物なら、何でも好む妻と義母だった。

翌朝、起きて部屋のカーテンを引くと、曇天である。昨日までお寺の見学ばかりだった

ので、嵯峨・嵐山から走っているトロッキョ電車に乗り、小舟で保津川溪流下りを体験することにした。

嵐山駅で降りて歩き出すと、若者の姿が多い。どういうわけか、皆手にコロツケを持って歩いている。ここはコロツケが名物なのだろうと思い、私たちも買って口に入れた。暖かくて、やさしいジャガイモの味だ。

しばらくすると、天竜寺が見えた。周辺の桜は八分咲きである。この風で散ってしまうのではないかと思いつつ、淡く咲いている桜の花の下を歩き続けた。

そろそろ観光用のトロッキョ電車に乗る時間である。駅に戻った。

赤く塗られた電車が、溪谷に沿って走り出した。二十五分間の乗車だ。屋根が付いてないので冷たい風が吹き抜け、身震いするような寒さである。次に計画した小舟での保津川下りは止めた。

京都駅に再び戻り、ステーションビル内の小さな店で昼食を摂ってから、二日前からはじまった祇園甲部歌舞練場の都おどりを見に行くことにした。

三階最後尾の棧敷に座った私たち。小唄と笛、小太鼓、三味線などの音色が館内に響き渡るなかで、芸妓と舞妓が舞台で舞っている。なんとという鮮やかで、かつ艶やかな美しさが日本舞踊にはあるのだろう。優艶だ。日本女性の美しさだ。

このような舞台に接したことがなかった私だったので、感動の連続である。隣にいるミヒヤエルは三味線の音に合わせて身体を動かし、妻は体を前に乗り出して眺めている。

舞台が桜吹雪になった。私たちの心も、舞い躍った。

宿に戻るバスの中で、妻が話しかけてきた。

「母にもあのような舞台を見させたかったわ」

「それはできなかったが、今を生きている私たちが心を合わせて、しっかりと暮らしていけば、お義母さんはよろこんでくれるよ」

「そうね」

「お義母さんの死は終りでなく、私たちの心のなかに宿っているよ。彼女と共に過ごすことができて、よかった」

それを言える自分は、しあわせだと、感謝した。

十 奈良の大和路

ひとり近鉄奈良駅で降りてから、観光案内所で安い宿を探してもらったのだが、秋の観光シーズンの今ほど空き室がないとのことだった。仕方なくリュックを背負い、繁華街を歩き出すと、「朝食付き、シングル四千八百円」の大きな看板が目にとまった。

早速、そこに行き、室内に入った。ベッドとテレビ、それに小さな机と椅子が置いてある。風呂も付いている。迷わず投宿することにした。

ベッド上で少し休んでから、シャワーを浴び、夕食を摂るために外に出た。

七時の今は、繁華街の通りはネオンと店内からの灯りとで真昼のような明るさである。それに、行き来する人の数の多いこと。六時半には、どの店も閉まるテュービンゲンの通

りとはまったく違う光景だ。

しばらく歩いてみると、そば処を目にしたので、戸をガラガラと開けてなかに入った。十分もしないうちに、テーブルにトロロうどんが出てくる。粘りのある山芋と卵が、ツルツルしたうどんに微妙に混ざった味だ。久しぶりの食感に、舌が悦んでいるのがわかる。最後の一滴まで、惜しみながら飲み干した。

膨らんだ腹で外に出て、少し行くと、興福寺前に出た。

境内では、中学生の修学旅行の一団が笛を持って、これから吹くところである。照明灯でくつきりと浮かび上がった五重塔の下で、「荒城の月」のメロディーが流れはじめた。それを耳にしていると、記憶の遠いところに存在していた日本心が、少しずつ溢れて出て、ふるさとへの回帰に目覚めてくる。耳を済まして聴き続けた。

翌日、パンと紅茶で軽い朝食をしてから、郊外に建つ大安寺へ歩いて向かった。

二十分もしないで門を潜ると、鳩よりも大きめの二羽の鳥が、嘴を地につつきながら歩いているのが目に入った。その近くで、三人の若い職人さんたちが朝の一仕事を終えたのか、芝生の上に座りながら焚火を囲んで一服していた。

彼らの横を通り過ぎてしばらく足に任せていると、広い庭の真ん中に木のベンチを見つけたので、そこに腰かけた。

高い空の下、まだ休んでいる職人さんたちの軽やかな声が、焚火の煙と一緒にこちらまで届いてくる。目の前には、赤く色づきはじめた楓の葉が見える。あと二、三週間したら、彩りを増すことだろう。足元には、枯れた松葉と青いイチヨウの葉がいくつも横たわっている。秋の訪れを知る思いとなった。

誰かが本堂にかかっている鈴を叩いたのだろう、カランカランという音が響き渡った。それとともに、職人さんたちが働き出した。私もベンチから腰を上げた。

大安寺の門を出て、少し行くと、平地に稲田がいくつも並び、刈り取った穂には赤トンプボが止まっている。思わず指をクルクル回すと、少年時代のことが浮かんでくる。周りの農家の庭先には、オレンジ色の艶々した柿の実やイチジクの実がなっている。京都とは異なる、古都奈良の素朴な風景だ。

さらに歩いて行くと、いくつも立ち並ぶ電信柱の奥に、一三〇〇年前に建てられた白鳳文化を象徴する薬師寺三重塔が浮かび上がっているのが見え出してくる。もう少しで、唐の僧鑑真が建立した唐招提寺だ。ぜひ訪れたかったところだ。

門を潜ると、木と苔と土の織りなす匂いが漂い、まるで自分が林の中にいるような錯覚に陥る。ところどころに建つ、歴史を感じさせる建築物が静寂さを呼んでいる。期待していたようなところだ。

のんびりと土と小石の径を歩いていると、鑑真の尊像前に出た。辺りは、緑の木々に被われて、ひっそりとしている。山気を肌で感じるところだ。しばらく立ち続けながら思った。

唐人の鑑真が日本に仏法を伝えようとして、何回も苦難に遭いながら、両眼を失明してまでも渡来し、ここで最期を迎えることができたのも、仏法を信じたからだろう。それが、彼の生きるよろこびだったに違いない。

境内をゆっくりと歩いてから門を出ると、堀に囲まれた垂仁天皇陸が見え出し始める。道の両側の小さな畑には、ナスやカボチャなどが実っている。色とりどりのコスモスの

花があちこちに咲き乱れ、その上をモンシロチョウが愉快そうに飛び交っている。

ヒマワリの花も誇ったように咲いている。ドイツのヒマワリは身丈が高く、一本の茎にひとつの顔だが、ここのは一本の茎に仲良く二〇〜三〇の顔をつけている。人と同じように、国の違いによって、咲き方があるのだろうかと思ってしまう。

若い母親が幼児を前とうしろに乗せながら、快活そうに自転車のペダルを漕いでいる。

「日本のお母さん、優しいお母さん」

私にも、あのような母がいたのだ。

さらに行くと、ラーメンとギョーザと記された赤い看板が目にとまった。腕時計をのぞくと、二時過ぎである。遅くなった昼食を摂ることにした。

日本に着いたのが昨日、まず口にしたのが山芋うどんだった。そして、こんどはラーメンである。これも麺を食べていないせいだろう。

五分ほど待っていると、湯気の立った熱い餃子が運ばれてきた。皿に目を落とすと、餃子の皮がかなり黒く焦げている。これはと思つて眺めていると、店員が、「新たに作り直す」からと言った。日本では、会話を交わさなくても、意思は通じてしまうような。久しぶりの日本の旅なので、心が弾んでいるからそう思ったりするのだろうか。

しばらくすると、いい色に焼けた熱い餃子がテーブルの上ののった。酢醤油につけて、口に入れた。溶けるような味だ。ラーメンの麺も、こしが入っている。ゆつくりと食べ続けた。

満たされた腹で店を出て、近くに建ち並ぶ歴史的な建物をいくつか見学してから夕方近くホテルに戻り、湯に浸かった。

明日は早朝から歩き出すことになっている。早々に、ベッドに入った。

夜明け前にホテルを出てから、駅へ向かつて歩き出した。通りには、人影がない。少し行くと、正面の低い山に朝日が照り出した。と同時に、空が赤みを帯び出してくる。ちょうどその時、鐘の音が「ゴーン、ゴーン」と鳴り響いた。今、自分は古都奈良にいるのを体全体で感じ出した。

飛鳥駅で降りると、七時を回っていた。まず、高松塚古墳へ行くことにした。

数分もしないうちに、稲田のあぜ道となった。道端には、コスモスとヒガンバナの野花在咲き、ゆるやかな棚田の上を白サギが飛び、点在する農家の庭先にはみかんと柿の実がなっている。

焚火の匂いが漂うなか、野良仕事に出かける姿を一人、二人と見かける。緑に包まれたここに立っていると、まるで自分が古代にいるような錯覚に陥ってくる。

高松塚古墳前に着くと、急に雨が降り出してくる。それもかなり強い雨である。かさを差しながら、古墳を覆っている小さな竹林の前で、雨水の重さで笹が垂れてゆくのを見つめていた。これが飛鳥の音なのだろうと思つた。

再び、歩き出すと、「竿やーさおたけ」の澄んだ声が辺り一面に響いた。この地方に、古くから伝わっている歴史の声だ。この明日香の里、万葉歌に彩られたように、風情のあるところだ。雨もまた静けさを深め、こころを濡らしてくれるものだ。

駅に戻って、電車で再び乗って奈良駅で降りてから、奈良の大仏がどのくらいの大きさなのだろうと想像しながら東大寺へ向かった。

門を潜ると、広い境内は大勢の人で溢れていた。ちょうど、大仏開眼一二五〇年の千人

法要が行われていたからだだった。大仏前では、係員が、「止まらないで下さい。先へ先へ進んでください」と大声で訪問者に呼びかけている。あまりに大きな大仏を仰ぎ見て、嘔然として立ち尽くした。と、うしろから人の波が押し寄せてくる。立ち止まってははいられないのが残念。波に流されていく。

翌朝、目が覚め、窓から外をのぞくと、昨日と同様の曇り空である。雨が降らなければいいのだがと思いつながら、法隆寺駅へ向かった。

駅から歩き出すころになると、青い空が見え出し始める。二十分ほどで、寺の玄関前に立ち並ぶ松の参道に出た。と、琴の音が聞こえてくる。懐かしい音色に、耳を立て続けた。

門を潜ると、飛鳥時代をはじめとして各時代の建築物が、松の木と一緒に広々とした境内に整然と建ち並んでいるのを目にする。一気に、古代に遡ったようになった。

一つの建物内に入り、目の前に立つ百済観音像を見た時、言葉を失ってしまった。酒びんを手にした優美な細身の像が、まるで生きているかのように映ったからだ。

世界最古の木造建築の法隆寺。世界文化遺産の法隆寺。まさにその通りだ。どこも空間が広いせいなのだろう、歩きが自然とゆったりとしてくる。と同時に、時間もゆっくりと刻んでいるように感じ出し始める。

四時間近くここで過ごしていると、心が次第に膨らんできて、のんびりとした気持ちになっている自分を見出すのである。時空を超えたものが、ここにはあるからだろう。

前で歩いていた三世代家族の声が耳に入った。

「おばあちゃん、今日はよく歩いたやで……」

その会話を聞きながら、門を出た。と、電信柱に無数の電線が蜘蛛の網のようにかかっているのを目にして、急に現実を引き戻されたようになった。

奈良駅に戻ってから、これから新たに泊まる宿へ向かった。と言うのも、奈良の最後の一泊は今まで宿泊したビジネスホテルではなく、夕食と朝食付きの日本的な旅館に泊まりたくなったからである。もちろん、二食付きなので九千円とはなるが、敢えてそうした。

奈良公園を通って夕方前に、静かな屋敷町高畑に建つKKR（国家公務員共済組合）に着いた。志賀直哉旧居のすぐ近くである。

玄関の格子戸をガラガラと開け、靴を脱ぎ、部屋でゴロツと横になると、畳の匂いが懐かしさを運んでくれる。しばらく、そのままできてから起き上がり、部屋を出てから風呂場に行った。

三十分以上も湯船に浸かっていると、一人旅の緊張も取れて、心安らかになってくる。山の歌が自然と口から出てくるのだった。

湯上がりの体で、夕餉の卓に着くと、色とりどりに盛られた八品が並んでいる。刺し身、天ぷら、焼き魚、豆腐、それに暖かいご飯に湯気の立っているナメコのみそ汁、どれも昔を思い出させてくれるものばかりだ。日本に着いて五日目にして、豪華な食事である。

この深い味、胃も心も飲みあっているのがわかる。あまり御代わりすると、明日の朝食に影響が出てくると思い、これくらいで止めにしておこう。想像していた通りの日本の宿だ。

翌朝、食事前の散歩に出かけた。

昨夜から降り続けている雨で、土道に転がっている小石が光っている。志賀直哉は、木々の葉から発散した甘酸っぱい香りが漂うこの道を歩き、ものを書く英気を養っていたのだ。

ろう。しつとりとした趣のあるところだ。

かさを差しながら、小一時間の散策を終え、再び食卓につくと、いくつも並べてある小皿の上に納豆、おしんこう、小魚、海苔などが盛ってある。それに湯気の立ったみそ汁とご飯だ。

「こんなゼイタクは許されるのだろうか」

との言葉が、口から漏れた。これがゼイタクだと知る自分がしあわせだと思った。日本食が好きな妻がいたら、さぞよろこぶだろうと思いつながら食べ続けた。

荷物をまとめて宿を出ると、雨は上がっていた。リュックを背負いながら、鹿のいる奈良公園を横切っていると、何人もの若い人たちが草取りをしているのを目にする。そのうちの一人が、

「おはようございます」

と、明るい声をかけてきた。

「お早うございます」

こちらでも弾んだ声を出した。思いも寄らぬ人からの挨拶に、ついうれしさを覚えた。

そういえば、この古い都の奈良市繁華街で、若い人たちが生きいきと働いていた姿をよく見かけた。この町は彼らによって息づいているようにも思えた。若い人のバイタリテイーを感じてならなかった。

十一 広島と長崎の祈り

毎年の八月六日、ドイツのいくつかの町では、広島で多くの人が亡くなったことを追悼する平和への祈りがもたれている。

ここテュービンゲンでも、教会前広場で平和運動をしているグループが広島原爆当時の写真をパネルに貼って、道行く人に平和をアピールしている。私も鶴を折ったりしながら、そのグループの人たちと一緒に毎年通行人に、「戦争のない世界を！」と訴えかけている。

その私が、まだ広島に足を運んだことがない。これではいけないと常々思っていた。しかし、とうとうその日が訪れた。

広島駅の改札口を出ると、テュービンゲンで知り合いになったM夫妻が私を待っていてくれた。五年ぶりの再会である。これから、ご夫妻が住まわれている牧師館で三泊滞在することになっている。

M夫人に通された部屋で荷を下ろしてから、ご夫妻に連れられて平和公園へ向かった。路面電車から降りて、少し歩いて行くと、無残な姿の原爆ドームが見えてくる。私たち三人はドーム前でしばらく立ち止まってから、原爆死没者慰霊碑に行った。

碑には、

「安らかに眠って下さい 過ちは繰り返しませぬから」

と、刻まれている。その前で手を合わせてから、今年から開館した平和祈念館に足を運んだ。

館内に入ると、壁にかかっているパネルに、

「…国の誤った政策により…」

と記されてある。それを読み、深い溜め息が出た。

一九四五年八月六日午前八時一五分に落とされた一つの原子爆弾によって、その年だけで約十四万人が亡くなったのである。そのことを思いながら、館内を歩きはじめた。

死没者一人ひとりの名前と遺影が映っているコーナーに足を踏み入れると、大きな画面に、被爆した幼児からお年寄り一人ひとりの顔と姿が、絶えまなく映し出されるのを目にする。それを観ていると、十四万という数では計れない一人ひとりの命の重さを感じ、胸が締めつけられそうになる。ひたすら映像に目を注ぎ続けた。

次は、被爆した人の体験が集められているコーナーに入った。

ノートに書かれた文章に目を落していると、鼻をかまざるをえなくなる。一瞬にして廃墟となってしまった広島市。半世紀が過ぎた今も、被爆者は健康に不安を抱えているのだ。辺りを見回すと、中学生と高校生の団体が多数。皆、真剣に被爆記を読んでいる。私と同じように、文字が滲んで見えているだろう。

平和記念館を出てから、長方形型の平和記念資料館へ向かった。

入口前では、中学生らしい生徒たちが整然と並んでいる。五十円を払い、館内に入り、当時の生々しい惨状の写真と解説を目にしていると、胸が慄いてくる。こんな惨いことがなぜ許せるのだ。これを、再びどのようなところでも起こしてはならない。これは戦争で勝った負けたをとり越した、私たち人類への挑戦だ。

外国人もいる。彼らもこの惨状を見て驚いていることだろう。原爆の惨慄を知った彼らに、

「国に帰ったら、一人でも多くの人にこの惨状を伝えてほしい」

と、切に願った。そのことが、平和運動の源となると信じるからだ。

館を出て平和公園に架かっている橋を渡っていると、先ほど見た被爆者の絵が浮かんでくる。

「水を下さい。水を下さい。助けてください…」

下から叫ぶような声が、聴こえてくるように思える。立ち尽くしながら、流れ行く水を眺め続けた。私たちの代わりに亡くなった人たちだ。「すみません」との言葉が、口から漏れた。

朝ベッドの中で、ひと筋の涙がツーンと耳の方へ流れ落ちた。悲しみとも怒りともいえず、人間が生んだ愚かな行為への涙だ。

朝食を済ましたあと、M夫妻に連れられ、日本三景の一つに数えられる宮島に行った。目の前には、高さ一六メートルの朱塗りの大鳥居と社殿が海面の上に浮かんでいる。水位が二メートルほど引くと、大鳥居周辺の砂地を歩けるといふ。次に訪れた際は、妻と一緒にそこを歩いてみよう。「広島には、ぜひ行きたい」と望んでいた彼女だ。

私たち三人はお店が並ぶ通りを歩いてから、今度はロープウェイに乗って五二九メートルの弥山に行った。

頂上からは、青く澄んだ空の下に、瀬戸内海の大小の島々が浮かんでいるのが望め、カキ養殖の筏が海面に揺れている姿も見える。ここに立っていると、穏やかな時間のなかに、自分が包まれているを感じる。原爆で亡くなった人も、ここでこの平和な美し

い景色を眺めたこともあっただろう。前に立つ大きな樹幹に手を触れた。この樹は、あの悲惨な原爆の光景を目にしたのだ。しばらくの間、幹に手を当て続けた。

翌朝、起き出してカーテンを開けると、雨が降っている。ご夫妻と一緒に朝食を摂ったあと、ひとりかさを持って、再び平和公園に行つて資料館などを一日中歩き廻つていた。

お世話になつた牧師夫妻にお礼をのべてから、広島駅を早朝に発つて、長崎駅に行き、駅近くのビジネスホテルで荷を下ろしてから、早速原爆資料館に行った。

館内に入ると、広島と同様に中学生と高校生の姿が多い。外国人の姿を見かけないと思つていたら、前にいる生徒たちは韓国人たちだった。ここ長崎でも、多くの朝鮮半島の人たちが被爆していたのである。館内を歩いていると、鼻で呼吸するのが難しくなつてくる。

出口前に置いてあつた感想ノートには、

「戦争は恐ろしい。戦争をする人はバカだ。平和をつくつていかねば」

と、生徒たちが綴っている。誰でもこの被爆の惨禍を目にすれば、平和を求める気持ち有一段と高まるだろう。

足を延ばして平和公園内を巡ろうとしたが、日が傾きかけてきたのでホテルに戻ることにした。

次の日、朝食を摂ってから、路面電車に乗つて平和公園へ向つた。

電車を降りて、花で囲まれた石段を上り切ると、高さ七メートルの噴水が目の前で飛沫を上げていた。そこを通り過ぎると、長崎の鐘が目に留まつた。この鐘が地球上の至るところへ、平和の音として響き渡るようにと両手を合わせた。

さらに行くと、高さ約十メートルの男性が座っている平和祈念像前に出た。像の右手は上方を指して原爆の脅威を、左手は水平に伸ばして平和を意味しているという。目を閉じた。昨日資料館で見た様々な惨状を撮つた写真が浮かんでくる。

一九四五年八月九日十一時二分、ここであつたという間に七万以上の人が倒れたのだ。何ということだ。戦争を早く終わらせたい、ソ連よりも有利に立ちたいとアメリカは考え、原爆を落としたのだ。この時は、もうドイツとイタリアは降伏していたのに。でも、これによって、日本の領土が分断されずに済んだのかもしれない。日本は、なぜ戦争に走つたのだ。

臉を開けると、四、五羽の鳩が像の左手の上に止まっているのが見えた。それを眺めながら、あの鳩たちも当時被爆した鳩の子孫かもしれないと思つた。

被爆した人の子孫のなかには、親や祖父母が原爆に遭つたことを話すのを控えている人もいると聞く。次の世代に影響が出るかもしれないという不安が残っているからだ。その心の内は計り知れない。戦争が終わつてから、市民の心の苦しみがはじまるのだ。

再び歩き出すと、原爆落下中心標に立っていた大きな母子像前に出た。母が死んだうになつている子を、腕の中に抱えている慰霊碑のような。その子が心の奥から、

「お母さん、お母さん」

と、呼びかけている。母はわが子の声を聴き、何もすることができずにいる姿だ。母ほど優しく、信頼できる人はこの世にはいない。しばらく眺めていると、目に涙が溜まつてくる。

翌日、長崎を発った列車の車窓に映る佐賀平野の広々した景色を眺めていると、人と人が殺し合う戦争が、この世界から消えてほしいとつくづく願うのだった。そのためにも、広島と長崎の被爆の惨状を世界の人に、語り伝えなければならぬ。亡くなった人たちの命が、私のこころに入り込んで今、それをしなければならぬ。

毎年八月六日、テュービンゲンの教会前広場前に立たねば。戦争のない世界を創っていくためにも。

それから六年経ったある日のこと、私の家にテュービンゲンの平和運動グループから電話がかかってきた。

「昨年八月六日も、日本の人たちが鶴を折ってくれて、道行く人にそれらを手渡ししてくれましたね。今年はどうしようかと考えているところなのです。いい案が何かありますか」

それを聴き、ある一つの考えが浮かんだ。それを実行するために広島へ行って、あることをお願いしてみようと思った。

広島駅から市電に乗って、原爆ドーム前で降り、ドーム前でしばらく立ち止まってから平和記念資料館へ向った。

地下一階の啓発担当室に入り、その職員に私の望みを伝えた。

「ええ、それはできますよ。ドイツ語に訳した大きなポスター三十枚がありますので、それを持っていつてみてはどうですか。ドイツ語でのDVDもありますし」

「本当ですか。それは、ありがたいです」

「毎年、それらを使用してもいいですよ。返還する必要はありません。それらのポスターがドイツの人たちの目に留まってくれば、私たちはうれいのですから」

対応してくれた女性は、にっこりした顔で言った。

「ポスターを包装するまでには一時間半はかかるので、もう一度ここに来てください」

「そうですか。それでは資料館内を歩いてきます」

今までに二回ほど広島を訪れているので、何がどこに展示されているのかを知っている。関心が強くあつたところを再び見て廻つてから、また、原爆死没者慰霊碑の前に立った。

ハニワ型の屋根の下に置いてある石棺に、「安らかに眠ってください。過ちは繰返しませぬから」と刻まれた文字を、再びじっと見つめていた。と、これは一体、誰が主語となつているかとの思いとなつた。主語がない文でも通用する巧みな日本語。先ほど、対応してくれた女性に訊ねてみよう。

一時間半が過ぎたので、資料館の啓発室に戻ると、ポスターは包装されていた。先ほどの女性に、

「『過ちは繰返しませぬから』との文の主格についてなのですが」

と言つてから、

「あれは、誰を指しているのですか」と、訊ねた。

「あれは、全世界の人たちを指しています。米国ではアメリカ人が、日本では日本人が、他の国ではその国の人が、未来を含めての声を出しているのです。英語で言うところ、Weとなりません」

「では、米国では、このような資料館みたいな建物がどこかに在るのでしょいか」

「アメリカに在住の日本人が、そのようなものを造る計画を企てようとしたが、建てるまでには至っていません」

「そうですか」

そう言うてから、私はまた訊ねた。

「それでは日本人によって実行された真珠湾攻撃に関する詳しい資料館みたいなものが、米国には在るのでしょうか」

「ハワイに建っていると聞いています」

「日本にはないのですか？」

「さあ」

彼女は首を横に振った。

「そうですか」

彼女にお礼をのべて、三キログラム以上はあるだろうポスターを両手で抱えて外に出た。平和記念公園を歩きながら、やった方の加害者はその行為を忘れがちになりがちだが、やられた方の被害者はその行為を何かと憶えているものだと思う。その点、ドイツではどうかと考えた。

ドイツのように強制収容所を今も残して、ナチ政府が犯した残忍な行為を次の世代にしつかりと伝え、過去を克服し、記憶から文化を創っている国もあるのだ。

日本も本当に国が、一人ひとりが謙虚になれば、第二次世界戦争中、日本軍がした行為を知らせる資料館、また真珠湾攻撃をなぜしたかとの深い反省をうながす展示館を国内に建て、次の世代に真実をしつかりと伝えることは大切だろう。戦争のない世界を創り出すためにも必要だ。

ドーム付近の近くから、妻に電話をかけた。

「ポスター三十枚とDVDを、手にすることができた」

「ほんと、よかったわね」

妻の弾んだ声である。ここまで足を運んだ甲斐があった。八月六日教会前の広場で、これらのポスターをパネルに貼って、道行く人に見てもらおう。戦争のない、核爆弾のない世界を願うがゆえに。

一九六七年、日本政府が公表した非核三原則、「核兵器をもたず、つくらず、もちこませず」を今も国是としている私たち日本人だ。戦争を避けるためにも、広島と長崎に落ちた原爆のことを、さらに世界に伝えていかねばならない。それと同様に、加害者体験もしつかりと伝えていかねばならない。お互い、信頼関係を築いていくためにも。

十二 土佐の人と四万十川の自然

四国の徳島市で二日間過ごしたあと、バスに乗って高知駅へ向った。

予約していた駅近くの小さなビジネスホテルにチェックインするまでには、まだ時間が十分にある。リュックを駅構内のコインロッカーに入れ、高知城へ歩いて行くと、城の追

手門が見え出して来る。

そこを潜ると、「無料でガイドします」の看板が目にとまった。

早速、近くに設置されてあるテントのところへ寄って、中にいた人に声をかけると、六十代の女性が案内してくれることになった。彼女は、約百名登録しているボランティアの一人である。歩きながら、城内の建物などについていろいろと説明をしてくれる。それを聞いたのち、彼女に、

「お城とはまったく関係ないのですが、土佐人の性格は一言でいったらどのようなものでしょうか」

と訊ねると、この地で生まれ育った彼女は、立ち止まり、私の顔を見ながら、

「そうですね、女性は、はちきん。男性は、いごっそうかしら。はちきんとは、竹を割ったような性格で、いごっそうは、これと思ったら一途にそれをする人のことです」と、答えた。

三十分ほどしてから彼女と別れ、今度は一人で天守閣と本丸に足を踏み入れた。

最上階からは、高知市が一望でき、その奥には一月だというのに、緑濃い山々が連なっている。冬でも穏やかな地なのを知った。

再び、城内を歩いてから先ほどのテントのところに戻り、彼女にお礼をのべると、この地方の見所をいくつか教えてくれる。ありがたいことだと思いつつ、その言葉に耳を傾けた。ドイツでは、無償でボランティアをする人をあまり見かけないが、日本は違う。

「人を案内することによって、私も勉強しますから」

微笑みながら、彼女が言った。この微笑こそ、謙虚さを身につけた日本人の心だと思った。腕時計をのぞくと、そろそろホテルのチェックインの時間だ。駅に戻ることにした。

コインローカーからリュックを取り出して、ホテルへ向った。

室内で少し休んでから、夕食を摂ろうと外に出た。せっかく、高知までやって来たのだから、夕食はカツオのたたきを食べようと歩いていると、「ちゃんご飯」と書かれた看板が目に入った。

窓からその店内をのぞくと、秋刀魚や鯖や鮭の塩焼き、それにおでんやシウマイなど、食べたいと思うものばかりが大きなテーブルの上にならりと並んでいる。その奥に食べるところもある。これはいい食べ物屋を見つけたと思い、店内に入った。

三十種類以上もある品々から、自分で選び出したおかず数品と白いご飯を膳にのせ、小さな卓についた。どれも旨そうだ。これで六百円とは安い。

このような店に感激した私は、食べ終わってからエプロン姿の女性店員に訊ねた。

「自分で好きなおかずを選べ、それも計りで計算されるので、どんなに少なくてもいいし、このような店はいいですね。いづころから、開いているのですか」

「一年前からです。けっこう皆さんに親しまれています。独身者や高齢者も多く来ますよ」

「何が、大変なのでしょう」

「品をいくつも揃えることですね」

ドイツで日本の食材を得られない私には、ここは天国だ。満たされた腹で外に出て、市内を三十分ほど歩いてからホテルに戻った。

翌朝、窓のカーテンを引くと、雲一つない青空である。一階のカウンターのあるところで朝食を摂ってから、三百年前から続いている日曜市に行った。

九時だというのに、一キロほどある通りの両側には屋台がぎつしりと立ち並び、大勢の人で賑わっている。山間部で栽培されている柚子・みかん・椎茸、それにふきのとう・ワラビ・うどなどの新鮮な野菜がところ狭しと並べられてあった。魚貝類・鰻頭・田舎寿司・植木なども目にする。売っている人は、直接栽培しているおじいさんやおばあさんたちだ。

干した小魚が並んでいたの、その軒の前で眺めていると、おばあさんが、

「うまいぜよ」

と言って、ひび割れのした手で一つくれる。「では」と声を出してから、それを口に入れると、土佐の潮が広がってくる。いくらか買うことにした。

その干し魚を口に入れながら、鏡川方面を歩いていると、歩道上で人と自転車とが頻繁に行き交っているのを見て、これはと思った。

テュービンゲン市内では、自転車専用の道がかならず設けられていて、そこを歩くことは許されない。自転車に乗っている人と歩いている人は、お互いの権利を認めている。が、ここでは二つの異質なものが溶け合って、お互いが権利を主張していない。事故はないのだろうか。お年寄りも歩いている際に、不安を感じないのだろうか。自転車はかなりゆっくりと走っているとはいえ、不思議に映った。

鏡川に架かっている橋から下をのぞくと、浮遊ゴミを川べりにまったく見かけない。これもボランティアの人たちによるものだろうか。日本にはいい活動があるなと思いつながら歩いていった。

空腹を感じ出したので、市民が気兼ねなく飲み食いできる屋根つきのビアールホールのひるめ市場に行き、食べたかったカツオのたたき丼を口に入れてから、バスに乗って五台山へ向かった。

七、八年前から草木や花に強い関心を持つようになった私は、ある時、何かの本で植物学の父と呼ばれる牧野富太郎氏のことを知った。その氏のゆかりの植物園が五台山にあったので、ぜひ訪れたいと思っていた。それに、四国にはヤッコソウという奴さんに似た花が咲いているとある知人から聞いていたので、それを見たかった。

六ヘクタールの園内を、牧野氏が愛した草木を見ながら歩いていた。と、ヤッコソウの大きな模型花が目に入った。説明文には、室戸岬地方で十二月ごろに咲くと記されていた。早速、その花の絵葉書を買って、その知人に送ることにしよう。こうした交流がうれしいのだ。

二時間近く冬の陽を浴びながら、園に咲いている花一つひとつを見ながらのんびりと歩き廻っていた。

翌日、小さな朝食ルームに行くと、客は私一人だけ。カウンターでパンと紅茶を飲みながら、ここで働いている四十代の女性と会話を交わした。

「大阪の銀行に三年間勤めたあと、生まれ育った高知に戻りました」

そう語ったあと、彼女が話し出した。

「日曜市はいくらか値段が高く、地元の人はいあまり行きませんよ。観光客が出かけるのではないですか。ひらめ市場は朝からビールなどを飲みますね。高知の人は飲みますから。市長は、一期目はよかったが、二期三期となるとね。二年前、義母が歩道で自転車とぶつかって、腰の骨にひびが入ったことがありますよ。高知は離婚率が日本で二番目に高いのです。セックスは月に一回の人もありますし、知り合いの夫婦は四年もないとか。セッ

クストレスの人も多くいますよ」

地元で暮らす人の生の声は、いいものだ。彼女と四十分近くは話をしただろうか。家族や夫婦や性や子供のいじめ、それに社会保障など、次々とテーマが移っていった。

頬を赤くして熱心に語る彼女。高知の女性は思っていることを、素直に口に出すのだろうと思った。二日前にボランティアの女性が言った、「はちきん（竹を割った性格）」とことが浮かんだ。

彼女と話をしてから外に出ると、昨日と同様に快晴だ。海を眺めようとして桂浜へ向かった。

バスに揺られ三十分で浜に着くと、潮の匂いが漂ってくる。

防波堤で釣りをしている人を見かけたので近寄ると、バケツに十数センチのふぐが数匹泳いでいる。訊ねると、食べるとのこと。タワラも時々獲れるようだ。「今日はぬくいわ」と言いながら、釣り人は糸を垂らしていた。

向きを変えて少し行くと、太平洋の彼方に目を据えている坂本龍馬像の前に出た。

海を見つめているその姿は、その先の世界に目を向けているような。しばらくその像を眺めてから白浜に出て、弓なりに伸びている海岸を歩き続けた。

波打ち寄せる黒潮が、押したり引いたりしている。その奥には、大きな貨物船がゆっくりと進み、その手前では、いくつかの小さな舟が白い帆を上げながら右に左に揺れている。坂本龍馬はここに立って、この広い海から新しい息吹を感じ取っていたに違いない。それを知るためにも、歩いて五分もしないところに建つ龍馬記念館に行くことにした。

館内に展示されたものを目にしていると、龍馬の人柄や考え方が伝わってくる。特に、彼が書いた二十以上の手紙文はわかりやすく、彼の考えがさりと出ている。

しばらくしてから、広々とした海が一望できる館の屋上に立った。と、「ヒューヒョロ」と一羽のトンビが上空に弧を描くように、ゆっくりと回りはじめた。その姿に目を奮われていると、小さなトンビが飛んできて、二羽で弧を優雅に描き出した。龍馬と彼の妻であるお龍のようだ。目で追いつけた。

今日の一日は海を眺め、龍馬の生き方に思いを馳せての時間だった。「いごっそう」とは、彼のような一途な性格をいうのだろう。

翌日、朝食を摂っていると、昨日話をした女性が、

「カツオの一本釣りでは有名な魚市場が、久礼にありますよ。四万十川の中村へ行く途中ですよ」

と言ったのを聞き、そこに立ち寄ることにした。

七時半、二階建ての高知駅発の一両電車に乗った。

車内には、中学と高校の生徒や通勤者が多い。二、三駅走っては、数分間の停車。ガタンと電車が停まるたびに、何人かの乗客が降りる。数人だけとなった。静かだ。

遠くに目を向けると、深い緑で覆われた低い山々が望め、田圃の奥には木立で囲まれた農家が点在しているのが見える。渋い色合いの里山風景だ。

山小屋風の土佐久礼駅に着き、大きなリュックをどこかに預けようとしたが、コインロッカーはどこにもない。仕方なく、リュックを背負って魚市場へ向かった。

数分もしないうちに、魚のおいがしてくる。

小さな市場に足を踏み入れると、シャッターをおろしている店もあれば、夫が獲ってきた

た魚を、妻が軒に出しかけているところもある。木台上に並んでいる魚をのぞきながら歩いていると、炭で魚を焼きますと書かれた看板が目に残った。誘われるようにして、その中に入った。

どの魚を焼いてもらうかと迷ったが、昔食べ慣れたアジを焼いてもらおうとした。店の前で魚を焼いている若い娘さんのところに行き、話しかけた。

「この人なの？」

「ええ、この久礼で生まれ育ちました」

「この地に残って、働いているわけだ」

「わたしは例外で、多くの人はここを出て、大きな町で働いています。秋に祭りがあるのですが、そのときは皆戻って来ます。年々若い人が減ってきて、さびしいです」

日焼けした顔の漁師の娘は、太い指で網の上のつたアジを上手にひっくり返ししながら言った。

「漁師の男性は、たくましいのでは？」

「ええ、負けてしまいます」

そう声を出して、はにかむような顔をして魚をまた裏返しにした。炭の赤い小さな炎で、周りは暖かい。彼女としばらく話してから、テーブルに戻った。

久しぶりに食べる湯気の立つているアジ。皮まで呑み込んでしまう。それを食べ終えてから、また歩き出した。木台上には、銀色を発しているタチウオ・ハマチ・ブリ・カンパチ・赤色のタイ・黒っぽいグレ、それにタコ・スルメ・イカなどが並んでいる。どれも昨日獲れただけあって、目が光っている。

サバとカツオ、それにトビウオの刺身を切り売っている店前に立つと、女主人が奥から出て来て、

「海の匂いがして、よい味ですよ。小さく切りますから、食べてみてはどうですか」と、威勢のいい声を出した。

「では、青アジを少しだけいただけますか」

女主人は包丁さばきもよく、切っていく。

小皿にのつたそのアジを口に入れると、シャキイとした歯ごたえである。壁には、この店がテレビで放映されたのだろうか、その際に撮った写真が何枚か壁に貼ってあった。小さな魚市場だけに、地元の人暮らしをわずかだが垣間見たような気になった。

再び、久礼駅に戻り、電車に乗って中村駅で降りて、駅前のビジネスホテルでリュックを下ろしてから、観光協会で赤い自転車借りた。そして、四万十川へ走ろうとした。が、今の時刻では遅いと思い、止めにして、近くにあるトンボ自然公園に行くことにした。

自転車を二十分ほど漕いで公園内に入ると、陽を浴びながら半身を沼地に沈め、腰をかかげている四人の姿を見かけた。自転車を停めて、そのうちの一人の女性に話しかけた。

「何の作業をしているのですか」

「スイレンの間引きをしているのです」

「トンボの姿を見かけないのですが、どこにいるのですか」

「この時期は、見る事ができませんよ」

今は真冬。トンボの飛ぶ季節を忘れていたのだ。何ということだ。

「夏から秋にかけて、一日に六十種類以上のトンボが飛んでいる日もありますよ」

「そうなのですか。ごくろうさんです」

そう言って、またペダルを漕ぎ出し、入り組んだ山間の道をゆっくりと走った。

周囲には濃い緑の樹木が果てしなく続き、その傍に小川が音もなく流れている。肌に湿気を感じ、汗が顔から滲み出てくるようになった。このような地帯だから、トンボがよく育つのだろう。時々カラスの鳴き声が聴こえてくる。

二時間ほどサドルに座っていると、疲れも出てきたので、ホテルに戻ることにした。明日は自転車での四万十川沿いの走りだ。今日のように、晴れてくれるといいのだがと願いながら漕ぎ続けた。

翌日、朝食を済ませてから、再び自転車に乗った。日曜日の早朝ということもあってか、走っている車を見かけない。町はまだ眠っている。夜明け前に雨が降ったのだろう、路上が薄っすらと濡れている。上を仰ぐと思いついた青空である。私の心は自然と弾んでいた。

十分もしないうちに、四万十川が見え出して来る。道の両側には、太陽の光を浴びながら、木々の葉が輝き、ところどころに真紅の赤い椿が二つ三つ落ちていて、どこからともなく小鳥たちの鳴き声が聞こえてくる。ゆっくりと進んだ。

二匹の犬を連れとおばさんを見かけたので、その人に声をかけた。

「お早うございます」

「おはよう」

十メートル下に流れている川に目を向けると、朝日に照り輝きながら、川面の水が銀色に揺れ、ところどころに建つ人家の庭には、赤い小粒のナンテンや椿、それにみかんが実っている。上空では一メートルほどの羽を広げたトンビが、優雅な弧を描きながら飛び回り、畑の畦道には黄色い菜の花がもう咲きはじめている。春の訪れを知らせるような風景だ。

向こうから、おばあさんらしき人が、小さな一輪車を押しながら近づいて来た。

「ねぎを運んでいるのですか」

「ラッキョウでけ」

腰は折れ、足は内側に曲がり、背丈一メートルほどのおばあさんが応えた。手押し車には、ラッキョウと大根、それに大きな鎌があった。おばあさんはその大根を指差して、

「今もぎ取ってきたものだ。もう八十を越えると、昼間は家で何もすることはないけ」

と言って、頭に被っていた手拭いを口元でぎゅと結んだ。そして、

「この取りたての大根を、生のまま噛むとうまいけ」

と、声を出してにつこりした。今を生きている顔だと思った。おばあさんのうしろ姿を見続けながら、「ごくろうさまです」と言った。

一時間半近く軽やかにペダルを踏んでいると、佐田沈下橋に到着する。

欄干のないその長い木橋を走っていると、風がいくらか吹いてくる。ドイツから被ってきた黒帽子が飛ばされそうになったので、片手でそれを軽く押さえながら、三百メートルはありそうな橋を漕ぎ続けた。なんと心地良いのだ。

さらに行くくと、屋形船と書かれた看板が目にとまった。そこへ向った。

一月中旬のこの時期、運航しているのだろうかと半信半疑の思いで、しばらく船着場に立っていた。案の定、誰も出て来ない。しば犬が歓迎するだけであった。なおも立っていた。と、一人の男性が現れた。

「乗りますか」

「ええ、客はわたしだけのようですが、よろしいのですか」

「一人でも、舟を出しますよ」

「では、お願いします」

靴を脱いで、川舟に腰を下ろすと、船頭さんはすべての障子を開けた。十名ほど座ることが出来る席に、私ひとりだけである。動き出した。

「今日はいい天気や。こんな日は滅多にないね。ほら、むこうに佐田沈下橋が見えるでしょ」

「ええ、風情がありますね。江戸時代の北斎の絵に、描かれているような」

冬の陽光が青緑色の水に反射して、暑さを感じるほどとなった。

「私は大阪と東京に、二十年間住んでいたね。ここは本当に自然が豊かで、水がきれいだ。東京の墨田川と大阪の淀川は汚くて、浮遊ゴミだらけだった。でも、あれで日本の経済は成長したの shouldn't you ね。ほら、あそこにサギが立っているでしょ。向こうの岸辺には、セキレイもいるね」

船頭さんが背の黒い小鳥たちのいる方向を指差した。

「私の子供のころは、あの小鳥たちが小さな石ころの数ほどいたが、PCBやら農薬でしだいに減ってしまった。今はタバコの栽培に農薬を使用しなくなったが、昔は目が痛くなるほどだった」

この船頭さんと話していると、自然環境をととても大切にしていることを、言葉の端々から窺うことができるのだった。

「魚は八十五種類ほどで、うなぎやエビやあゆ、それにゴリや青のり、とくに、ここで秋に獲れるうなぎは身が厚くてうまいね。子供のころ、父に連れられ、ヤリで魚獲りをしたものだった。今はこの川に千五百人の漁師がいるよ」

「そんなに多くの人が」

「さつき、船着場の下の大きな石上に、小さな魚が多くいたでしょ。暖かくなると、あれらの魚たちで、石が見えなくなるよ」

船頭さんは、四季折々の自然の美しさを熱心に語った。自然を愛してやまない人のようだ。

「ほら、あそこにひん曲がってしまったヤナギの樹が見えるでしょ。昨年の大きな台風で、あのようになってしまった。橋も壊れ、この川は荒れると、本当に恐ろしい川となってしまふ。私の家の二階まで、水かさが増したこともあった。でも、それが自然の姿でしょ」

この人の語るのを聴いていると、一途のところがあつて、曲げないような性格、土佐のいごっそうという語が浮かんでくる。

「私はここで船を出しているが、毎日このような景色をお客さんと一緒に眺め、それがたのしい。嫌なときはないね」

周りの風景を見ている船頭さんの目は、この川の清流のように輝いていた。

一時間の船旅が終わったあと、再び自転車に乗ってペダルを漕ぎ出すと、体全体がこの地方の大きに触れ、心までよるこんでいるのがわかる。ゆっくりと走り続けた。

十三 水の都松江

関西空港に朝八時に降り立ったあと、大阪駅構内で幕の内弁当を買ってから松江行きの列車に乗った。

しばらくしてから折り箱を開けると、おかずがぎつしりと詰まっている。数えると、十二種類ある。それらを一つ一つのなかに入れると、弾け飛んでいくような味である。それに、日本のお米の美味しいこと、ご飯をゆっくりとつぶすようにして食べ続けた。

さあ、これから松江、九州への旅がはじまるのだ。私の胸は躍っていた。

岡山から島根の県境に来ると、白いものが降りはじめてくる。それも数メートルの先が見えないほどの雪降りだ。そのなかを列車はゴトンゴトンと音を発しながら、山間を縫うように走り続けていた。、辺り一面は、もう白一色である。

一月下旬の雪化粧は、目に輝きをもたらし、心に清さをもたらしてくれる。氷柱が農家の藁葺き屋根の下に、太く垂れ下がっているのが見える。

二十数年前、日本からドイツに移り住んだ頃、石で造られた家の中で、ドイツ人がどのような暮らしをしているのかを知ることができなかった。それと同じことが、今の自分に言えた。今、目に映る日本の家屋を見て、この時間帯、皆が何をしているのかを想像することができなくなっていた。一体、これはどうしたことか。二十数年間日本で暮らしていなかったとはいえ、考え込みながら雪景色を眺めていた。ただ、言えることは、日本の社会全体が自分にはわからなくなってきたことだ。

松江に近づくにつれて雪は止み、列車が駅に着いた時には、どの屋根の上にも白い雪がわずかにのっけているだけである。駅前に立つと、ビジネスホテルの看板が目にとまった。そこに連絡すると、空室はあるとのこと。リュックを背負い、歩き出した。

十数分で目指す宿に到着する。五階の小さな窓からは穴道湖が望め、なかなかの展望である。狭い室内には風呂も付いている。早速、湯船に浸かった。

湯上りのままベッドに横になると、疲れが出てきたのか、自然と目が閉じた。

目を覚ますと、一時間半が過ぎていた。夕食を摂るために商店街に出ると、通りに建ち並ぶ店舗の四分の一近くは、シャッターが下りている。それに、行き交う人の姿がなく、通りに活気がない、殺風景なのである。

しばらく歩いていると、出雲そば・うどんと書かれた暖簾を目にしたので、ガラガラと戸を開けて中に入った。

注文をして五分もしないうちに、透明な汁に入った白いうどんが出てくる。それを食べ出すと、溶けてしまうような味だ。うどんがこんなに艶と腰があるとは、知らなかった。

代金を払おうとレジのところに行くと、調理場から人が出てきた。

「久しぶりに、おいしいうどんを食べました」

そうお礼をのべると、

「ありがとう」

と、その人は応えた。店の奥には、稲穂の垂れた神棚がある。毎朝、この方はその前で手を合わせているのだろうと想像しながら店を出た。

コンビニで、明日の朝食用の食パンと蜂蜜、それに海外に安くかけることができる電話

カードを購入してから、公衆用の電話ボックスに行き、ダイヤルを回すと、妻の声が聞こえてくる。昨日飛行場で別れた彼女と、五分ほど話してから宿へ戻った。

翌朝、昨日買った食パンに蜂蜜をぬって、朝食を済ましてから外に出た。

歩いて十分ほどで、松江城前である。朝九時のせいかわか、観光客の姿を見かけない。

門を潜ると、十名ほどの消防服を着た人たちが、これから本丸に放水しようとしているところだった。ホースから水が勢よく出はじめた。と、城の瓦屋根に残っていた雪が、水とともにザーと音を立てながら、落下した。

その様子を見たあと、放水を終えた二人の女性に、

「あなた方は、女性消防隊員ですか」と、訊ねた。

「いいえ、この売店で働いているものです。今日は、年に一回行われる防災の日なので。私たち職員は、その訓練をしていたのです。いい日に見学に来ましたね」

一人の中年女性はそう答えながら、自分の持ち場へ帰って行った。

城の前に立っていると、寒風が吹き抜け、体が冷えはじめてくる。このような時は動くのが一番いいだろうと思い、武家屋敷まで歩くことにした。

少し行くと、民家前で箒を持ちながら掃除をしている五十半ばの女性がいたので、話しかけた。

「あそこの垣根に咲いている赤い花は、サザンカですよね」

「ええ、そうです」

「庭に黄色く実っているのは、夏みかんですか」

「いいえ、ダイダイです。ほら、正月に丸い餅の上ののっているもので、縁起がいいとされている果実なのですよ。あれは緑色になったりして、一年中ずっと実っているのですよ」

地元の人のように思え、さらに訊ねた。

「松江人の気質というか、性格的なものは、どのようなものでしょうか」

女性は少し間をおいてから、

「新しいことを、なかなか取り入れないわね。私はここに嫁いで来ましたが、そのことを、しばしば感じるわ」

と、箒を静かに動かしながら答えた。

「商店街を歩いて感じたのですが、何か活気が感じられないように映ったのです。それと、松江までの列車の便はよくないですね」

「財政的に、この町はそうよくありませんよ。若い人たちは外へ出て行き、地方はさびれてしまい、鉄道の便は悪いし」

そう言ったあと、女性は二人の息子が都会で暮らしている話をはじめた。

それを聞き終えたのち、彼女に、

「でも、息子さんたちも、この町がふるさとになって、懐かしむときが来るのでしょね」と言う

「そうなるよ、いいわね」

と、応えた。

「いつか、そうなりますよ。自分が生まれ、育まれた地を大切に思うときが…」

私たちが立ち話をしていると、向こうから中学生数人がトレーニング姿で走って来る。

その彼らに、女性が、「お早う」と声をかけた。「おはようございます」との声が返ってきた。彼らが大人になった時、この女性に声をかけられたことを、想い出す日がくることだろう。ふるさとを懐かしむ日がくるに違いない。

さらに歩いて行くと、中流藩士が住んでいた屋敷前に出た。

門を潜り、家の造りや庭などを眺めていると、質実剛健な武家の暮らし振りが伝わってくる。と同時に、背筋が自然に凜と伸びてくるのだった。

屋敷の敷地内を歩いてから、数軒先に建つ武家屋敷の一つである、西洋人のハーン氏（小泉八雲）が住んでいた家に行き、玄関で靴を脱いだ。そして、なかに入ると、当時作られた透明な窓ガラスの先に、枯山水の庭が見えた。

彼が日本に来て、日本人の妻を持ち、子供ができ、その十四年間の暮らしがどのようなものであったのだろうかと考えた。特に、東京で亡くなった彼が、異国の地の文化と宗教のはざ間で死をむかえた気持ちは、どのようなものだったのだろうか。

それを思うと、私と重なる場所もあって、人ごととは思えなくなってしまった。自分のいのちを何に賭け、何を見つめて生きていたのだろうか。妻と子、そこに流れるのは、「愛する」ということだろうか。畳の上でしばらく座り続けたのち、ゆっくりと立ち上がって屋敷の外に出た。

今度は、十名ほどの人が乗れる小船での堀川めぐりである。靴を脱ぎ、コタツに足を伸ばしての四十五分間だ。

いくつもの小さな橋を潜り、風情のある景色を目にしながら進むのだが、黄オレンジ色の透明でないビニール屋根があるために、全望できない。

マイクで説明している船頭さんに、話しかけた。

「この色つきのビニール屋根に代わって、透明なものにしたらいのに」

「透ける屋根にしたこともありましたが、ほこりが目についてしまったので、止めました」それを聴き、口には出さなかったが、日本人らしくない考えだと思った。きめ細かい配り、目配りをするのが日本人なのに。ほこりが目につくなら、屋根を掃除すればいいのだ。まあ、他に理由があったのかも知れないが、それにしても見づらいものだ。

小船から降りると、二時過ぎである。何かを口に入れようと歩いていると、至るところで菓子店を目にする。ここは競って軒を出しているように見え、ある店に入った。

しばらくすると、注文した餅入りぜんざいが出てきた。それを口に入れると、餅が冷えた胃に入ってくるのがわかる。「うまい」の言葉が漏れた。さらに草団子とゴマ団子、それにきな粉団子など六つを注文する。この味だと思いつつ、さらに四つの団子を追加した。宿に戻り、自室の温泉風呂に浸かっていると、体が少しずつ暖まるにつれて疲れも出てきたので、ベッドに横たわった。

目を開けると、外は暗くなっていた。「さあ、今日の夕食は何にしようか」と思いつつ、胃を躍らせながら外に出た。外国に長く住んでいるので、昔食べ慣れた味に飢えている。日本食なら、何でも美味しく口に入るのである。

翌朝ベッドから起き出して、カーテンを開けると、今日も雲が垂れ下がり、雪が降っている。外は、寒そうだ。

チェックアウトしてから、再びリュックを担ぎ、かさを差しながら松江駅へ向った。大小のいくつもの橋を渡っていると、ここが水の都だということを知るのだった。

十四 九州の地

薩摩

鹿児島中央駅に到着し、駅構内にあった電話帳で公共の宿を調べ、連絡すると、空き室があるとのこと。そこに投宿することにした。

駅からかなり離れたところだ。バスの便があったが、地元の人と町の存在感を肌で知るには、歩くのがいいだろうと思い、小雨が降るなか、かさを差して歩き出した。

一月下旬の風は冷たい。会社の制服を着たタイトスカート女性の足が、早足で前を通り過ぎて行った。三十分もすると、リュックが肩にくい込んで重たく感じはじめた。目指す宿まで、あとわずかだ。

部屋に入ると、前面の大きな窓に、雲で覆われた桜島がわずかに望める。いい眺めだ。これで一泊五千円なのはいい。六階には、外を展望できる温泉風呂がある。冷えた体を暖めようと、早速その風呂場へ向かった。

広い湯船には、まだ午後三時のせい、私ひとりだけである。山の歌が口から自然と出てくるのだった。湯船に浸かつては、出たり入ったりしていた。

部屋に戻り、室内のテレビのスイッチをつけると、国会中継が映し出されてくる。それを観ていると、日本の社会保障はドイツの社会保障とはかなり違い、経済的に喘いでいる人たちにとっては、不安が相常に伴うのではないだろうか。もし私の家族が日本で生活していたら、暮らして行けるだろうかと思っただ。

医療や年金や介護の論議が与党と野党とで、一時間以上続いていたが、聴いている方は首を傾げなくなるようなやり取りである。どうもスッキリしない。

スイッチを切ってから外に出ると、まだ雨が降り続けている。皆晴れを望んでいるだろうに。社会保障を整えることを早急にしなければならぬだろう。それには、政治家が筋の通った哲学を持ち、自分も納税者であることをしっかりと自覚すべきだ。国のため、国民のために税があるのだから。それを動かすのが政治家の務めだ。

このような時、西郷隆盛や大久保利通だったら、どうしただろうと思っただ。いや、自分だったらどうするかだ。これが大切だ。ドイツに住みながらも、日本の国籍を持つ私なのだから。たとえ、今は日本に税を納めていなくても。

夕食を終えてから、鹿児島市内に住んでいる知人に電話をかけると、彼の奥さんが出た。

「主人は今体調が悪いので、あとでこちらから連絡します」

それから一時間ほどして、彼から電話がかかってきた。

「残念だが、外に出られる状態ではないので、明日会うことはできそうにない。自分の知り合いの人をそちらにまわすから」

「会えないのは残念だ。でも、体が悪いようでは仕方ないな。人をこちらへ寄越してくれとのことだが、それはいいよ」

「いや、鹿児島に来たのだから、地元の人に車で案内してもらおうのが一番いい。とにかく、誰かを向かわせるから」

そう言つて、彼は何度も人をよこすと云うので、
「それでは、お願いする」

と、応えて受話器を置いた。鹿児島生まれの、情の厚い彼の言葉だ。

翌朝の九時半、昨日電話した人の知人が宿を訪れてきた。早速、その人の運転する車で案内してもらつたことになった。

先ず、一時間ほど南下して知覧に到着する。まだ花が咲いていない桜並木を通つて、車を駐車場に置き、一階建ての平たい特攻平和会館に入った。

ホールの中央には、長さ八く九メートル、両翼十二メートルの飛行機が置かれてあり、壁には遺影、その下には遺書などが並んでいた。出撃寸前および前夜に書かれた手紙や日記、それに遺言だ。

それらを読んでいると、目頭が熱くなつてくる。近くで、すすり泣く声が聞こえ、それがいつそうこちらの感情を高揚させ、涙を誘うのである。

「あす散ると 思いもされぬ さくらかな」

「人の世は別れるものと知りながら 別れはなごてかくも悲しき」

「俺が死んだら 何人泣くべ」

「……。では、お母さん、私は笑つて元気で征きます」

十七才から二十二才の若い人たちが、この地から飛んでいったのだ。遺影が二重に見える。隣にいた八十歳ぐらいの男性が、

「あと少しで終戦になつたのに」

と呟きながら、ハンカチを手にして読んでいた。その向こうにいる若い女性は、食い入るようにして日記に目を落としている。特攻勇士と同じぐらいの年齢だろう。鼻をシクシクとすすっている。

「お母さん」という語を、至るところで目にする。飛び立つ数時間前に、母のことを想い、そのことよつて死への不安が和らいだことだろう。若い彼らが愛すべくは、母だろう。彼らが帰るところは母のところだ。

一日、約千人が訪れるこの館、千の涙で埋まるところだ。

訪問者が書き綴つたノートを読んでみると、「平和」「いのち」「生きる」の語を多く目にする。世界平和を祈るのみだ。

外に出ると、昼食の時刻なのだが、摂る気がしない。近くに、薩摩の小京都といわれる武家屋敷の枯山水式庭園に行ったが、心はまだ沈んでだまま。落ち着いて見学できない。

しばらくすると、彼が、「天然の砂蒸し風呂があるところに案内します」と言つたので、それに従つた。

薩摩富士と呼ばれる開聞岳を見ながら走り続け、指宿の町に入った。そのあと、私たち二人は千円を払い、浴衣に着替え、タオルを持って海岸に降りた。そして、砂の上に横になった。と、地元のおばさんがシャベルで、熱い砂を体にかけてはじめた。

シャベルを持つているおばさんに声をかけた。

「今、おばさんがかけてくれた砂、お腹のところがいやに重く感じるけど」

「それじゃ、砂を少し取りましょう」

お腹の上のつた砂を手でさするようにして、払ってくれる。

「この砂の温度は、どのくらいなのでしょう」

「五十度はあるよ」

「今、何キロの砂がのっているのですか」

「二十キロはあるよ」

汗が、次第に噴き出し出してくる。波立つ音が聞こえ、海岸に吹く風は冷たい。血液が脈打つのを全身に感じ出す。

二十分も過ぎただろうか、自分で砂を取りのぞき、立ち上がって温泉の大風呂に行った。しばらくしてから、そこを出ると、潮風が体全体になびき、爽快な気持ちになってくる。歩く足が自然と弾んできた。また一つ、いい経験をしたと思いつつながら車に乗った。

薩摩半島の海岸沿いのルートを走って、鹿児島市へ向かった。

案内してくれている五十歳の人に、

「鹿児島男性の性格は、どのようなものでしょうか」

と訊ねると、

「情が深く、厚いことでしょうか」

と、答えて。

「では、女性は何？」

「よく働き、しつかりして、夫をたてることかな」

その言葉を聞き、薩摩弁の「よかにせ、よかおごじよ」が浮かんだ。

翌朝、宿で目が覚め、部屋のカーテンを引くと、厚い雲が垂れ下がっている。桜島の裾野がわずかに望めるだけである。日本に来て六日目となるが、晴れた日はまだ一日としてない。

室内で、昨日コンビニで買った食パンに蜂蜜をたっぷりかけての朝食を摂ってから、汚れたシャツと下着を洗い、洗面所に干してから外に出た。

と、ちようどその時、鹿児島屈指の名所である島津家別邸の磯庭園（仙巖園）行きのバスが目の前を通ったので、それに乗った。

庭園の受付で入場料を払ってから中に入ると、きれいに手入れされているクロマツの木々が目に飛び込んでくる。南国の地を思わせるヤシの木も目にする。それに、緋色の花をつけたカンヒザクラがこの寒さのなかで咲いている。広々とした庭園を歩いていると、ゆったりとした気持ちになってくるのだった。

視線を遠くに向けると、四キロメートル先の桜島の山容がうつすらと望め、私の目の高さには海の地平線が見える。そこに大きな白帆が二隻浮いている。それらを借景とした庭風景は見事だ。美しい。大自然を取り入れた風光を眺め続けた。

今度は、目を庭園に移した。と、大きな石の上を流れている小川の側に、梅の花が咲いているのが見えた。

そこに近づくと、淡い香りが辺り一面に漂っている。二人の中年女性がその花を仰ぎながら、「かわいいわね。かわいいわね」と声を上げていている。春の訪れを知るのだった。

裏山へ通じる小道があったので、足を踏み入れた。

苔の生えた石段と土の織りなす登り道を、ゆっくりと歩き出した。

足元には、枯葉が一センチほど積もっていて、その上に様々な木の実や椿の花が落ちている。保津川を流れる水の音が聞こえ、至るところで小鳥たちが囀っている。この道を島津家の人たちは、下界の俗念を忘れて歩いていたことだろう。

かなり急な坂道を三十分ほどで登り切ると、広い海の上に、雲に被われた桜島がぼんやりと見え出した。晴れていたら、ここはさぞ雄大な景色となるだろう。これが世界だと思えるのではないだろうか。眺め続けた。

下に降りて、庭園内に建っている御殿を見学したり、その周辺を散策したりしていると、詩をうたいたい気分になった。それだけ繊細な景観がこの庭園にはある。島津家の人たちは、文才があつたのではないだろうか。

庭園の隣に尚古集成館が建つていたので、寄ってみると、島津斉彬に関する資料を多くある。近代日本を知るにはいいところだ。

一時間ほどの見学を終えてから、館外に出た。

バスに乗って宿に戻る途中、新幹線が博多から鹿児島市まで全線開通したら、多くの観光客があつた磯庭園を訪れるだろう。今は韓国と中国の人たちが多いが、欧米からも人がやつて来るだろう。先ほど目にした雄大な自然と、日本独特の心情を映し出すあの風景に、多くの外国人はきつと感嘆することだろう。妻に見せたいところだ。

バスから降りて、宿に着く三百メートルほど手前で、西郷隆盛像の周辺を掃除していた青年がいたので声をかけた。

「この溝のなかに、大きなカラフルな鯉を数知れず目にしましたが、誰が世話をしているのですか」

「県です。三百メートルの流れに、無数の鯉がいます」

「きれいな水ですね。どこから、流れてくるのですか」

「あのこんもりしたところからです」

そう言つて、青年は西郷隆盛が立てこもった城山を指差した。この鯉にも、この青年にも、薩摩の血が今も流れているかのように思えるのだった。

翌朝、起き出してカーテンを引くが、今日も桜島の全容を目にすることができない。

部屋でパンを食べ終えてから窓から外を見ると、雲の合間に一筋の青空が走っている。

ひよつとすると晴れてくるかも知れないと思いつながら、洗面室に行き、昨晚干した下着を取つて、それをリュックに詰め、チェックアウトをしてから宿を出た。

阿蘇

鹿児島中央駅から列車に乗り、熊本駅で乗り換える頃になると、抜けるような青空となつていた。が、一時間が過ぎて阿蘇駅に近づくにつれて、また雲が張り出してくる。

阿蘇駅で降りて遠くを望むと、山々の頂上付近は雪で覆われていた。阿蘇山火口まで十五キロの距離だ。最初からバスに乗る気はない。寒いことだし、体を暖めるためにも歩くことにした。

少し行くと、お腹が減ってきたので、どこかで軽いものを口に入れようと歩いていると、手作り甘酒まんじゅうと書かれた旗が風になびいているのが目に留まった。早速、そこに立ち寄った。

小さな店内には誰もいない。「鈴を振ってください」と記された張り紙を見たので、それを鳴らすと、隣の家から六十歳ぐらいのおばさんが出てきた。

まんじゅうを二つ買い、店内にあった椅子に腰かけて、食べはじめた。

素朴な手作りの味だ。さらに、二つ注文した。

「この人ですか。いい味です」

「ありがとうございます。ここに嫁いでもう四十年が過ぎたわ」

「この店の歴史は長いのですか」

「九十歳の義父、それに九十六歳の義母の看病をして、最近二人とも亡くなってから、この店を出したわ」

「それは、大変でしたね」

「ありがとうございます。二人が逝ってから、時間ができてね。料理が好きだったので、この小さな店をはじめたわね。今は、こうやっているのがたのしいわ」

顔を輝やせながら、おばさんは語った。そして、自分の子供三人のこと、それに優しいお嫁さんのことなどをにこにこした顔で話し出した。旅をして、地元の人との出会いがたのしいのは、このような時だ。

三十分近く会話を交わしてから、再びリュックを背負い、登り道を一時間半ほど歩き続けていた。辺りは数センチの雪で覆われている。リュックが肩にくい込んで、重たく感じ出す。そこで、バスで行くことにした。ちょうど、阿蘇山西駅行きのバスが来たので、それに乗った。

終点で降りてから、火口まで自分の足で進もうとしたが、もう若くはない。空中ケーブルに乗って、運んでもらうことにした。

約百名の人たちと一緒に、体を触れ合わせながら立ち続けていた。周囲からは、韓国語と中国語だけが耳に入ってくる。日本人は私一人だけのようだ。時代は変わったものだと思いつつ、団体客の彼らに混じって、ケーブルの窓から外を眺めていた。

火口のところに立つと、硫黄の匂いが漂ってくる。下をのぞくと、白い煙がモクモクと昇っている。今も活動を続けている阿蘇山だ。噴煙と雪と雲とで、周辺は白一色である。

空中ケーブルが発着する広場前に戻ると、火口をバックに、韓国人たちや中国人たちが、スナップ写真をさかんに撮り合っていた。

目の前には、雪で覆われた緩やかなカーブの山々が連なっている。五月になったら、この付近一帯は緑の草原となって、さぞ壮大なパノラマを呈することだろう。

阿蘇駅に戻り、観光所で温泉宿を探してもらい、そこへ向かった。

バスに乗って十分で内牧温泉に着き、小さな宿でチェックインをしてから、直ぐに共同の湯船に入った。

冷えた足がだんだんと暖かくなってくる。この湯は透明ではなく、濁った色のぬるま湯だ。長く浸かっていられるのがいい。

朝、部屋の窓から外をのぞくと、快晴である。

いつものように食パンに蜂蜜をぬって食べてから、リュックを担いで外に出た。

このように晴れ上がった日は、歩くにかぎる。阿蘇駅までかなりあったが、自分の足で向かった。

温泉街を出ると、左右に田圃が続き、畦道には枯れたススキが冬の陽光を浴びて揺れている。氷点下のだろう、白い霜が田圃に降りて、それらが時々キラッキラッと銀色に輝き、吐く息は白い。

遠くを望むと、外輪山が連なり、阿蘇五岳の一つから、噴煙が青空へ湧き昇っているのが見える。

それを眺めながら、歩き続けた。

島原

いよいよSさんとの再会だ。

ちやうど二十年前のことだった。Sさんと彼女の友人がチュービンゲンに訪ねて来たことがあった。その時、二人を連れてスイスの山々とドイツのいくつかの町を、車で案内したことがあった。それ以来、彼女と手紙のやり取りをするようになった。

看護師としての一日の仕事を終えたSさんが、約束したところに現れたのは、夕方の六時過ぎだった。彼女の運転する車で、島原の自宅へ向かった。

玄関に入るや、彼女が、

「横井さんが来なさった」

と声を上げると、

「いらっしやい」

との女性たちの声が、聞こえてくる。

靴を脱ぎ、居間に入ると、娘さん三人が一人ひとりお辞儀をして、自分の名前を言った。

三人の名前は、Sさんの手紙のなかでしばしば書かれてあったので、よく知っていた。名前と顔がやっと一致する。娘たちのうしろには、彼女たちのお父さんがニコニコした顔で立っていた。

夕食になった。テーブルの上には、刺身とごぼうと赤い魚のお汁、それにSさんの夫が栽培をしているトマトなどが並んでいた。二月上旬のこの季節に、トマトを食べられるとは思ってもいなかった。口に入れると、しまった硬さと新鮮な匂いで、歯と舌が躍ったようになった。

いくつもトマトを食べている私を見て、Sさんがトマトをさらにお皿に盛ってくれる。それに長旅の疲れで胃腸が弱ってきていることを、彼女は子供たちに伝えてあったのか、次女の娘がダイコンをすって、私の目の前に置いてくれる。それを口に入れながら、人でお互いの家族のことなどを話し合いながらの賑やかな夕餉となっていた。

夕食後も、ご夫妻それに中学と高校の娘たち三人を加えての歓談となって、私たちは、夜中まで話に花が咲いていた。

夜が更け、眠気を覚えた私は、畳の上に敷いた布団に入った。と、布に包まれた暖かいプラスチックボトルの湯が足元を暖かくしてくれる。すぐに目が閉じた。

翌朝、テーブルに着くと、ご飯での食事。それもお赤飯である。

ゆつくりと食べ終えてから、Sさんの夫が栽培しているトマトのビニールハウスに行くと冬に熟れたトマトの前で、彼が私を待っていた。その彼から栽培方法、それに自分で工夫して作ったハウスの効果についての話を聴いていた。

再び家に戻り、こんどはSさんに連れられて、口之津町歴史民族資料館へ向かった。

車で十五分ほど走ると、資料館があった。なかに入ると、昔から現代まで、この地域の人たちが使ってきた展示品があったので、それらを見て廻っていた。と、からゆきさんと記された部屋を目にしたので、足を踏み入れると、胸を突かれる思いとなった。今までに「からゆきさん」との言葉を何かで聞いたことはあったが、詳しい内容は知らなかった。頭をこんぼうで、打たれたような心境になった。

江戸末期から明治・大正・昭和初期にかけて、貧しい農家では、経済的困窮からの理由で、若い娘たちを売らなければならぬ状況に陥っていた。それも、彼女たちは何をするかも告げられずに、マレーシアやインドネシアやボルネオなどに連れて行かれ、娼婦としての生活を強いられた歴史があったのだ。

多額な借金を背負わされた彼女たちは、当地で売春婦として働くしかなく、当地の熱病や性病に罹って亡くなる人も少なくなかった。日本に戻りたくとも帰れず、その数は、知ることができないほど多かった。

彼女たちと同様に、自分も言語や習慣風俗、それに食事も違う国で暮らしている。でも、私の場合は、自分の意思で異国の地へ行ったが、彼女たちは違う。その心境はいかなるものだっただろうか。想像を絶する。一体、誰が彼女たちの苦しみや辛さを聴いてくれたのだろうか。愛されるはずの親から離れ、彼女たちの愛する心は何に向かったのか。「愛する」という心無しで、どのようにして最後まで生き抜いて行けるのだろうか。

彼女たちのことは、島原の子守唄で歌われている。なんと悲しい歌詞なのだろう。

この室を出てから、他のものを見ても目に入ってこない。傍にいるSさんに、「からゆきさんについてもっと知りたいので、彼女たちについて書かれた本などがあつたら、あとで送ってください」

とお願ひしてから、資料館を出た。そして、再び車に乗り、こんどは雲仙岳災害記念館へ向かった。

館内に入ると、女性ガイドたちが至るところで説明をしている姿を目にする。私たちは、平成大噴火の火砕流と土石流をドーム型スクリーンで再現している劇場に足を踏み入れたと、映像とともに自分の立っている床が動き、熱風が吹き出してくる。類似体験ができるようになっていた。

カメラマンやタクシー運転手など、四十三名の命を奪った一九九一年の噴火。Sさんは当時この島原の病院に勤めていた人でもあった。当時の有様を悲愴な面持ちで語った。

館外に出ると、Sさんが頂上付近に積もった雪の雲仙を指差して、

「あの山の横を、通って行きましょう」と言つて、車のエンジンかけた。

緩やかな坂道を十分ほど走っていると、周囲は白い世界になった。ゆっくりと走り続けて、家に戻った。

八時過ぎ、再び六人でテーブルを囲んでの夕食となった。

それが済むと、三人の娘さんたちが後片付けをはじめた。その彼女たちに、

「からゆきさんと言う語を、知っている？」と、訊いた。

「いいえ、知りません」

三人とも口を揃えて答えた。からゆきさんのことは、地元の学校授業のなかでも教えていないのだ。年がまだ若いせいだからだろうか。でも、高校生の長女には、事実を伝えてもいいのではないか。

歴史の事実を伝えることは、未来を見つめることにもなる。臭いものにフタをしてはならない。臭いものを見つめてこそ、次に何をするかの行動が生じ、自ずと未来は拓けてくるのだから。歴史が人間を作っていると思つている私でもある。日本の学校教育は、どう

なっているのだろうかと首を傾げた。また私自身、この歳になっても「からゆきさん」についてよく知らなかったことに、猛反省をした。

皆が再びテーブルに集まって、ゲームをすることになった。ビンゴゲームである。ビリになった人が歌を唄うことになった。

三回して、高校生の長女とSさん、それに私がビリとなった。中島みゆきの歌が好きな彼女は、ギターを弾きながら唄い、私は知床旅情、もう誰彼なしに皆で唄ったり、ピアノなどを弾いたりしての時間となっていた。

しばらくして、一人ひとりが願いごとを紙に書き、それを読み上げた。最後は、Sさんの「鬼はそと、福は内」の声で終わった。今日は、節分なのである。

布団に潜り込んだのは、昨夜に続いて十二時過ぎだった。

翌朝、三人の娘たちは学校へ。ご夫妻と一緒に食事を済ませてから、ひとり散歩に出かけた。少し歩いて行くと、見晴らしのよいところに出た。

目の前には、厚く垂れ下がった雲の下、有明海が広がっている。と、灰色の空にほんの小さな穴が一つ開き、太陽の光線が海に差し込みはじめた。それにつれて、海面が光り輝き出した。

それを見つめっていると、この美しい日本の海の光景を最後に目にしながら、若い娘たちが海外に売られたことが浮かんできてくる。彼女たちの無念さが伝わってくる。と同時に、そんな時代があったのだ。これを決して忘れてはいけないと思いつつ、海を眺め続けた。家に戻ると、Sさんがキッチンでおにぎりや玉子焼きなどを作っている最中だった。その彼女としばらく話をしていると、別れの時刻となった。

ご夫妻と一緒に家の前で記念写真を撮ってから、Sさんの運転する車に座り、駅まで行き、手作りのお弁当を持って列車に乗った。

- 大雪山の春 二〇〇九年 五月十六日～二十二日
東北の人たちと風景 二〇〇八年 五月七日～十六日
育ったところ 二〇一〇年 四月二十五～二十七日
越後の山と良寛 二〇〇四年 九月二十一日～二十四日
佐渡の里山風景と会津 二〇〇四年 九月二十五日～十月二日
草津温泉の民俗 二〇一六年 十月三十～十一月二日
父子旅 一九九五年 五月二十日～六月七日
合掌造りの白川郷と五箇山 二〇〇九年 五月二十九～三十一
春の京都四人 一九九九年 三月二十九日～四月四日
奈良の大和路 二〇〇二年 十月二十一～二十五日
広島と長崎の祈り 二〇〇二年～二〇〇九年
土佐の人と四万十川の自然 二〇〇七年 一月十三日～十九日
水の都松江 二〇〇八年 一月二十五日～一月二十七日
九州の地 二〇〇八年 一月二十八日～二月四日